

剣士列伝 仮面ライダーシャムシール

雪見柚餅子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖剣に選ばれた剣士達は、世界を守るべく日夜戦っている。
しかし、それが全ての剣士に当て嵌まるわけではない。

これは聖剣に選ばれながら、自らの欲を満たすためだけに戦う一人の剣士の物語。

※この作品には「劇場短編 仮面ライダーセイバー 不死鳥の剣士と破滅の本」の若干のネタバレが混じっています。ご注意ください。

※3／24 必殺技の音声を若干変更しました。ストーリーには特に影響は有りません。

※5／2 原作の展開次第で、若干内容の修正が行われる可能性があります。ご了承ください。

※5／16 設定の一部変更及び修正を行いました。

目次

序章	剣を振るうは、己のために。	1
第1章	剣士は、強欲と邂逅する。	10
第2章	追憶する、夢と共に。	17
第3章	頁は捲れ、蛇を起こす。	24
第4章	ぶつかり合う、剣と信念。	34
仮面ライダーシャムシール	資料	43
第5章	来訪する、二つの剣。	47
第6章	破滅の剣士、再会の時。	55
第7章	一族の罪、断ち切るために。	64
第8章	優しい人、けれど私は。	74
第9章	迫る暗雲、立ち上がる剣士。	84
第10章	明かされる真実、偽りの聖剣。	93
第11章	目覚めるは、慈悲の剣。	103
第12章	あの時の借り、ここで返すよ。	115
第13章	その剣士は、第三の覇者。	123
第14章	慈悲が齎す、永久の眠り。	131
第15章	真実を、知るために。	141
第16章	迷える者に、迫る毒牙。	150
仮面ライダーブロード&仮面ライダーエストック	資料	158
第17章	相對する、幻と闇。	165
第18章	乱れる戦場に、降り立つ者は。	175
第19章	求める力、戦う意味。	183
第20章	シナリオを、変えるべく。	191

序章 剣を振るうは、己のために。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル。いきなりだけど、今凄いことが起きてるんだ」

「この世界には、様々な聖剣を持った剣士が居て、日夜人知れず世界を守るべく戦っているんだけど、実は全ての剣士がそのために剣を振るっているわけじゃないんだよ」

「中には世界を危機に陥れるようなことをしたことで、封印された凶悪な剣士も居るんです」

「そしてどうやら、その剣士の一人の封印が解け、復活してしまっただうなんだ」

「その剣士の名はエドナ。今、彼女が何をしているのか、少しだけ覗いてみよう……」

ある日の夕方。季節は夏で、日が傾いたにも拘らず、じめじめとした暑さが周囲を包む。

そんな中、私は商店街の一角にある屋台で麺を啜っていた。

濃厚な茶色いスープに肉や卵が入った麺料理。初めて見るこの料理の名は「しょうゆらーめん」と言うらしい。

中々面白い味で、既に八杯も食べてしまった。

「お代わり頂戴」

でも、私の飢えは未だに満たされない。ずっと眠り続けていたせいとか、いくら食べても満腹にならないのだ。

それにしても、私が解放されたのに、他の二人はどうしているのだろうか。気配は感じられないため、多分まだ封印されているのだろうけど……。もし気が向いたら、解放しても良いかもしれない。そもそも私の目的のためには、あの本が必要だし……。そう考えながら、私

は井に浮いた茹で卵を齧る。

やはり、このスープの味が染みた卵は絶品だ。どんどん箸が進んでしまう。

「お代わり頂戴」

そして私はまた店主に井を差し出し、少しでもお腹を満たすため次の麺を強請る。

店主も私がここまで食べるとは思っていなかったのか、どこか渋い表情を見せるが、黙って注文を受け取る姿は好感が持てる。

やはり自分のことに口出しされると、腹が立つものだ。どこその連中にも見習ってもらいたい。

そんなことを考えながら静かに食事を続けていたが、突如として異変が起きる。

商店街を取り囲むように光が溢れ、気付くと周囲の風景は街では無く鬱蒼と木々が生い茂る森へと変わっていたのだ。一迅の風が吹くと同時に、無数のシャボン玉が舞い、辺りを埋め尽くす。その光景はまさに幻想的だろう。

私はこの現象を知ってる。この世界は「ワンダーワールド」。メギドと呼ばれる怪人によって繋がった異世界で、時間経過と共に現実世界を侵食するという性質がある。

「ふっふっふっ、大量大量……これだけの人間が居れば、素晴らしい軍勢になるだろう！」

響き渡る不気味な声と共に、私の視界の端で何かが空中から降りて来た。恐らくあれが、ワンダーワールドを生み出したメギドだろう。両腕に黒い皮膜を持つということは、コウモリがモチーフだろうか？

メギドの姿を捉えた人々は悲鳴を上げて逃げ出そうとするが、そんな彼らを囲むように何かが姿を現す。

「あゝあゝ……」

「なっ、何だ!？」

突然現れたそれに、人々は恐怖の表情を見せた。

それは生気の無い顔で呻き声を上げながら、さながらゾンビのよう

に迫りくる人間だった。様子を見る限り、どうやらメギドに操られて
いるらしい。

「貴様達も、こいつらのような私の忠実な兵士となるのだ!!」

そしてコウモリのメギドは人間を襲う。何の力も持たない一般人
にとつて、メギドは恐怖の対象だ。ただ怯え、逃げ惑うことしか出来
ない。

「……」

そんな光景を横目で見やりながら、私は食事を続けていた。

逃げたり、助けたりしないのかと問われれば、何故そんなことをし
なければならぬのかと返答しよう。あの程度の雑魚に逃げる意味
が分からないし、襲われてる人間を助けて何の得があるのだろうか。

「お代わり……あれ?」

またらーめんのお代わりをしようと丼を差し出すが、その先に店主
の姿は無かった。どうやらメギドを恐れて逃げ出したらしい。

仕方ないため、カウンターから身を乗り出して麺を取ると、沸騰す
るお湯で茹でる。食べながら観察していたため、ある程度は工程は覚
えた。適度に茹でたらお湯を切って、スープの中に投入すれば良いは
ず。具材も残っているだろうし、適当にトッピングしよう。

「〜♪」

鼻歌を歌いながら、麺が茹で上がるのを待つ。どうせだから、残つ
た麺は全部私が貰おう。店主も居ないんだし、お金も払わなくて良
い。

「おい……」

あ、卵がこんなに残ってた。いつそのこと、卵だけを山盛りに乗せ
てみようか。でもネギや肉も捨てがたい。こんな所にはトウモロコ
シもある。これも盛り付けてみようか。

「おい、聞いているか?」

全部乗せようにも、限りが有る。もっと大きな丼なら良かったんだ
けど、それは見当たらない。残念に思いながら、何をトッピングする
か迷いながら視線を動かす。

どんならーめんが出来上がるだろうか。楽しみで胸が震えた。

だけどそんな私の感情を逆撫ですることをしでかした奴が居た。

「聞けって……言ってるだろうがっ!!」

突然の怒号と共に、私の目の前に有った寸胴鍋が吹き飛び、茹でていた麺がお湯と共に宙に投げ出されていく。あまりのことに、私は跳ねたお湯で手の甲に火傷が出来るのにも気付かず、その光景をただ見ることしか出来なかった。

「ふん、平和ボケしてるようだが、これは冗談ではない。貴様も私の兵士として働いてもらうぞ!」

メギドが何か言っているようだが、私の耳には何も入らなかった。地面に無惨に落ちた鍋と麺。折角茹でていた麺が……。

「……」

次第に湧きあがるのは、怒りと憎悪。私の食事を邪魔したこのメギドを許すわけにはいかない。

「……あんた、覚悟は出来てるんだらうね」

「は、何を言っている?」

私の言葉の意味が分からないとでも言いたげに首を傾げるメギド。その態度が余計に腹立たしい。

「貴様は大人しく、私の道具となっていれば良いのだ!!」

そう言い放ったメギドは私の首元へ牙を突き立てようと、口を大きく開く。だけど、その瞬間を狙って私は懐からあるものを取り出して、こいつの開いた大口に突き込んだ。

「げへっ!?!」

無防備な口に異物を突っ込まれたせいで、間抜けな声を出しながらメギドは後退する。そして私が手にしたものを見て、目を白黒させた。

「おい、それは一体!?!」

メギドが問い掛けてくるものの、それを答えてやる義理は無い。その代わりに私は黙ってそれを腰に装着した。

『覇剣ブレードライバー』

私の腰に巻かれるベルト。その正面には紫色の鰐を持つ剣が収められている。

「私の食事の邪魔をしたんだから、その代わりに少しは楽しませてよ？」

そう言いながら私は、手のひらに収まる程度の大きさの本を取り出す。表紙には毒々しい色をした蛇が描かれたそれを開く。

『ムゲンウロボロス』

『かつて全てを貪り喰らった蛇の王が今、蘇る！』

この本の名はワンダラーライドブック。かつて世界を創ったとされる大なる本の一部。その本を私は腰に巻かれたベルトに装填し、収められた剣を引き抜く。

『抜刀！』

ベルトに装填された本から巨大な蛇が姿を現し、私を中心としての身をうねらせる。

そして私は頭上へと剣を掲げると、勢いよくそれを地面に突き刺した。

「変身」

眩きと同時に蛇が私の体に絡みつき、その身を変化させ鎧を形成する。その色は剣と同じ紫色。見る人によっては悍ましさを感じさせるかもしれないけど、私は気に入っていた。

『ムゲンウロボロス』

『餓欲！ 飢え渴く剣が喰らい尽くす！』

私は手にした剣「欲望剣餓欲」をメギドへと向ける。

「貴様……剣士だったのか!？」

この世界にはワンダラーライドブックの力を引き出す聖剣が幾つも存在する。その聖剣を手にして戦う剣士。その一人が私だ。

ただし私は他の連中と違って、世界のためなんて殊勝な考えは持っていないけど。

「それじゃ、行くよ」

私は一言だけ口にして、メギドに向かって剣を振るう。

「その程度、当たるかっ!!」

どうやらこのメギドは見た目通りスピード型らしく、私の剣戟をいとも容易く避けて見せる。

「これでも食らえっ!!」

今度はお返しと言わんばかりにメギドが音波攻撃を放つ。音は実体が無いため、普通の剣では防ぐことは出来ない。剣士にとっては厄介な能力だ。

しかし私はそれを餓欲の刃で難なく受け止めた。いや、それは正確な表現では無い。正しくは、その音波のエネルギーを餓欲が吸収した。

「なっ、何なんだそれは!?!」

目の前の光景が理解出来ず混乱するメギド。

それはそうだろう。私の聖剣は他の聖剣と比べると、異質とも言える能力を有している。

私の聖剣の力は、他の聖剣やメギドの力を吸収するというもの。「欲」の属性を有している餓欲に相応しい能力だ。

ただしこの力を恐れた他の剣士達に封印されたのは嫌な思い出としか言いようがない。次はあんなへマを犯さないように気をつけないと……。

「くっ、それなら!!」

そんなことを考えていると、メギドは接近戦を仕掛けてきた。遠距離攻撃が通じないと分かった以上、今度はスピードで勝負しようという腹積もりなのか。

「舐められたものだね……」

まさか最初の剣戟が私の全力とでも思っていたのだろうか。

羽を広げて周囲を滑空するメギドを私の剣が捉え、地面へと叩き落とした。

「どうしたの。私はまだ本気を出してないんだけど?」

「貴様あああっ!!」

事実を言っただけでも関わらず、メギドは怒りを露にしてこちらに飛び掛かってきた。そんな粗雑な特攻が当たるわけも無く、それを躲しながら擦れ違いざまに一撃を叩きこむ。

顔から地面に落ちたメギドは慌てて立ち上がると、私から距離を取った。

「ちいつ、それなら!!」

メギドは指を鳴らす。すると先程人々を囲んだ時と同じように、操られた人間が私とメギドの間に壁になるように現れた。よく見ると、さつきよりも数が増えている。恐らく私が放っておいた間に、囲まれていた人々がメギドの能力を受け操られたのだろう。

「どうだ。お前が剣士だというなら、こいつらを傷つけることは出来ないだろう?」

勝ち誇ったように笑うメギド。

その姿はただ滑稽を通り越して呆れるしかない。一体、何を勘違いしているのだろうか。

「この程度で何がしたいのか……」

溜息を吐いていると、一人が私に向かって襲い掛かる。彼らが攻撃するのなら私は手を出せない。本当にそう思っているのだろうか。

「邪魔」

私は軽く右足でその人間を蹴り飛ばす。いくら軽くと言っても、この姿では脚力は何倍にも増加しているため、当たればただでは済まない。事実、骨が折れる感覚が有ったが、大した問題では無い。操られる奴が悪いのだ。

「な、お前……こいつらがどうなっても良いのか!？」

「別に。私、関係無いし」

私の答えに対し、メギドは絶句する。確かに他の連中なら必死に助けようとするかもしれないが、私にはどうでも良い。私はただ私のためだけに生きると決めているのだ。他人など知ったことじゃない。一銭にもならない人助けなどする必要を感じない。

しかし、さすがに操られた人間全員を倒すのは面倒だ。さつきと斬るのも良いかもしれないが、それではあの連中に見つかる可能性が有る。

「そう言えば……」

私はふと思いつく。封印が解けた際に回収したワンダーライドブックがあることを。私はそれを腰から取り出すと、餓欲の刀身に翳す。

『銀河エクスプレス』

『強欲な列車!』

ワンダーライドブックのエネルギーが餓欲へと流れ込み、更なる力を引き出す。そして私はそのまま剣を振るった。

『欲求一突!』

すると剣先から紫色の光の線路が現れ、まるで鞭のように撓ると、操られた人々を縛り上げる。やはりこれは使い勝手が良い。

これでメギドは操ることが出来る人間も居ない。最早まな板の上の鯉だ。

「ぐ……」

「さて、もう飽きたし、終わらせようか」

私はベルトに餓欲を収めトリガーを引く。

『必殺黙読!』

「ぐつ、グオオオオオつ!!」

破れかぶれとなったのか、メギドは羽を広げこちらへと突進する。だけでもう勝負は付いている。

『抜刀! 大蛇欲心斬り!』

再び剣を抜き横一線に薙ぐ。すると溜め込まれたエネルギーは巨大な蛇の形状を為し、メギドへと襲い掛かった。

「がつ!」

滑空するメギドはそのスピードを抑えることが出来ず、自ら蛇の口に吸い込まれていく。そして荒ぶるエネルギーの奔流に巻き込まれたその身体は、文字通り肉片を一切残すことなく破壊された。

「ふう……」

メギドが倒されると同時に、ワンダーワールドの浸蝕も止まり、商店街は元の姿に戻っていく。残されたのは私と、倒れ伏す人々のみ。私はすぐさまこの場を後にする。ゆっくりしていたら、連中が来るかもしれない。

「……さて、どこに行こうかな」

変身を解いた私は、また新たな場所へと向かう。気の向くままに、自分の欲を満たすべく。

次は何をしようか。抑えきれない欲を秘めながら、私は餓欲と共に歩き始めた。

第1章 剣士は、強欲と邂逅する。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル」

「この間、封印された剣士について話したのは覚えてるかな？」

「強欲の剣士シャムシール。彼女は今日も自由気ままに動いているみたいだけど、どうやら彼女の許に一人の剣士が近づいているようなんだ」

「彼もまた素晴らしい剣士だけど、彼女と出会って無事で済むのか……」

「心配だから、少し彼の様子を見てみようか」

【SIDE：尾上亮】

尾上亮。それがオレの名だ。

世界を陰から守る組織ソードオブゴスの剣士の一人であり、今は一児の父でもあるオレは、聖剣を肩に担ぎながらワンダーワールドの中を走っていた。

ここ最近、メギド達の行動が活発化している。出現頻度に現れる魔神の力。どれも少し前とは比べ物にならない。出現頻度に現れる魔

また15年前のような出来事が起きるのかもしれない。そう考えると、オレは居ても立っても居られなかった。

オレは「最強の子育て王」だ。そらが生きる未来を守るために、必ず奴らを滅ぼす。そう決意して、聖剣の柄を握る力を強めた。

「待て、待ってくれ!!」

だがワンダーワールドの奥へと踏み込んだオレが見たのは、予想外の光景だった。

そこに居たのは、地を這いつくばりながら怯えた様子を見せるメギド。

「何言ってるの？ あんたが先に手を出してきたんでしょ」

そしてそいつに剣の切っ先を向けた見知らぬ紫色の剣士の姿だった。声色や体型から女であることが分かる。

「私の邪魔をしたんだから、少しは楽しませてほしかったけど、つまらなかつたや。それじゃ、さっさと消えてね」

「待つ!？」

『強欲な大蛇！ 欲求一突!』

メギドが何かを言う前にその剣士は、ワンダラーライドブックを読み込んだ聖剣でメギドの胸を一突きする。刀身に込められた膨大なエネルギーは、メギドを体内から荒らし、内側からその体を破裂させた。「ふう……」

溜息を吐く剣士は、手にした聖剣を軽く振るう。その鏢であるエンブレムを見たとき、オレはあることを思い出した。

紫色のエンブレムを持つ聖剣。それはかつて世界を滅ぼそうとし、封印された三人の剣士。その一人が所持していたとされる剣だ。

「あれ、その剣は……」

剣士はこちらの存在に気付いたようで、オレが持つ聖剣に指を差す。

「あー、まさかこんなところで会うなんて……」

どこか面倒くさそうに呟く。もしこいつがああ剣士と同一人物なら……。

そんな不安を感じていると、そいつは頭を掻きながらこちらに視線を向けて口を開いた。

「ねえ、悪いけど私のことは黙っててくれる？ 今はまだ、そつちとは関わる気は無いんだよね」

そう言っただけはオレに背後を向けて、歩き去ろうとする。

だがあの聖剣を持っている奴を黙って見逃すわけにはいかない。

「待ちな!」

「……何?」

オレの言葉に不機嫌な様子で振り向く。そんな奴に向け、オレは「土豪剣激土」を下ろして睨む。

「お前のその剣。それはどこで手に入れた」

「……これは最初から私のものだよ」

「そうか……やっぱりな」

言葉通りに受け取るなら、こいつは若い頃に先生から聞いた伝承に出てくる、「強欲の剣士」本人だ。

何故、封印されているはずのこいつがこんなところに居るのか、何をしようとしているのか。分からないことは多いが、やるべきことはただ一つ。

「お前はここでオレが倒してやるよ！」

こいつを野放しにするわけにはいかない。オレはワンダーライドブックを取り出し、表紙を開いた。

『玄武神話』

『かつて、四聖獣の一角を担う強靱な鎧の神獣が居た』

起動したブックを土豪剣激土へと装填しトリガーを引く。

『玄武神話』

それと同時にオレの前に現れた岩塊。俺はそれを振り上げた激土で叩き斬った。

「変身！」

『一刀両断！ ブツた斬れ！ドゴ・ドゴ・土豪剣激土!!』

『激土重版！ 絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩きこむ！』

砕かれた岩塊はオレの体に纏わりつき、灰色の鎧を形成する。これによりオレは剣士「バスター」へと変身を遂げた。

「……全く、こっちは戦いたくないっていうのに」

溜息を吐きながら、奴は剣を下段に構える。

先手必勝。オレは激土を持ち上げ、上段から振り下ろす。数ある聖剣の中でも、激土は最も重量がある。それを最大限利用した振り下ろしは、オレが最も得意とする戦術の一つだ。

奴は背後へと跳躍しその攻撃を躲すが、オレはさらに刀身を左手で掴み、突進する。さすがにこれは避け切れず、奴は自身の聖剣を真一文字に構え対抗する。

「甘いんだよっ!!」

だがブックと聖剣によって強化されたオレの力は、他の剣士を遙かに上回る。剣同士がぶつかり合う衝撃で奴は大きく跳ね飛ばされ、壁際まで後退した。その反動で体勢を崩した奴に向かって、オレは再び激土を振り下ろす。

「くっ!」

さすがに不安定な体勢では避け切ることは出来ず、奴は聖剣で受ける。だが腰が付いている状態なら十分な力はいれられない。

このままこいつの体を……そう考えていると、不意に奴が口を開いた。

「ふうん。少しは面白くなりそう」

嫌な気配を感じた次の瞬間には、胴に蹴りを受け思わず後ろへ下がる。その隙に奴はゆっくりと立ち上がると、自らの聖剣の刀身を撫でた。

「ちよつとだけ本気を出してあげるよ」

「何だど?」

今まで手を抜いていたとでも言いたげな言葉に怒りを感じるが、頭は冷静にするように努めていた。

まだ若かったころ、師匠から聞いた話では、こいつを含めた三人の剣士を封印するために、ソードオブロゴスのほぼ全ての剣士が協力して立ち向かったらしい。時代が変わったとはいえ、油断できる相手ではない。

じつとりと汗が出るのを感じながら、いつ仕掛けられても良いように激土を構え直す。

「それじゃ、行くね」

だが奴のスピードはオレの予想を遙かに超えていた。

「なっ!?!」

まるで瞬間移動したかのように、奴はオレの目の前へと近づくと、左に構えた剣を振るう。それを瞬時に激土で防ぐが、不完全な防御では防ぎきることは出来ず、僅かに鎧に傷を付けられた。

さらに奴は、まるで蛇のように緩急を付けながら剣を振るう。それ

を何とか防御するが、素早い連撃を完全に防御することは出来ない。恐らく「風双剣翠風」の速度とほぼ同等かもしれない。

だがその分、威力はそこまで高くはない。小さなダメージは無視し、奴の動きが止まる一瞬を狙う。

「…………ふっ」

そしてその時は訪れた。奴が息を吐く、一秒にも満たない時間。だが確かに奴の攻撃が緩んだその瞬間に、オレは激土を力強く振るう。

―バキインツ―

刀身と鎧がぶつかり合い、弾けるような音が発せられる。オレが放った一撃は見事に奴の胴を薙ぎ、その体を10メートル以上吹き飛ばした。

そして距離が開いたこの間に、玄武神話を取り出して激土に読み込ませる。

『玄武神話！』

『激土乱読撃！』

周囲の石が激土に集まり、巨大な刀身へと変化する。それによって構成された大剣を、オレは勢いよく振り回した。

「大断断っ!!」

数多くのメギドを葬ってきた一撃が放たれる。いくら奴が強くて、これを受けてただで済むわけが無い。そう考えていた。

『必殺黙読！』

『抜刀！ 大蛇欲心斬り！』

だが奴も必殺の一撃の準備をしていたようで、ベルトから抜き放たれた剣から巨大な蛇のオーラが現れる。

そしてそれはオレの大剣に噛みつき、押し返そうとする。

文字通り、真っ向からの勝負。上等だ。それでオレが負けるわけにはいかない。力をより一層込め、大蛇を真っ二つにしようとする。

「おおおおっ!!」

だがいくら力を込めようと蛇を押し込むことは出来ず、拮抗し合い中々勝負に決着がつかない。

だがその中で違和感を感じる。今もオレは全力を込めているが、そ

の力が徐々に抜けていくような感覚……。

―バリッ―

嫌な音がして、視線を上げる。そこには頑強な石で構築されたはずの刀身が、蛇の牙によって砕かれていたのだ。

「なっ!?」

今までこの技で多くの敵を倒してきた。それだけに、一撃必殺の自負がある。だからこそ、この光景を前に、自分の目を疑う。

「アッハハハっ!!」

思わず呆然とするオレの前で、奴は愉快そうな笑い声を上げた。

「良いよ! あなたの力、とても良い! だからそれ、全部貰うね?」

そう言い放つと、蛇はその口を大きく開き、膨大なエネルギーが込められているオレの大剣を噛み砕いた。

「ぐああああっ!!」

その余波でオレは大きく後ろに吹き飛ばされる。そして手元には玄武神話と元の大きさへと戻った激土が落ち、オレの変身が解ける。

「ふふつ、少しは満足出来たよ」

立ち上がることにすら痛みを感じるほどのダメージを受けたオレの前に、奴はケラケラと笑いながら近づく。

そして奴は玄武神話へと手を伸ばす。

「待て! 何をするつもりだ!」

「何って……貰うだけど?」

当たり前のようにそう返答する奴の顔は、仮面に隠れてはいたが歪んだ笑みを浮かべていると分かる。

「もう見つかっちゃったんだし、それなら我慢する必要が無いかなって。私は私のやりたいようにやるだけだよ」

そう言っつて奴はブックを拾おうとする。

こんな奴にブックを渡してはならない。だが動こうにも、ダメージが大きく、満足に立ち上がることもすら出来ない。

こんな時に何も出来ない自分自身に腹が立つ。一体どうすれば……。

『雷鳴劍黄雷!』

だがそこへ、黄色の閃光が駆け抜け、奴に一撃を放つ。しかし奴も寸前で気配を感じ取ったようで、手にした剣で防御していた。

「尾上さん、大丈夫ですか？」

現れたのは、黄色の装甲を纏った雷の剣士「エスパード」。まだ若いながらも、卓越した実力を持った剣士であり、オレも信用している大事な仲間だった。

「はあっ！」

「ふふっ」

エスパードは持ち前のスピードで連撃を放つが、奴はそれすらも余裕で対処していく。やはり、奴の実力はこちらの予想以上。このままではまずい……。

「おい、ここは一旦退くんだ！」

オレは苦渋の決断をし、エスパード―富加宮賢人に声を掛けた。

「今のオレ達じゃあ、奴には勝てない！ 今はノーザンベースに奴の情報を持ち帰るんだ！」

「くっ、分かりました！」

勝てないという言葉に悔しさを滲ませながらも、賢人はオレの言葉に頷くと、腰から一冊のブックを取り出して、自らの剣に翳す。

『ニードルヘッジホッグ！ ふむふむ！』

『習得一閃！』

雷鳴剣黄雷から無数の針が発射される。強欲の剣士は防御するが、少しでも時間を稼げればそれでいい。

オレは何とか激土を拾い、賢人は落ちていた玄武神話を回収する。そして聖剣を力を利用し、ワンダーワールドから脱出した。

「……こんな所、そらには見せらんねえな」

冗談を溢すが、内心では焦っていた。奴はかなり強力だ。もし他の封印された剣士達も復活したらどうなるか分からない。

この危機的状况をいち早く知らせるべく、オレは賢人に肩を貸してもらいながら足を進めた。

第2章 追憶する、夢と共に。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル。今、僕の胸は不安で張り裂けそうなんだ！」

「ソードオブロゴス最強の剣士である尾上亮。でも彼の力を以てしても、強欲の剣士エドナに勝つことは出来なかったんだよ！」

「幸いにも雷の剣士エスパードが救援に来たから助かったけど、もし彼が来なかつたら、ワンダーライドブックを奪われていたのは間違いない」

「彼女の存在を知ったソードオブロゴスの面々。彼らも不安を感じているみたいだね……」

【SIDE：大秦寺哲雄】

ソードオブロゴスの拠点の一つであるノーザンベース。

そこに有る自室で私は、目の前に置かれた激土に視線を巡らせていた。

「どうだ、すぐに直りそうか？」

私の背後で、激土の所有者である尾上が声を掛けてくる。先程から何度も同じような言葉しか発さないのは鬱陶しいと思いつつも、私は視線を合わせないように振り向くと、鑑定の結果を呟いた。

「……幸いだが大きなダメージにはなっていない。ただ修復には三日は必要だ」

「マジか……もう少し早くならないか？」

強引に私の肩に腕を回して来る。尾上とはそれなりに長い付き合いだが、この馴れ馴れしい態度は昔から好きではない。

そもそも、早く修復してほしいのなら、黙ってこの場から離れてほしい。無暗に話しかけられては、気が散って仕方がない……しかし、

例えそう言ったとしても、この男は聞きもしないだろうが。

そして再び視線を激土へと向けながら、私は先程の話を思い出していた。

尾上と賢人から発せられた報告。それは大昔に封印されたはずの剣士シャムシールが復活したというものだった。

世界を滅ぼそうとした三人の剣士の一人であるそいつは、長きに渡る戦いの果てに一冊の本に封印され、今はサウザンベースで厳重に管理されていたはずだった。それが何故、復活しているのか……そして、何を為そうとしているのか……。

もし自然に復活したというのなら、他の封印されている剣士達も目覚める可能性が有る。ただでさえ今はメギドが活発化しているのだ。15年前よりも遥かに大きな争いが起きる可能性が有る。その事実だけに冷や汗を掻きつつも、自分に出来ること、やるべきことは変わらないと、再び剣に視線を戻した。

【SIDE：エドナ】

（良いか。我らはこの世界を守る崇高な剣士として生まれたのだ。己を捨て、正義を為せ！）

（恐れるな！ 迷うな！ 人々の幸せを守るため、悪しき者を倒す。それが代々続く我ら一族の役目だ！）

（我らに与えられた使命を果たす。そのためだけに剣を振るえ！ 例え自分の命が散ろうともだ！）

頭の中で鳴り響く男の声。

自らを否定するその声の主を、私は手にした剣で切り裂いた。

「……ん」

その瞬間、私は目を覚ます。どうやら先程の声は夢だったようだ。しかし、今もまだあの声が耳に残り続けている感覚がして、気持ち悪い。

「……まさか今更あんな夢を見るなんてね」

そして私は思い出す。まだ私がソードオブゴスに居た時のことを……世界を守る剣士として育てられていた時のことを。

私の出身は、代々とある聖剣を操る剣士を排出してきた一族だった。

長年に渡り世界を守り続けた一族。それ故に周りの家族は皆、世界を守る使命を第一として疑わず、数多くのメギドを屠ってきた。私も兄弟と共に、当時の聖剣の所有者だった父から直々に剣士としての修行を受けた。

全ては世界を守るため。幼い私にとってそれが全てだった。

しかしある日、私はこう思った。

——どうして我慢しなければならぬんだらう——

与えられたのは剣士となるための技術と知識、それだけだった。それ以外の事は全て不要であると、疑問に持つことすら許されず、ただそれを当然と思う家族達。

その異様に気付いたのは、ちよつとした偶然だった。当時、拠点で見た私と同年代と思われる一人の男の子。彼が無邪気にはしゃぎながら、父と思われる剣士に甘える光景。

最初は何とも思わなかった。だけど何日、何週間、何か月とその光景を見続ける中で私の心の中に揺らぎが生まれた。

きつと彼らはこの瞬間を本当に幸せと感じているのだろうか。それは満面の笑みを見ればすぐ分かる。しかし、私はあんな笑顔を浮かべたことがあるだろうか。どれだけ記憶を辿っても、思い当たることは無く、それがとても空虚に感じた。

私はこの世界を、生きる人々の幸せのために剣士になるのだと父から言われた。

だけど、それなら……私の幸せとは何なのだろうか？

きっと父や他の者なら、使命を自分の幸せと答えるのだろう。けれども、それは他人に与えられたものに過ぎない。私自身が心からそう思える幸せとは何なのだろうか……。

そして私は一振りの剣を手にして、誰にも言わずに家を出た。

理由は世界を見るため。きっとこの世界には、自分が命を賭けて守るための理由があるはず。そう信じたいがための行動だった。

だけど私がその旅で見た光景は失望だった。

確かに世界には、多くの人々が居て、助け合い分かち合い、幸せを享受する者も居る。その姿は美しく、正しく私の家族が信じる守るべき世界の姿だった。

だけどそれと同じくらい醜い者達が居た。彼らは私達が守った場所、自分の好き勝手に争い、憎み合い、世界を汚していた。

私はそれらを見て迷った。確かにこの世界には守るべきものが有るが、守る必要のないものだって多いじゃ無いか。何故、そのようなものの為に命を賭けなくちやいけないのか？

あんなものの為に闘い、その果てに命を落としたとして、それでは満足なのだろうか？

自問自答の果てに、私は結論に辿り着く。

彼らに共通していること。それは全て、自分の生きたいように生きているということだ。他人のためと言いつつ、それは全て自分が信じる生き方による選択でしかない。

家族が言っていた「世界を守るため」なんて言うのも、所詮は自分がそう信じたいがための詭弁に過ぎないのだ。

それに気付いたとき、私は初めて声を上げて笑った。何だ、簡単なことじゃないか。全部、自分のためでしか無かったんだ。

それなら、私が好き勝手に生きたって別に良いじゃないか！

気付くと、目の前に一振りの剣が地面に突き刺さっていた。紫色の毒々しい鞘に納められた聖剣。父から教えられた知識の中にそれは有った。

未熟な者が使おうとすれば、たちまちエネルギーを奪われ命すら危

ういとされるほど強大な力を秘めていたがために、刀匠達の手によって誰も知らない場所へ封じ込められた剣。

だけど何故か私には、それがしつくり来た感じがした。それまで空虚だった私には、ある意味この剣はぴったりだったのかもしれない。きつとこの剣も私を選んだのだろう。

そして私はそれを手にし、不死身の体へと変貌したのだった。

それから私は剣を携えてあちこちを旅した。ある時は美味しい物を食べるため、ある時は綺麗な景色を見るため、ある時は面白い見世物に惹かれて。

それまで抑え込まれていた自分の欲のままに生きるのは、とても楽しかった。やつと生きている実感を持つことが出来た。

そんなある日、私はメギドを討伐していた父と再会した。

「エドナか……」

私の記憶に有るよりもしわがれた声をしたその時の父は、仮面の奥ではきつと冷たい瞳をしていたのだろう。

「全く、お前のような不出来な娘を持って、私は恥ずかしい。修行から逃げ出すなど、聖剣に選ばれた剣士にあるまじきことだ！」

勝手に私の心中を妄想し語る父の姿に、私は強い嫌悪感を覚えた。何故、それまで父を尊敬していたのだろうか。よく見れば分かる。これはただの盲目的な正義を語る愚か者でしかない。

「まあ良い。落伍者のお前にも僅かだが価値が有る。大人しく帰ってきて……」

「黙れ」

最早、こいつの言葉に耳を貸す気は無かった。

「私はあるたのものじゃない。付いて行く気なんて無いよ」

そう言つて私は背を向け去ろうとするが、その前に父は手にした聖剣をこちらへ向ける。

「……父に対してそのような言葉を使うとはな。どうやら何か勘違いをしているようだが、私は力づくでもお前を連れて帰る。これ以上、身内の恥にうろうろされるのは目障りだ」

……折角、穩便に済ませようと思っていたのだが、この男はそのつもりは全くないらしい。これだから自分が絶対的な正義だと勘違いしている連中は厄介だ。

私は父を睨みつけると懐に手を伸ばす。

「お前如きが私に勝てるわけが無いだろう……っ!?」

父は私の懐から出て来た聖剣を見て驚いたような声を上げる。まあ、父ならこれが何か一目で分かるだろう。

私はそれを腰に装着した。

『覇剣ブレードライバー』

「もう面倒だからさっさと片付けさせてもらおうよ」

『抜刀!』

そして私はワンダーライドブックをドライバーに装填し、剣を抜き放つ。

『ムゲンウロボロス』

『餓欲! 飢え渴く剣が喰らい尽くす!』

「貴様……その剣を一体どこで!!」

「あなたには関係無いでしょ。それじゃ行くよ」

そして私は父―剣士エストックに対し、餓欲を振りかぶった。

結論として私は父に勝利し、素早くその場から去った。わざわざその場に留まって、他の剣士達が来るのを待つ必要などない。ただこれによって私はソードオブロゴスからお尋ね者扱いされ、剣士達からも狙われることとなったわけだけだ。

だけどその旅の果てに、私はあることを思いついた。それはかつて聞いた昔話。数百年前に封印された不死身の剣士と破滅の本の存在。あれが解き放たれば、きっとこの世界は滅びる。そして新しい世界も作られるだろう。これは面白い。

そして私はソードオブロゴスから破滅の本を奪取し、彼と出会ったのだった。

「……世界は今日も変わらないね」

とりあえず封印から解き放たれた私は思うがままにあちこちを巡ってみたが、技術や景観は様変わりしても、人間の内面は大して変わらない。

結局は私の結論は正しかったのだ。だからこそ私は別にソードオブゴス否定するつもりは無い。彼らも彼らの幸福の為に戦っているのだろう。だけどそれは私には関係の無い話だ。

「さてと、次はどこに行こうかな」

折角だから、もう少し今の世界を満喫しよう。まずはあのゲームセンターにでも足を運ぼうか……。

この世界の娯楽は中々に興味深い。少しは私の退屈を満たしてくれることを祈った。

第3章 頁は捲れ、蛇を起こす。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル。僕は今、神山飛羽真という青年に注目しているんだ！」

「小説家である彼はある日、聖剣に選ばれて炎の剣士セイバーとして戦うことになったんだ」

「それからソードオブロゴスの剣士達と共に、本の魔物であるメギドと戦っているんだよ」

「だけどそんな彼の許に、あの剣士が近づいているみたいだ」

「あの剣士が誰かって？ 勿論彼女のことだよ。強欲の剣士シヤムシールことエドナさー！」

「ちよつと嫌な予感がして、とても不安を感じちやうよ。何も無ければ良いけど……」

【SIDE：エドナ】

その日、私は小さな公園のベンチでゆつくりと昼寝に勤しんでいたはずだった。

もう風は肌寒く感じる季節だけど、不死身である私にはこの程度の気温は大したことは無い。むしろ公園に生えている木々から色づいた葉が落ち、どこかゆつたりとした雰囲気を感じるこの場所は、昼寝に最適と言えた。

だから私は鞆を枕にしながら仰向けになり、瞳を閉じて眠りに就こうとしたのだ。

「メエ〜っ!!」

だけどそんな私の眠りを妨げる雑音が聞こえた。

突如として人のざわめきとヤギの鳴き声のようなものが街中に響き渡る。それに加えて、何かが倒れ、壊れ、碎ける音が混じり合い、不

協和音を奏でる。私はあまりの騒々しさに苛立ちを感じながら、小さく瞼を開く。

視界の先に有ったのは、予想通りの光景。メギドによるワンダーワールドの浸食だった。ヤギの頭を持ったメギド達が暴れ、人々は逃げ惑う。この世界ではよくある事。

だが、こう騒がしくては眠るに眠れない。煩わしいからまとめて斬り払おうか。そう考えていると、目の前に巨大な一冊の本が姿を現した。それはソードオブゴスの剣士達が、自分達の拠点からワンダーワールドなどへ転移するための門を開く「ブツクゲート」だ。あれが現れたということは、意味するものは一つ。

「止めろっ!!」

ブツクゲートから三人の青年が飛び出し、メギドに向かって叫ぶ。そして彼らは腰に手にしたアイテムを装着すると、収められていた聖剣を引き抜いた。

『烈火拔刀!』

『流水拔刀!』

『黄雷拔刀!』

「二変身っ!!」

掛け声を揃え聖剣を振るうと、彼らの全身は装甲を纏い、剣士としての姿を現す。うち一人は以前も見たことが有る。確かあれは雷の剣士。残りの二人は炎と水だ。

彼らもメギドの存在を察知して現れたのだろう。それなら話は早い。

「……さっさとここから離れようか」

後は勝手に彼らがメギドと戦ってくれる。その隙にこの場から離れ、もつと静かな場所に移動して、ゆっくり眠ろう。今は気分じやないし、無駄に首を突っ込みたくは無い。そう考えて、彼らに背を向けこの場から離れようとする。だけど……

「お、逃げ遅れた人間発見だメエ〜!」

「お前も水の中に沈めてやるメえ〜!」

私の前に現れる新たなメギド。しかも二体。こいつら、一体どれだ

けいるのか……。

相変わらず私の邪魔をしてくるメギドに苛立ちを覚えながら、ブレードライバーを取り出す。さっさと片付けよう。そして私はワンダーライドブックを開いた。

【SIDE：神山飛羽真】

「はあっ!!」

今日もまた、この世界を支配しようとする奴等を倒すため、俺は聖剣「火炎剣烈火」の力で変身し、仲間と共にワンダーワールドの中で戦っていた。

「この、邪魔をするなメエツ!!」

俺達の前に現れたのは、色とりどりのマフラーを付けたヤギの姿のメギド。今、この場に居るだけでも五体居る。対してこちらは三人。数だけならこちらが不利。だけどそれで怖気づいては居られない。この世界を守るために、怯むことなく剣を振るう。

「ふっ、こいつら一体一体は大して強くは無いな!」

「ええ、でも油断してはいけませんよ!」

俺の横で二人の剣士も声を上げながらメギドに攻撃を加えていく。

一人は雷の剣士エスパーダであり、俺の幼馴染でもある青年「富加宮賢人」。もう一人は真面目な性格の水の剣士ブレイズとして戦っている「新堂倫太郎」。二人とも大事な俺の仲間だ。

「ぐあだメエ〜っ!!」

それぞれが手にした聖剣でメギド達を切り伏せていく。賢人の言葉通り、このメギドはそれほど力は強くなく、いとも容易く一体また一体と倒されていく。これまでのメギドと比べ明らかに弱い。それが逆に不気味に感じられた。

「これで終わりだ!!」

『ブレイブドラゴン!』

「ドラゴンワンダーっ!!」

俺の右腕から竜の姿を模した火炎が放たれ、最後に残った二体のメギドを包み込む。その炎は悪しき者を焼き払う聖なる力。簡単にメギドの全身を焼き払い、塵一つ残さず爆散させた。

「とりあえず、これで終わりか……?」

賢人の言う通り、この場に居たメギドは全て倒したはず。しかし一向に世界が元に戻る気配は無い。

「恐らく、まだ他の場所にメギドが居るはずです。手分けして探しましょう」

「ああ……っ!?!」

「メエっ!!」

倫太郎の言葉に頷いて一歩踏み出した瞬間、突如として何かが俺達の背後に降ってきた。

最早聞き飽きた鳴き声にハツとし、振り向いた先に居たのは、あのヤギのメギド。しかしその大きさは、倒した奴等より一回り大きく、さらには両手に双剣を握っていた。

「やはりまだ居ましたか。ですがっ!!」

突然の事態に対し、すぐに冷静さを取り戻した倫太郎が「水勢剣流水」で斬りかかる。まるで流れる水のような華麗な斬撃を躲すのは至難の業だ。

「ふんっ!!」

だがその素早い剣技を、メギドは両手の双剣でいとも容易く防ぐ。

「この程度で粹がるなメエっ!!」

「ぐあっ!?!」

そのままメギドがまるでハサミのように剣を振るうと、倫太郎の体がまるで風に吹かれたボールのようにいとも容易く吹き飛んだ。

「倫太郎っ!?!」

「くっ、それならー」

今度は賢人が素早い動きで「雷鳴剣黄雷」による突きを繰り出す。目にも止まらぬそのスピードはまさに雷。普通のメギドなら、斬られ

たことにすら気付かせずに一瞬で片づけてしまう。

「その程度、お見通しだメエ〜!!」

だがそれすらもヤギのメギドは見切り、捌かれてしまう。

「お前はこれでも食らっているメエ〜っ!!」

さらにメギドが双剣を頭上に翳すと、巨大な岩塊が出現した。

「なっ!？」

突然のことに賢人の動きが止まったその瞬間、メギドが勢いよく双剣を振り下ろし、岩塊は賢人の許へと投げつけられた。

「賢人!!」

俺は賢人を庇う様に前に出ると、聖剣にワンダラーライドブックを読み込ませる。

『ストームイーグル!』

『ふむふむ……』

「ハっ!!」

『習得一閃!』

俺が振るった剣から巻き起こる炎の竜巻が岩塊を飲み込み、どうかそれを粉々に砕くことに成功した。

そして攻撃が止んだこの僅かな間を利用し、メギドと距離を取って体勢を立て直す。

「大丈夫か賢人？」

「ああ、助かった」

「あのメギド、かなり手ごわいですね……」

先程まで倒したメギドと比べると、明らかにパワーが違う。恐らくこいつがワンダラーワールドの浸食を行っている本体だ。こいつを倒さない限り、この場所は元には戻らない。

「お前達に倒された子供たちの仇は討たせてもらうメエ〜!」

そう言つてこちらに向かって走り出して来るメギドを迎え撃つべく、俺達が剣を構えた、まさにその瞬間だった。

「ドオンスッ!!」

「メエ〜っ!?!」

いきなり爆発音と共に、新たに二体のメギド達が俺達の前に吹き飛

んできた。

何事かと俺達は思わずそのメギドが吹き飛ばされてきた方向へと視線を向ける。

「あれはっ……………」

それを見た賢人の声が強張る。

『欲望剣餓欲!』

俺達の視界に入ったもの。それは紫色の装甲を身に纏った一人の剣士の姿だった。

「はあ……………」

気だるげな溜息を吐く剣士。その声と体型から女性であることが分かる。彼女もまたソードオブゴスの剣士なのだろうか。

「強欲の剣士、何でこんな時につ……………」

「あれが強欲の剣士ですって!?!」

だがそんな俺の疑問とは裏腹に、賢人は苦々し気に呟く。その言葉を聞いた倫太郎は驚いた様子を見せたが、俺には何が何なのかさっぱり分からない。

「なあ、その…………強欲の剣士って何なんだ? あの人俺達と同じ剣士じゃないのか?」

俺の問い掛けに対し、どこか焦りを感じさせる口調で倫太郎が答える。

「あれはかつて、世界を滅ぼそうとして封印された危険な剣士の一人、「シヤムシール」です。まさかこんな時に会うなんて……………」

つまり彼女は闇の剣士「カリバー」と似たような存在であるということだ。

「…………ねえ、それで終わりなの?」

俺達が話している間、その強欲の剣士は自らの聖剣を肩に担ぎ、面倒くさそうな態度でメギドを挑発する。

「この、調子に乗るなメェくっ!!」

「待つんだメェっ!?!」

親ヤギのメギドの制止の言葉も聞かず、吹き飛ばされてきた二体の子ヤギメギドは勢いよく飛び掛かる。しかしそれすらも鬱陶しいと

言わんばかりの様子でシャムシールは腰に巻いたベルトに装填されているワンダースライドブツクのページを押し込んだ。

『ムゲンウロボロス!』

「これで終わり」

端的な言葉と共に彼女がゆっくり右手を伸ばすと、指先から蛇を模ったオーラが現れ、向かって来たメギドの体を覆う。

「メっ、メエっ!!」

オーラに飲み込まれたメギドが苦しみながらのたうち回る。まさかあれは毒!?

そしてシャムシールはオーラに包まれ動きが止まったメギド達へ向かって走ると、その聖剣で擦れ違いざまに斬り裂いた。

「わ、我が子よっ!!」

悲痛な声を上げて親ヤギメギドが手を伸ばすけど、それが届くことは無く、子ヤギのメギドは倒れ爆散していった。

「はあ、つまらなかつた」

何事も無かつたかのようにシャムシールはぼそりと呟く。それが癪に障つたのだろう。仲間を倒された親ヤギメギドはこちらには目もくれず、双剣を彼女へと向けた。

「貴様……ただで済むとは思うなメエっ!!」

「ああ、まだ一匹いたの。面倒くさい……」

「メエっ!!」

怒りに任せ突っ込むメギド。鋭く双剣を振るい、シャムシールを倒そうと連撃を放つ。だが倫太郎や賢人を上回るその剣戟を、シャムシールは一本の聖剣を見事に扱い、一撃も食らうことなく完全に防ぎきって見せていた。

「相変わらずつまらないね……もつと楽しませてほしいんだけど?」

「メっ……それならこれでも食らうメエっ!!」

挑発に乗ったメギドは、再び剣を掲げ岩塊を生み出す。しかし単発だった先程とは異なり、その数は計五個。あれをまともに受ければ、無事では済まない。

しかし、それを前にしてもなおシャムシールは何事も無いかのよう

な態度を崩さない。彼女はゆっくりと腰から紺色のワンダラーライドブックを取り出すと、剣に翳した。

『強欲な列車！』

『欲求一突！』

ワンダラーライドブックの力を取り込んだ聖剣の先端から紫色の線路が伸び、撓りながら岩塊へと巻き付く。そしてまるで大蛇が獲物を捕らえるかのように線路が岩塊を締め付け、それを砕いて見せた。

渾身の一撃を呆気なく防がれ呆然とするメギドに向かってシヤムシールは剣先を向けた。

「もう飽きたや。終わりにしよう」

そう言うときシヤムシールは聖剣をベルトの脇に収めると、そのままメギドへ背中を見せる

まさかメギドを見逃そうとしているのかと思っていると、これを好機と見たのかメギドは静かに双剣を手にし、シヤムシールに忍び寄る。

「……舐めるなメエ〜っ!!」

そしてその無防備な背中に刃を突き立てようと剣を振りかぶった。数秒後にはその一撃が彼女の背中を斬り裂くだろう。だが俺はあることに気付いた。

『餓欲居合……』

シヤムシールの右手が聖剣の柄をまだ握られ続けていたことに……。

『黙読一閃！』

「邪魔」

振り向きざまに放たれた鋭い突きが、メギドの胸を貫く。

「メツ……!?!」

何が起きたかも分からないと言った様子の声を上げ、メギドは倒れ伏しその身を爆散させた。

「ふう……だるい」

先頭とも言えない、ただの蹂躪とも言えるその力に思わず見とれていた俺達だが、彼女の視線がこちらに移ったのをきっかけに我を取り

戻すと、それぞれ聖剣を手に取り構える。

倫太郎の言う通り、この剣士が世界を滅ぼそうとしているのなら俺達にも攻撃を仕掛けてくるだろう。そう考えてのことだった。

しかし俺の予想とは裏腹にシャムシールは剣を構えるどころか腕から力を抜くと、こちらただ一言、

「それじゃ、そういうことで……」

そう言うとき背を向けてこの場から離れようとする。また油断を誘おうとしているのかと思ったが、そういうわけでも無さそうで、完全に敵意は無いようだった。

だけどそんな彼女を黙って見逃すことが出来なかったのか、倫太郎が声を上げた。

「待ってください！ あなたは何を企んでいるのですか？」

その問いに対してシャムシールは首だけこちらに向けると、呆れたような声でこう返した。

「別に何も？ 私は私の好きなように生きてるだけだよ」

あまりにも単純な答え。その言葉からは俺達を騙そうとする意思も、馬鹿にしようとする雰囲気も感じられない。ただ何でもないように、それが当然であると答えたように思えた。

しかし、その答えに疑問を感じる。

「……あなたは世界を滅ぼそうとしているんじゃないのか？」

さつき倫太郎は、彼女が世界を滅ぼそうとしたと言っていた。好きなように生きることと世界を滅ぼすことがどうして繋がるのか。それが俺には理解出来なかった。

「確かに世界を滅ぼそうとはしたね」

「っ、何でそんなことを……」

「だって、この世界を守るより、そっちの方が面白そうでしょ？」

その答えに俺は絶句した。

「世界が滅び、新たな世界が生まれる瞬間なんてそう簡単に見れるものじゃない。きつとすぐく心が躍る光景になると思うのよね」

「そんなことで……」

面白そうなんて理由だけでこの世界を滅ぼそうとする。その考え

が理解できない。ただ戸惑いを感じていた。

「つやはりあなたはこの世界に居てはいけない！」

そして誰よりもこの世界を守る使命に燃える倫太郎が剣を構える。その言葉からは強い怒りが感じられた。

俺と賢人もまた倫太郎に続くように剣を握る。そして賢人が苦々しい口調で警告する。

「気を付けろ。こいつは尾上さんも倒してる。油断は禁物だ」

俺はその言葉に黙って頷く。

そんな俺達の姿に、シャムシールは明らかに面倒くさそうな態度を見せる。

「全く、これだから自分が正しいと思ってる連中は嫌なんだよね」

そう言いながら彼女が振り向いて剣を構えたのを引き金に、俺達は走り出す。

これが俺と強欲の剣士シャムシールとの出会い。そして彼女との因縁の始まりでもあった。

第4章 ぶつかり合う、剣と信念。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル」

「前回、ワンダーワールドでメギドに苦戦する神山飛羽真達の前に、遂に姿を現した強欲の剣士エドナ」

「彼女の口から放たれた世界を滅ぼす理由。ただ「面白そうだから」という言葉に、水の剣士である新堂倫太郎が怒りを露にするんだ」

「そして彼に引つ張られるように、飛羽真と賢人もエドナに立ち向かう。だけど彼女は尾上亮ですら打ち破った強敵だ！」

「彼らはエドナに勝つことは出来るのか!? もう、気になって仕方が無いよ!!」

【SIDE：飛羽真】

倫太郎を先頭にして、俺達は強欲の剣士シヤムシールへと剣を振りかぶって飛び掛かる。こっちは三人。対して相手は一人。相手がどれほどの実力者だとしても、俺達なら勝てない訳が無い。そう思っていた。

「……ねえ、その程度なの？」

だけど、その考えはあつさり打ち破られた。

俺の烈火による激しい斬撃も、倫太郎の流水による変幻自在な動きも、賢人の黄雷による鋭い一撃も、その全てを彼女は完璧に対応し、防いで見せている。その動きはまるで美しいダンスの様にも見える。

「くっ、それなら！」

『ライオン戦記！』

「ライオンワンダー！」

倫太郎が放った水の斬撃、そして実体化した青いライオンがシヤムシールへと向かう。この二連撃を防ぐのは至難の業だ。

「……つまらない」

シヤムシールはただ手にした剣を横に構え、斬撃とライオンの両方を受け止める態勢を取る。多くの敵を倒してきた倫太郎の技があるな構えで防げるはずがない。

しかし倫太郎が放った攻撃は、シヤムシールの剣に触れると同時に、まるで乾いた土に水が染み渡るかのように吸収されていく。

「なっ!?!」

「これ、返すよ」

そしてシヤムシールは吸収したエネルギーを用いた斬撃を放つ。自らの攻撃を吸収された倫太郎は驚きのあまり動く事が出来ず、その攻撃をまともに受けて大きく吹き飛ばされてしまう。

「ぐあっ!!」

「何だ、今の!?!」

倒れた倫太郎に駆け寄りながらも、今まで見てきた聖剣とは全く違う力を有する剣の力に驚いていると、賢人が焦燥した様子で答える。

「あれが奴の聖剣の力……他の聖剣やワンダーライドブックの力を吸収し、自分の力にしてしまっんだ……」

その言葉に絶句する。それじゃあ、聖剣を使う俺達の攻撃は全く効かないということじゃないのか？

いや、だが希望が無いわけじゃない。

「……なあ、彼女は昔の剣士によって封印されていたんだよな?」

「はい……残念ながらその方法はノーザンベースの資料を見ても分かりませんでした」

ダメージから回復した倫太郎は、立ち上がりながらも残念そうに顔を俯かせる。だけどその言葉が聞けただけで良い。

「だったら、きつと何か弱点はあるはずだ。他の剣士に出来て、俺達に出来ない訳が無いだろ!」

そうだ、目の前の剣士は絶対に勝てない相手じゃない。何か突破口があるはず。

俺の言葉を聞いて倫太郎と賢人も顔を上げた。

「そうですね、ここで折れては剣士の名に泥を塗ってしまいます!」

「ああ、俺達はここで止まるわけにはいかないな！」
そして俺達は懐からそれぞれブックを取り出す。

『ストームイーグル』

『ピーターファンタジスタ』

『ニードルヘッジホッグ』

そしてベルトに装填すると、聖剣を収めて再度抜刀する。

それと同時に全身に力が漲った。

『烈火抜刀！』

『流水抜刀！』

『黄雷抜刀！』

ワンダーライドブックから解放された力が、新たな装甲となって俺達の身に宿る。

『竜巻！ ドラゴンイーグル！』

『輝く！ ライオンファンタジスタ！』

『トゲ・トゲ！ ランプドヘッジホッグ！』

俺達の聖剣は他の聖剣と違って、複数のワンダーライドブックを同時使用できる。この力ならきつと……。

「行くぞ！」

「ああ！」

俺達は強化された聖剣を構えて走り出す。まずは俺が突風を纏った剣を振り上げ、シャムシールに向かって振り下ろした。

「効かないよ」

しかしそれは難なく躲かれ、俺の背後に回った彼女の刃が迫る。

「させません！」

そこに倫太郎の左腕から放たれた鎖が彼女の聖剣を絡め捕る。

「今です！」

そして倫太郎の合図と共に賢人が素早い動きで、雷を纏った突きを放つ。これなら……

「……遅いよ」

だがシャムシールは迫りくる切っ先に恐怖を抱くことも無く、ただ無感情に咄くと、まるでブリッジでもするかのように上体を仰げ反ら

せることで賢人の一撃を躲す。

「なっ!？」

驚く暇もなく、彼女は反動を利用して振り上げた右足で賢人の顎を打ち据えて吹き飛ばす。そのまま身軽に一回転して着地すると、今度は絡まった鎖ごと勢いよく剣を振るう。

「うわっ!!」

聖剣とブツクの力で強化されている倫太郎が、その力に抗うことが出来ず、体勢を崩しながら彼女の許へと引き寄せられる。そして一瞬で距離を詰めると、シヤムシールの放った斬撃が倫太郎の胴体を捉えた。

「ぐうっ!？」

そのまま追撃を放とうとするシヤムシール。倫太郎を庇うために俺は一步踏み出すが、それも彼女は予測していたのだろう。彼女は背後から近づくと俺に視線を向けることも無く、鋭く後ろに向けて剣を突き出す。その一撃に気付くのが遅れ、切っ先とぶつかった鎧が火花を散らす。

そして俺が倒れる間にシヤムシールは返す刀で倫太郎を袈裟斬りする。

たった一瞬の出来事。しかし俺達の連携がこうも簡単に打ち破られてしまったことに衝撃を受ける。

倒れ伏しながらこの状況に歯噛みするしかない。そんな俺達を見下ろしながら、シヤムシールは呟く。

「別に私は戦う気なんて無いんだけど……どうしてこうも争おうとするかな」

それはまるで自分は悪くないと言いたげな口調で紡がれた。そんな彼女の態度に倫太郎は語気を荒げる。

「自分のためだけに世界を滅ぼそうとしている貴女が……そんな言葉を言うな!!」

「……別に理解してもらおうなんて思わないよ」

だが返答する彼女の言葉はどこか寂し気だった。

「でもさ、あんた達と私の考え方に大した差なんて無いんだよ」

「私達と貴女が同じ？ そんな訳がっ!!」

「同じだよ。自分の価値観でこの世界の在り方を決めようとしていくって点がね……」

倫太郎を遮りながら、シャムシールは言葉を続ける。

「あんた達は自分の為にこの世界を守り、私は自分の為にこの世界を滅ぼす。どっちも、自分がそうしたいって思っただけで、世界の在り方を決めようとしている。その何が違うの？」

「……」

「別に私はあんた達の価値観は否定しない。好きなようにすれば良い。でも、私がどうしたいかを邪魔される筋合いも無いんだよ」

……やっとな彼女のことが少し分かった。彼女の根本はただ純粋なんだ。自分がしたいことをする。ただそれだけで動いている。そして彼女がやりたいことが、世界を滅ぼすことだったのだ。

彼女がその答えに行きついた理由を俺は知らない。だけど一つだけ分かっていることがある。

「例えば、俺達がお前と同じだとしても……この世界を終わらせるわけにはいかない！」

きつと彼女といくら言葉を交わしても、きつと平行線に終わるだろう。それだけ世界の見方が違うのだと実感した。

だけど、この世界には多くの人々が暮らしている。彼女の独り善がりな考えで、滅ぼされる訳にはいかないのだ。

「物語の結末は俺達が決める!!」

俺は自分自身を鼓舞し、一冊のワンダーライドブックを取り出す。試したことは無いけど、彼女は強敵だ。出し惜しみして勝てる相手じゃない。そう考えて、俺は躊躇うことなくそれを起動させる。

『キングオブアースー』

他のワンダーライドブックと比べ、強大な力を持つこの本。これを含めた三冊のライドブックによる変身。どれだけの力が発揮できるのかは分からない。負担も大きいだろう。それでも、今の俺が出来ることはこれしか無かった。

そして俺はドライバーにライドブックを装填し、烈火を抜く。

『烈火抜刀!』

『増冊! アーサー王! 烈火二冊! 荒ぶる空の翼竜が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!!』

俺の左腕に水色の装甲が装着される。伝説の騎士王の力が込められた鎧から流れる力が、全身に滾る。

「その本……なるほど、少し面白そうになってきたかな」

俺の姿を見たシャムシールは、先程の気だるげな態度とは打って変わって、楽し気な口調で剣を構えた。

「その力、私に見せてみなよ!」

そう言つて素早い動きで放たれる剣。それを俺は烈火とキングオブアーサーの力で生み出された大剣キングエクスカリバーで迎え撃つ。彼女の変幻自在な動きは厄介だけど、こつちの手数は二倍。強化された力もあつて、対応することは出来ている。

「どうしたの? まさかその程度つてことは無いよね?」

だけどこつちが防ぐことに精いっぱいなのに対して、奴はまだ余裕がある。このままでは間違いなく崩されるのはこちらだ。

『ライオン戦記! ふむふむ!』

『アランジーナ! ふむふむ!』

『習得一閃!』

だがそこへ倫太郎と賢人が放つた斬撃がシャムシールに襲い掛かる。シャムシールはそれを難なく防ぐものの、不意の一撃に気を取られ動きが止まった。

この隙を逃さないように、俺は素早くキングエクスカリバーのトリガーを押す。すると俺の背後に水色の巨人が姿を現す。

『必殺読破! キングスラッシュユ!』

「はっ!!」

俺の動きに合わせ、巨人も手にした大剣を振りかぶる。その剣に炎が纏い、膨大な熱量を発する。

「へえ、中々やるね」

目の前に迫る大剣。しかしそれすらも彼女シャムシールは恐れない。彼女は聖剣をドライブに収め、力を溜め込む。

『必殺黙読！』

そして俺の技に正面から受けて立つべく、その再び聖剣を抜き放った。

『抜刀！ 大蛇欲心斬り！』

彼女の剣から呼び出されたのは、紫色の大蛇。それは爆炎を宿した剣に噛みつき、その胴体で巨人を締め上げる。ここで負けるわけにはいかないと、俺は力を込める。さすがの奴の聖剣も、膨大な力は吸収しきれないのか、炎が大蛇の体を少しずつ焦がしていく。

互いの技のぶつかり合い。一步も引かずに衝突する。

その果てに、強大な力に互いに耐え切れず、巨人と大蛇はその体を爆発させ、周囲に衝撃波が放たれる。弾けたエネルギーを受け、俺達は大きく吹き飛ばされ、地面を転がっていった。全身を強く打ち、変身すらも保たせる事が出来ず、鎧がまるで氷のように消えた。

だがそんな中、一人だけ何事も無いかのように立つ影が有った。

「ふふふつ、良いねえ。さすが、その本に選ばれただけのことはあるよ」

俺と同じように間近で衝撃を受けたはずなのに、一切のダメージが通っていない。その事実には俺は震えそうになる。

そして彼女はゆっくりと折れに近づこうとした……が

——くきゆるる——

戦場には似つかわしくもない、あまりにも間抜けな音。そして彼女はお腹を収めて一言。

「ああ、お腹空いた」

そう言うと、倒れこむ俺達に目もくれずに振り向いて、その場から立ち去ろうとする。

「待て!!」

そんな彼女に倫太郎が叫ぶと、彼女は振り向いて口を開いた。

「今、あんた達を倒すよりは、成長を待った方が面白そうだから見逃してあげる」

そして俺に人差し指を向けた。

「炎の剣士……あんたがいずれどんな答えを出すのか、楽しみにして

いるよ」

そう言うと、彼女はそのまま歩き出す。

遠く消えていく彼女の後ろ姿を見て、俺達は悔しさに拳を握った。

これが俺と彼女の初めての邂逅。それは間違いなく完敗と言うべきものだった。

【SIDE:??】

私と相棒である青年はサウザンベースの中央にある書齋で、一人の女性の前に立っていた。

彼女の名は神代玲花。ソードオブゴスの最高責任者であるマスタールゴスの腹心であり、その言葉を伝える存在。

私達は彼女に呼び出され、この場に集まっていた。

「さて、突然ですが貴方達を呼び出した理由についてですが……」

「強欲の剣士の復活……ですね」

私の言葉に彼女は静かに「ええ」と肯定する。理由は不明だが、何者かによって強欲の剣士が封印されていた本が盗まれ、奴が復活を果たしたという報告が上がっていた。

「貴方達には、彼女を打倒してもらいます。勿論、失敗は許されませんが」

「問題ないよ。俺達が必ず奴を倒して見せるさ！」

敬意の無い軽い口調だが、相棒である青年の目には絶対的な自信が見える。勿論、私も失敗する気は無い。

「必ずや、この聖剣に誓って彼女を倒して御覧に入れましょう」

先祖代々伝わる聖剣を握り、宣誓する。必ずや強欲の剣士を倒す。それが我が一族の使命の一つだ。

その私の言葉に満足したように、神代玲花は頷く。

「では頼みましたよ。魂の剣士『エストツク』、鉄の剣士『虎徹』……」
「ハッ！」

彼女の命令、いやマスターロゴスからの命令に私達は跪いて応える。

絶対に強欲の剣士は倒して見せる。我が一族の汚点。それを雪ぐという強い意志を持って……。

仮面ライダーシャムシール 資料

【エドナ】

●600年前に封印された剣士。

●代々、ソードオブロゴスで剣士を輩出してきた一族の娘で、自身も剣士となるべく修行を積んでいた。しかしある時、自分にとっての幸せが何なのかを知るべく家を出て旅に出る。そこで欲望のままに争う人間の姿を見て失望。世界を守る価値を見出せなくなった結果、自分の為に剣を振るう決意をする。そして「欲望剣餓欲」の使い手として選ばれる。

●自由気ままに世界を旅した果てに、世界に対する失望や飽きから今の世界を滅ぼして新しい世界を創ることを画策し、そのために破滅の本を手に入れるべく行動した。

●性格はマイペースで自由気まま。世界を滅ぼすことを目的としているが、気が向かなければ行動を起こさない。また争いを嫌っており、自分から仕掛けることはほとんど無い。しかし少しでも自分の邪魔になると判断した相手には容赦なく剣を向ける。

【仮面ライダーシャムシール】

身長	195.8 cm	体重	80.6 kg	パンチ力
56.4 t	キック力	95.4 t	ジャンプ力	99.8 m
(ひと跳び)	走力	1.6秒 (100m)		

●エドナが覇剣ブレイドライバーを使って変身した姿。メインカラーは白と紫。

●修行で磨かれた剣術と、うねる様な動きで敵を翻弄する。またファルシオン同様に不死身の体を有しており、例えばダメージを負ってもすぐに回復するという厄介な特性を持つ。

『シャムシールヘルム ムゲンウロボロス』：シャムシールの頭部。「欲望剣餓欲」の刀身の意匠を持つ。

『ムゲンウロボロスボールド』：右肩部分。神獣「ムゲンウロボロス」の力を宿している。

『デザイアキユイラス』：胸部装甲。敵に撃破された時は、神獣「ムゲンウロボロス」が発する「輪廻の毒」により復活することができる。『ホロウローブ』：「欲望剣餓欲」に選ばれし者が纏う甲冑。聖剣の覚醒と同時に装着され、変身者の剣技、身体能力を向上させ、特殊能力の発動を可能とする。

『ウエベンレッグ』：脚部。神獣「ムゲンウロボロス」の力により、地を滑るかのような動きを可能とする。

『ウエベンアーム』：腕部。神獣「ムゲンウロボロス」の力により変身者の肉体が超活性化され、凄まじい剣技を可能とする。

『ウエベンガント』：グローブ。「欲望剣餓欲」が取り込んだエネルギーに耐え、自在に操ることを可能とする。

『コイルタセット』：とぐろを巻いた蛇の意匠を持つ、シヤムシールの装甲。受けた衝撃を「輪廻の毒」で朽ち果てさせ、自らのエネルギーに変換する。

『ウエベンソール』：ブーツ。「輪廻の毒」を纏わせることで、全てを溶解させる必殺技「大蛇欲心撃」を発動する。

【欲望剣餓欲】

● エドナが所持する欲の聖剣。

● 他の聖剣やワンダーライドブックの力を吸収するという能力を持っており、それ故に対剣士相手では絶対的な優位性を持っている。

● あまりに強大な力を持っているがために、所持者の命すら奪う危険性が有ったため刀匠達によって封印されていたが、エドナを所有者として認め封印から解き放たれた。

『欲望剣餓欲エンブレム』：「欲望剣餓欲」の根源。シヤムシールを表す紋章が描かれており、聖なる力を吸収する力を持つ。

『ソードグリップ』：剣の持ち手部分。衝撃を吸収し、エネルギーとして蓄えることが可能。

『ガヨクトリガー』：「欲望剣餓欲」の引き金。剣士の操作を受けて、各種攻撃のスターターとしての役割を果たす。

『シンガンリーダー』：刀身の根元にある速読器。これにワンダーライドブックの裏表紙にあるスピリーダーを接触させることで、あらゆる

伝承の力を聖剣に宿らせることが出来る。

『ガヨクソウル』：刀身部分。叡智を宿した紫色に発光する刀身で、ワンダーライドブックの伝承を具現化する。

『グリーンティン』：「欲望剣餓欲」の刃。あらゆる属性を切り離して取り込む力を持つ。

【覇剣ブレードライバー】

●仮面ライダーシャムシールに変身するため用いられるドライバー。名称こそファルシオンと同一であるが、カラーリングは紫となっており、一部パーツも名称が異なっている。

『ブレードライバーシエルフ』：ワンダーライドブックを収めるための部位。「ムゲンウロボロス」が装填され、騎士の甲冑であるソードローブにその能力を授ける。

『ムゲンスケイラー』：ドライバーの左側のパーツ。ライドスペルラインにより伝達された「ムゲンウロボロス」の力を、変身解除後も所持者に絶えず齎す。また変身者が復活する際の体の情報を溜め込む部位でもある。

『ブレードフルゴル』：覇剣ブレードライバーの右側にあるエネルギー生成器。ワンダーライドブックから抽出したエネルギーを用いて、ワンダーオールを生成する。

『ライドスペルライン』：ワンダーライドブックの能力伝達路である下側部分。ブレードライバーシエルフで読み取ったワンダーライドブックの力を聖剣に伝える。

【ムゲンウロボロス】

「かつて全てを貪り喰らった蛇の王が今、蘇る」

●エドナが所持しているワンダーライドブックの一つ。ジャンルは神獣。カラーは紫。

●1ページ目には「自分の尾を噛むウロボロス」が描かれており、2ページ目のテキストには「貪欲な不死身の蛇の王が聖剣と交わり身に宿る」と記載されている。

●神獣「ムゲンウロボロス」が発する「輪廻の毒」により、使用者は人知を超えた再生能力を得る。エドナの不死身の根源。

●「輪廻の毒」は触れたものの情報を朽ち果てさせる力を有しており、これによりダメージや時間の経過を朽ち果てさせ、常に所有者を一定の状態に保っている。

●理論上は他の聖剣でも扱うことは可能である。

【銀河エクスプレス】

「とある二人の少年が乗り込んだ、不思議な列車の物語」

●エドナが所持しているワンダラーライドブックの一つ。ジャンルは物語。カラーは紺。

●1ページ目には「星空を走る列車」が描かれており、2ページ目のテキストには「星空を走る列車が聖剣と交わり身に宿る」と記載されている。

第5章 来訪する、二つの剣。

「ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル！」

「前回、神山飛羽真達の前に突如として現れた強欲の剣士シャムシル」

「世界を滅ぼそうとする彼女を倒すべく、剣士達は戦いを挑むんだけど、伝説のアーサー王の力ですら彼女には通用しなかったんだ」

「幸いにも、彼女が空腹でその場から去ったことで助かったんだけど、自分達の無力さを実感して落ち込む飛羽真達……」

「なんだか嫌な予感もするし、一体どうなってしまうんだろう!?!」

【SIDE：神山飛羽真】

「そうか……お前達も奴に会ったのか」

尾上さんの言葉に黙ったまま頷く。

時間が経つても残り続ける感覚。いくら攻撃しても、全く通用する気がしない、そんな圧倒的な実力差を見せつけられた。

「くっそ〜！ 俺が居たら、ちゃっちゃと倒してやったのに！」

不貞腐れたような口調で呟くのは、風の剣士である「緋道 蓮」。普段から自分の実力に自信を持った物言いが特徴で鼻につく奴だけど、今の俺にはそれに反応することも出来なかった。

「俺のスピードなら、そいつの攻撃なんて全部躲せるしな！」

「蓮。お前の実力は知ってるが、奴のスピードはお前と同等以上だ。そう簡単に勝てる相手じゃない」

「賢人君は心配しすぎなんだよ〜」

戒める賢人の言葉にも蓮は半分程度しか聞いていない。それはあの剣士と直接会っていないからこそその言葉だ。

勿論、負けるつもりで戦う気は無いけど、それでもどうすれば勝て

るのか、その糸口が見つからない。

アーサーを使ってやつと相打ち。しかもあれはまだ本気を出してないように見えた。もし本気の彼女と戦うとなったら、今の俺では敵わないだろう。

それに敵は彼女だけでは無い。メギドにカリバーもまた、どんどんと強くなっている。

「もつと強くならないと……」

俺と同じことを倫太郎も考えていたようだ。賛同するように頷いて立ち上がる。

「俺は絶対に諦めない。この世界を滅ばされる前に、絶対にあいつを倒す！」

「残念ですが、その必要は有りませんよ」

急に俺の言葉を誰かが遮った。聞き覚えの無い声。その主が誰なのかと辺りを見回す。

「あれを倒すのは我々の役目です。あなた方は関わる必要は有りません」

「っ、誰だ!!」

いつの間にか、本棚に背を預けこちらに視線を向ける長身の若い男の姿がそこに有った。突然の侵入者に尾上さんが激土を握りしめて睨みつける。

「ああ、名乗るのが遅れましたね。私の名はタルス。サウザンベースの剣士です」

「サウザンベース……?」

聞き覚えの無い単語に俺は首を傾げるけど、他の皆は驚いて目を見開いた。

「何でサウザンベースの剣士がここにっ!」

「だーかーらー、強欲の剣士を倒すためだつての。少し考えれば分かるだろ?」

頭上からまた別の声。視線を上に向けると、二階からもう一人の若い男が飛び降りてきた。その眼光は獲物を狙う獣さながらの凜猛さを隠していない。

「レボス、もう少し言葉は丁寧にするべきです。ここにはソフィア様も居るのですから」

「別に良いだろ。どうせここに居る剣士なんて、鈍らばかりだろうしな」

「何だと!!」

明らかな挑発に蓮が怒りの表情を浮かべて掴みかかろうとする。だけどそれを尾上さんが制した。

「落ち着け蓮。ここで争うのは止めろ」

「でもっ!!」

「お、何だよ。やらないのか?」

変わらずにやにやとした表情を見せつける、レボスと呼ばれた青年。そしてこの状況に呆れたような溜息を吐くタルスと名乗った青年。剣士を名乗った彼らは一体何なのかと思い、近くに居た賢人に小声で話しかけた。

「なあ賢人……サウザンベースってなんなんだ?」

「……サウザンベースというのは、こことは違う場所にある、ソードオブロゴスの本拠地だ。普段なら向こうの剣士がこっちに来ることはそうそう無いんだが……」

「聞こえてますよ、そこのお二方」

突然声を掛けられて思わず体が固まる。

視線を動かすと、タルスと名乗った青年が、和やかな表情を浮かべながらも、その瞳は鋭くこちらを見つめ、口を開いた。

「先ほども言った通り、私達がここに派遣された理由は、あなた方も出会った、あの強欲の剣士を打倒するためです」

「あいつを倒す……?」

静かに、しかし自信に満ちた声で宣言したその内容に思わず聞き返す。実際に剣を交えて、強欲の剣士がどれだけ強力な存在か俺は知っている。それを難なく倒して見せると豪語したのだ。

さすがにその言葉に、その場に居た全員が訝し気な表情を浮かべる。

「おい、あいつの強さを知っているのか? あいつは簡単に倒せるよ

うな相手じゃ「ちよつと煩いんだよねえ。少し黙っててくれない？」
警告する尾上さんの言葉を、邪魔だと言わんばかりに青年が遮る。
「あれを倒すのは、我々に与えられた使命であると同時に、我が一族の
悲願でもあります。あなた方はメギドの方に注力しててください」
「そう言うこと。それじゃ、せいぜい頑張りなよ〜！」

タルスの言葉にレボスが頷くと、そのまま二人は振り返ることなく
ノーザンベースから足早に出ていく。

そんな傲岸不遜ともいえる態度に、遂に蓮が我慢の限界に達した。
「っ何なんだよあいつら!! 突然来たかと思ったら、勝手なことを
言って!!」

「落ち着け蓮。ここで何を言っても仕方ないだろ」

賢人が落ち着かせようとするけど、それでも蓮の怒りは収まらな
い。

「あーもう、ムカつくーっ!!」

苛立ちを露にした叫び声がノーザンベースに響き渡った。

【SIDE：エドナ】

「はっー！」

「ふんっ！」

振るわれた刃がぶつかり合い、火花を散らす。

私が相對しているのは、紫色の装甲を纏った剣士。それは深き闇を
支配する剣士であり、私が一番会いたくなかった相手でも有った。

「全く、面倒この上ないっ！」

『強欲な列車！』

『欲求一突！』

ワンダーライドブックを読み込んだ剣の切っ先から実体化した光
の線路が、闇の剣士を捕縛しようとうねる。しかし、それを闇の剣士

は自らの聖剣で、的確に防ぐと、お返しと言わんばかりに一冊のワンダーライドブックを聖剣で読み込んだ。

『必殺リード！』

『ジャアク西遊ジャー』

すると刀身が朱いオーラに包まれ、一本の巨大な棍となる。

『月闇必殺撃！』

『習得一閃！』

それを振り回し、私を殴りつけようとする。だけどそれはワンダーライドブックの力によるもの。つまりは、欲望剣餓欲のエサ同然だ。

オーラの棍が振り下ろされる度に、私はそれを剣で受け流す。その都度、零れ落ちたエネルギーは餓欲に吸収されていった。そうなれば、徐々に棍の方が実体化を保てなくなるのは当然と言えた。

そして均衡は崩れる。

「そろそろ返すよ」

そう言っただけで私が剣を振るうと、溜め込まれたエネルギーが放出され棍を砕き、そのまま闇の剣士へ襲い掛かる。

「この程度っ！」

だけどその斬撃は闇の剣の一振りですぐに斬り払われた。やはりこいつは、他の剣士より幾分か実力は上のようなのだ。

「だけど一つ気になることがある。」

「ねえ、あんた剣士なのに、どうしてメギドを守ってるの？」

そもそもこの剣士と戦うことになった発端は、二十分ほど前に遡る。

いつものように、私に一方的に絡んできたメギドを倒そうとしたところに、突然こいつが現れてメギドを逃がしたのだ。

本来、剣士とメギドは対立する存在。世界を自分達のものに塗り替えようとするメギドと、この世界の均衡を守るといふ名分を掲げる剣士。それが手を組むなど有り得ないはずなのだが……。

私が問い掛けると、闇の剣士は静かに言葉を紡ぐ。

「……私が求めるのは、ただ一つの真理のためだ」

「真理？」

「そのためであれば、どのような道であろうと、決して止まることは無い！」

そう叫ぶと、腰のホルダーに聖剣を納刀した。

『月闇居合……』

「ハアっ!!」

『読後一閃!』

抜き放った刀身から放たれる闇の斬撃。その一撃に膨大なエネルギーが込められていることが分かる。

……だけどその程度だ。

ベルトに剣を納め、トリガーを引く。

『必殺黙読!』

迫りくる闇の斬撃。それに対し、私は真正面に向かって走り出す。「なっ?」

斬撃を迎え撃つわけでも、躲すわけでも無く、ただ走り出した私に、闇の剣士は驚いた様子だったが、そんなことは関係無い。

目前に迫る闇。それを私は正面から自らの体で受け止めた。

——ドオンツ!!——

爆発音と共に全身に激痛が走る。衝撃で骨は砕け、熱で肉が焼ける。そんな痛み。

ああ、こんな痛みは久しぶりだ。

別に私は死にたいわけでも、傷つきたいわけでも無い。しかし、不老不死の身であるため、時にはこうして痛みを感じなければ生きていくという実感が持てなくなる。

そして私の痛みは餓欲の力で瞬時に、余韻を残すことも無く消えていく。それが少し名残惜しいと思いつつも、私はベルトに納めた餓欲のトリガーを再度引いた。

『大蛇欲心撃!』

私は全身を包む爆炎を振りほどきながら、大きく跳んだ。

「ちっ、やはり!!」

私が何者なのか理解していたのだろう闇の剣士に対し、私は軽く体を捻りながら右足を闇の剣士に向ける。

「はあっ!!」

右足を紫色のエネルギーで包み込んだ私は、まるで一本の槍になったかのように、闇の剣士の頭上から蹴りを放つ。

『必殺リード!』

『ジャアクドラゴン 月闇必殺撃!』

闇の剣士も対抗するように、闇の力が込められた剣を私に向けて振るった。

空中でぶつかる私の蹴りと闇の斬撃。その衝撃で近くに生えていた大木も根元から折れる。

だけどいくら闇の剣士の力が強かろうと、私の前では等しく無意味だ。

「はあっ!!」

もう一度力を込める。ただそれだけで天秤はあっけなく傾いた。闇の斬撃は霧消し、私の蹴りが見事に闇の剣士の胸元へと吸い込まれていった。

「ぐあっ!!」

必殺の一撃を受け、吹き飛ばされる闇の剣士。その衝撃で変身が解け、壮年の男性の姿が露となる。

「さて……どうしようかな」

私の目的の為に、こいつのワンダーライドブックを奪うのが一番いいんだろうけど、今はあまり気が乗らない。それに、こいつの欲は少し面白そうだ。どうせ結末は変わらないのだから、見逃してあげよう。

「ああ、そうだ」

一つ言い忘れていたことを思い出して、倒れた闇の剣士に視線を向けた。彼は悔し気な表情を浮かべこちらを睨みつける。

そんな彼に、私はメギド達へ向けた伝言を伝えた。

「あんた達が何をしようが私には関係ないけど、最後にこの世界を手に入れるのは私だということ覚えておいて」

そして私はその場から立ち去る。

さて、少し本気を出したせいか眠くなってきた。しばらくどこかで

休んでいよう。

そう考えて私はワンダーワールドから抜け出したのだった。

【SIDE：カリバー】

傍らに生えていた木で痛む体を支えながら、私は立ち上がった。

あれが強欲の剣士……予想以上の力だ。かつて、組織の剣士達が総出で立ち向かいやつと封印できたという話は本当だったらしい。

「……この世界を手に入れるのは、か」

理由は不明だが、あれは世界を滅ぼすのが目的とされている。つまりは組織と相対する存在。ならばこっちが無暗に手を出す必要は無いだろう。剣士達と争っている間に、こちらは計画を進めればいい。だがいずれその時が来たならば、決着を付けなくてはならない。そのためにも、いち早くあの本を完成させなければ……。

「私は必ず……」

戦友だった男の顔を思い出しながら、私は懐から取り出した空白の本を見つめる。

必ずや真実を暴いて見せる。その決意を表すように、月闇の刃が鋭く光った。

第6章 破滅の剣士、再会の時。

「ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル」

「ノーザンベースに突如として現れた二人の剣士、タルスとレボス。彼らは封印から解き放たれたエドナを倒すために、ソードオブロゴスの本拠地から派遣されてきたんだ」

「だけど彼らは飛羽真達と協力する気は全く無いようで、それどころかノーザンベースの剣士達を見下す始末」

「先行きが不安だけど、大丈夫なのかなあ？」

「それに何か、嫌な予感がするんだ……っ!？」

「この気配、まさかあの剣士が？」

「これは、大変なことになりそうだ!!」

【SIDE：エドナ】

それは突然の出来事だった。

突如として私が持っていた欲望剣餓欲の刀身が淡く光を放つ。そして背筋を走る、僅かな寒気と高揚。

急いで私はその気配が感じられる場所へ向かった。久しぶりの再会だ。挨拶はしておくことにしよう。

そうして辿り着いたワンダーワールドの開けた土地。そこにあの男は居た。

「やあ、久しぶり……」

「ふっー」

声を掛けた私に振るわれる漆黒の剣を餓欲で防ぐと、高い金属音が鳴り響く。

「相変わらず、剣士と見るや否やそうやって剣を向けてくるのは止めてくれない？」

「貴様か。まさかまた会うことになるとはな……」

狂気を感じさせざる笑みを浮かべた男。相変わらずの態度に溜息を吐く。

かつて私が世界を滅ぼすために手に入れた、破滅の本に封印されていた剣士。全てを無に帰す聖剣の所持者。

「おはよう、バハト」

彼は私が知る限り、最強であろう剣士だった。

彼と出会ったのは、私がソードオブロゴスを離脱した数年後のこと。

醜く争い合う人間達が蔓延るこの世界に失望し、自分の思うがままに生きることを決めた私だったが、そんな生き方にも疲れたある日、ふと「破滅の本」について思い出した。

古の危険な剣士が封印された禁書。その封印が解かれれば、世界は滅びるとされている。

それを用いればこの醜い世界を一掃できるのではないか。その考えに辿り着いた私は、密かにサウザンベースに侵入し、難なくそれを手に入れたのだが、その本に封印された剣士というのが、この「バハト」だった。

その出会いは最悪の一言に尽きる。

「貴様、剣士か……ふっ!!」

封印が解かれたその瞬間に私に剣を向け襲って来たのだ。私も自らの聖剣で応戦した。

だけどお互いに不死の身。どれだけ傷つけ合おうと、すぐに回復する。それが何時間続いただろうか。

「貴様……中々面白いじゃないか」

「そつちもね。さすがは世界を滅ぼそうとした剣士」

互いにこれ以上の戦闘は無意味と理解した私達は、互いに言葉を交わした。バハトは「何故、私がこの本を求めたのか」、私は「何故、彼が世界を滅ぼそうとしたのか」。

そして私達は二人とも、この世界の有様に絶望していたことを知った。つまり目的は同じ。その果てに求めるものは違うとしても、それまでの道筋は共通している。ならば、協力できるはずだ。

それから私とバハト、さらに同じように世界を憂いた一人の剣士も合流し、私達は世界を滅ぼすべく行動したのだった。

「それにしても、どうやって復活したの?」

「知らん。気が付いたら、この本と共にここに居た」

そう言う彼が抱えていたのは、悍ましい気配を放つ一冊の本。これこそが世界を滅ぼす力を秘めた「破滅の書」。世界の滅亡を願う者が開けば、たちまち地球とワンダーワールドの両方を無に帰すほどの力を秘めた禁断の本だ。

「だが、相変わらず世界は変わらん……人間共の煩わしい声が、あちこちで響いてる……」

その口元には笑みを浮かべているけど、目はどこまでも深い憎悪に溢れているのが分かる。

「だが、その世界もすぐに無に消える。これの力でな……」

「……良いの?」

そのまま破滅の書を開こうとするバハトに、思わず口を挟んだ。

「何だ。邪魔をするなら、容赦はしないぞ?」

「……別に世界を滅ぼすのは望むところだけだよ」

こんな世界は滅びてしまえば良い。辿った道こそ違えど、その結論は私達共通の答えだ。しかし、気がかりな事が一つ。

「まだ本調子じゃないでしょ。それで剣士達に勝てるの?」

「ふん……」

鼻で笑うものの、復活が完全じゃないことは本人が何よりも分かっているだろう。

肌の一部が罅割れ、右目も僅かに霞んでいる。本来、不死身である私達であればすぐに回復するであろうダメージが残っている。それが彼が復活しきれしていない証拠だった。

それにまだ、もう一人の「慈悲の剣士」も目覚めていない。かつて万全の状態で戦った果てに封印されているのに、この状況で勝てるのかという不安は有った。

「例え連中が来たとしても、知ったことか。その前に全て終わらせてしまえば良い話だ！」

「だけど答えは変わらない。いや、変えられないと言うべきだろうか。彼は立ち止まるという考えも持っていない。ただこの世界に憎悪を燃やし、滅ぼすためだけに歩み続ける。」

「相変わらずだね……」

呆れながら溜息を吐く。

「それなら私は、見物させてもらうよ。まあ、剣士と会ったら、足止めくらいはしてあげる」

私はバハトに背を向けた。

私からすれば、バハトの行動を強く止める必要は無い。このまま世界が滅びればそれで良し。もしバハトが負けたら、さっさと逃げさせてもらおう。

ふと、一人の剣士の顔を思い出す。この間、剣を交えた炎の剣士。その力はまだ未熟だけど、あのワンダー^グライド^ブック^{サー}を手に入れているという事実は確かだ。その瞳からも、世界を守るといふ強い意志が感じられた。

彼とバハトが出会ったら、どうなるのか。少し面白そうと思いつつ、私はその場を離れたのだった。

【SIDE：バハト】

奴が背を向けて離れる姿を見ながら、俺は破滅の本の表紙に手を掛けた。

幾度と剣士共に邪魔されてきた悲願。この世界を滅ぼし、無に変え

る。その目的を、今こそ達成させる。

全ての始まりは遙か昔のことだった。当時、キエフ大公国の騎士だった俺は、世界を守るべく剣の腕を鍛えていた。

そんな俺には掛け替えのないものが二つあった。一つは家族。幼馴染で俺が怪我をする度に心配そうな顔で手当てしてくれた妻。そしてその間に生まれた愛娘。二人の笑顔を見るだけで、俺はどんな苦境にも耐え忍ぶことが出来た。

そしてもう一つは親友。同じ騎士団に所属し、共に世界を守ることを誓った二人の剣士だ。一人は冷静かつ馬鹿正直で、たまに言葉足らずで誤解されることも有るが、誰よりも優しい心を持っていた。もう一人は誇り高く、戦いとなると非情な一面もあつたが、普段は陽気なムードメーカーでよく俺達を笑わせてくれた。

この二つの宝を守るべく、俺は平和を汚す連中と戦い続けた。例えどれだけ自分が傷つこうと、どれだけ傷つけることになろうと、その先には争いの無い平和な世界があると信じて。

だが、そんな俺の思いは裏切られることとなった。

「何故だ……何故なんだ!!」

それは突然のことだった。俺が戦場に赴いている間に、親友の一人である陽気な騎士が反乱を起こしたのだ。

知らせを聞いて、俺はすぐさま城へと駆け付けた。だがそこに有つたのは、燃え盛る家、道端に投げ捨てられた民の遺体、そして逃げ惑う人々を襲う醜い異形の兵士の姿だった。

俺ともう一人の親友はすぐさま民を助けるべく、暴れる兵士達を斬り伏せながら街を駆け抜けた。

だが俺には気がかりがあった。剣を振るいながら人々に視線を向けるものの、そこに俺の大切な家族の姿が見当たらない。いくら兵士を倒そうと、嫌な予感が晴れることは無かった。

焦燥しながら、俺は一点を目指して足を動かす。どうか……どうか無事で居てくれ。俺はただ祈りながら走った。

だが、その願いが叶うことは無かった。

「あ、ああ……」

やっと辿り着いた場所、俺の家。そこには裏切った親友、そしてその足元で倒れる一人の女と小さな子供の影があった。

それを視界に入れた瞬間、俺の心に怒りが満ち、その激情のまま親友へと斬りかかった。親友もまた有数の騎士では有ったものの、実力は僅かに俺が勝り、僅かな隙を突いて斬り伏せた。

力無く倒れた親友の姿を見届けた後、俺はすぐさま倒れ伏す女と子供の許へと向かう。どうか間違いであってくれ。そう考えながら、震える手でその女と子供の顔を確認する。そして声にもならぬ叫びを上げた。既に冷たくなっていたその二人は、間違いなく俺の妻と娘だった。

何故だ。何故、俺の家族がこんなことで死ななければならぬのだ。それも、信じていた親友の手によって……。

俺はたった一日で、大切な宝を二つとも奪われたのだ。

後に分かったことだが、親友は少し前から敵国と通じていたらしい。その国の王から国宝である剣を渡され、その力に魅入られた結果がああ悲劇であると。

もう一人の親友「ユーリ」にそう伝えられたものの、その時の俺は空っぽだった。何故、こんなに理不尽に家族を奪われなければならないのか。何故、信賴していた親友にこのような非道を受けなければならないのか。何故、何故、何故!!

全てを失い絶望した俺には、最早世界を守る意味を見出せなくなっていた。

当てもなく国を離れ、放浪する。だが見えてくるのは、人間の汚い所だけ。奪い、騙し、傷つけ、争う。

そんな人間達に次第に憎しみが湧いてくるのを感じた。平和の為に身を惜しまず尽力してきたというのに、人間達は、悪意のままに争い合う。結局、それが人間の本性だと言うのか。

永遠に平和が作られないというのなら、いつそのこと全部滅ぼしてやる。

そう決意すると、いつの間にか俺の目の前に、燃え盛る漆黒の刀身を持つ剣があった。何故か俺には、それが語り掛けてくる感覚がし

た。引き抜け、全てを滅ぼせと……。

『無名剣虚無!!』

その言葉のままに俺は剣を引き抜くと、その瞬間、俺の姿が変貌する。それはまるで伝説に語られる不死鳥のような姿の鎧だった。

それだけじゃない。体の奥底から噴き出るかのような熱い力。そしていつの間にか手にしていた、一冊の本。それは古びた黒い本。ふとその本を開くと、開かれたページから闇が溢れ、周囲の街や人を飲み込み始めた。

ああ、そう言うことか。これを使つて世界を滅ぼせと……。

全てを理解した俺は早速行動を始めた。最早、この世界に未練など無い。争いが終わらないというのなら、全てを消し去つてしまえば良い。

あちこちへ足を伸ばしながら、俺は破滅の書と名付けたそれを使つて滅びを与えた。時に名のある騎士達が挑んでくることも有ったが、虚無を手にした俺の敵では無い。それに大概の奴は、闇から生み出された白い怪物によつてなすすべなく倒されていく。

この世界に俺を邪魔する者は居ない。そのはずだった。

「止めるバハトー！」

立ちはだかったのは、親友だったユーリだった。奴も俺と同じように聖剣を手にし、俺に勝負を挑んできた。

「何故邪魔をする。貴様も理解しているはずだ。この世界に守る価値など無いとー！」

「そんなことは無い。今も昔も、俺は世界を守る剣士として戦う！」

互いに主張を退けることは無く、剣をぶつけ合う。だが聖剣を手にしたユーリは、俺の記憶の奴とは全く違っていた。光と闇の聖剣を巧みに扱い、俺を追い詰める。俺も虚無を振るつて奴の力を無効化するものの、追いつかない。

そして遂に奴の聖剣が俺の胸を貫いた。その切っ先が心臓を通り、肉体を貫通する感覚が有った。

そうか。俺は負けたのか。だが、これであいつの許に……。思い出される家族の顔。やっとこれで俺は終われる。

だが、それは許されなかった。

「なっ!？」

驚愕の声。それを発したのは俺か、それともユーリだったか。俺の全身が炎に包まれ、瞬く間に傷口を塞いでいく。

「ははっ……ははははははははハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

俺の意思に反して、完全に回復した体を見て、俺は嗤った。

なんだこれは？ 俺は死ぬことも許されないのか？ 止まることも許されないのか？

「バハト……」

啞然とするユーリに、俺は嗤いながら剣を振るう。だが奴も二本の聖剣で攻撃を往なし、幾度となく俺の体を斬り付ける。だがどれも致命傷になることは無い。いや、致命傷になろうとも、すぐに回復する。世界が滅びるまで、俺が死ぬことは無い。この世界の結末は決まっただのさ。

だがただ一人、ユーリが折れることは無かった。

「すまないバハト……」

たった一言の謝罪。それが何を意味していたのかは知らない。知る気にもならない。

奴は回復のために動きが止まった俺を、破滅の書へ投げ込むと、そのまま光と闇の聖剣で俺を破滅の本ごと封印した。

俺は抵抗したが、幾ら暴れようと脱出することは出来ない。永劫に続く闇の中、死ぬことも出来ず、ただ閉ざされた世界で暴れ続けた。

俺は許さない。絶望を知りながら俺を封印したユーリを、争うことを止めない愚かな人間達を、偽りだらけの不完全な世界を。

そして憎悪に身を焦がし続けていた時、不意に俺の封印が解かれた。

何故、俺の封印が解けたのか。そんな疑問を持つことも無く、ただ世界への憎しみを燃え上げながら降り立つ。

「……あんたが不死身の劍士?」

そんな俺の前に居たのは、破滅の書を開いた少女。

やがてこいつと、世界を滅ぼすべく共に戦うことになるとは、その時は思ってもいなかった。

第7章 一族の罪、断ち切るために。

「ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル」

「……つて呑気に挨拶をしている場合じゃないんだ!!」

「何と世界を滅ぼそうとした不死身の剣士の一人、バハトが復活してしまっただよ!」

「しかも彼は、禁断の破滅の本を開いて、世界を滅ぼそうとしている真つ最中! このままでは世界が全て無に消えてしまう!」

「急ぐんだ剣士達! 世界の命運は君達の手……うわああ!!」

【SIDE：エドナ】

私の眼前に広がるのは、現実世界とワンダーワールド全てを飲み込み消し去る虚無の穴。破滅の書によって作られたそれは、本が閉じられるまで消えることは無い。

「さて、どうなるかな?」

この状況に気付いた剣士達は、バハトを止めるべく駆けるものの、それを阻むように怪人シミーが溢れ出た。一人また一人と、他の剣士を前に進めるべくシミーの足止めを請け負うことで、バハトへの道を作りあげていく。

そして残ったのはたった一人。あのキングオブアーサーに選ばれた炎の剣士だ。

私は彼のことをそれなりに気に入っている。だからこのまま見逃してあげても良いとは思うけど、一応バハトと約束をしたのだ。残念だけど、彼にはここで止まっていってもらおう。

そして私は一歩足を踏み出そうとした……。

「見つけましたよ、強欲の剣士!」

だけどそんな私に水を差す無粋な連中が現れた。

「お前をここで倒して、俺達ゴート一族の汚名を雪ぐ！」

振り向いた先に居たのは、まだ若い二人の青年。言葉からして、どうやらあの家の末裔……私の兄弟の子孫なのだろう。

その手に握られているのは、二振りの剣。その内一本には見覚えがある。

「魂魄剣深魂……」
こんぱくけんみたま

それは私の父が所持していた剣。死者の魂を操り、自らの力に変える聖剣だ。

もう一本には見覚えが無いため、この600年の間に打たれた剣だと予想できる。

「行きますよレボス！」

「ああ！」

二人はそれぞれワンダーライドブックを取り出して、その表紙を開く。

『百夜怪談！』

『とある亡霊達が集う、恐ろしき夜の出来事……』

『猛獣王列伝！』

『この荒ぶる獣を止められる者は誰も居ない！』

起動させたワンダーライドブックを、一人はベルトのバックルに、もう一人は剣の鏢に装填するのを、私は冷めた目で見ていた。

「ふうん、仕方ないか」

こいつらの目的は私。あんまり気乗りはしないけど、やるしかなさそうさ。

『ムゲンウロボロス』

『かつて全てを貪り喰らった蛇の王が今、蘇る！』

私もワンダーライドブックを起動させて、ベルトに装填する。

そして一人は剣の柄でバックルを押し、一人は剣のトリガーを引き、私は餓欲をベルトから引き抜く。

「変身！」

その瞬間、私を含めた三人の声が重なった。

『Don't fear! The one hundred so

uls turn into the your force.』

『百夜怪談!』

魂魄剣深魂を手にした青年は、その剣を脇構えから振り抜くと、ライドブックから溢れ出た靈魂によってその身が包み込まれる。

『黒鉄^{くろがね}皆伝!』

『鉄鋼王! 激昂王! 猛獣王列伝!』

見知らぬ剣を手にした青年は、細身の剣を大きく振り回し、ライドブックから現れた虎の影と一体となる。

『抜刀!』

『ムゲンウロボロス』

私もまた、聖剣を地面突き刺し、ライドブックから姿を現した大蛇をその身に宿す。

『深魂解説! 冥府の剣が彷徨う魂を支配する!』

『凜猛な刃が己の道を切り開く!』

『餓欲! 飢え渴く剣が喰らい尽くす!』

三者三様の変身によつて、その身は鎧を纏った剣士へと変化した。目の前に居るのは二人の剣士。一人は懐かしい、あの父と同じ鎧姿。薄紫色のスーツに黒みがかかった銀色の装甲を纏ったそれは、正しく亡霊剣士と言つて良いだろう。

もう一人はそれとは打つて変わり、どこか生物感を漂わせる。顔の装甲は獣の爪痕のようになっており、全身にはまるで虎や豹を思わせる紋様が走っていた。

『はあっ!』

そんな感想を抱いている間に、魂の剣士―エストックが私に挑みかかる。

その鋭い突きを躲しながら、餓欲を振るうけど、それはもう一人の剣士によつて防がれ火花が散る。

『喰らいやがれ!』

もう一人の剣士が餓欲を弾き、その勢いのまま斬りかかる。けど動きは読みやすい。私はバックステップで避ける。

『でやっ!』

けどその剣士をブラインドにして跳躍したエストックが、頭上から剣を振り下ろしてきた。それを私は餓欲で防ぐ。

「っ！」

しかしすぐにそれも困だと気付いた。

今度はエストックの背後からもう一人の剣士が、姿勢を低くしながら剣の切っ先をこちらに向けて突進してきた。

「ふっ！」

すぐさま私はエストックを蹴り飛ばし、その勢いで回避しようとしたが、一歩遅かった。僅かにその一撃が装甲を切り裂いた。

ダメージはそれほどではないけど、それでも予想以上にこいつらの動きが良い。

「はぁ……」

思わず溜息が零れる。

偽りの聖剣のくせに、ここまでやるなんて……。

やるせない気持ちは消えないけれど、私は再び襲い掛かって来た二人の剣士を迎え撃つべく再び剣を構えた。

【SIDE：タルス】

私達が強欲の剣士との戦闘を開始してから早数時間。戦況はこちらが有利と言えました。

確かに不死身の体に幾ら傷を付けても、すぐに回復します。ですがそれは全く無駄というわけではありません。奴の体は高速で回復してはいますが、ダメージや疲労が消えるわけじゃない。

奴の回復する速度は僅かではあるが少しずつ遅くなっています。それが奴のダメージを如実に表していました。

「はっ！」

「その程度っ！」

私が放った渾身の突きは剣で弾かれましたが、それを囮として今度はレボス―虎徹が背後を狙って剣を振るう。

「喰らえっ！」

鋭い一撃。だが奴はそれを横に転がりながら回避して見せました。

「……面倒としか言いようが無いね」

奴は何でもないように言っていますが、その息が荒いのが分かります。

これが我ら一族が何百年もの時を掛けて築いた成果。この世界を混乱に陥れようとする者を倒すべく、先祖代々積み上げた戦技。その力が確実に奴を追い詰めていました。

「破滅の本も止めなくてはいけませんからね。さっさと倒させてもらいますよ！」

今はノーザンベースの剣士達が不死身の剣士を相手をしています。が、彼らの力ではどれだけ保つかは分かりません。さっさとこちらを片付けて、助成に向かわなくては……。

「……ん？」

しかし、まるで私達のこと眼中に無いかのように、奴の視線は全く別の方向へと向けられています。その先に有るのは、あの虚無の剣士が居る方向。

「中々やるね……やっぱりあっちの方が面白そうだ」

「余所見している暇なんてあるのかよ！」

レボスが斬りかかるものの、それは容易く防がれる。

やはりただの攻撃では無く、向こうのバランスを崩す一撃を与えなくてはなりません。そのためには……

「レボス、あれで行きましょう」

「オーケー」

私の指示にレボスは応えると、手にした聖剣「鉄鋼剣黒鉄」てつこうけんくろがねを脇に構えると、鏢についたスイッチを押します。

『必殺鋼読！』こうれく

聖剣に力が宿り、エネルギーを迸らせる。

「行くぜ！」

そして勢いよく走り出したレボスは再度スイッチを起動。

『黒鉄斬鉄閃！』

溜め込んだエネルギーを直接力に変えて放たれる斬撃。

「くっ！」

奴もまた聖剣で防ぐものの、勢いを殺し切れず押し込まれていく。それもそのはず、鉄鋼剣黒鉄は奴の餓欲の天敵とも言うべき性能を持っているのですから。

欲望剣餓欲。それはあらゆる聖剣やワンダーライドブックが持つエレメントを吸収するというもの。剣士にとっては存在そのものが厄介な相手です。

しかし、対抗策が無いわけではありません。その一つが、吸収できるのは放出された力しか吸収できないという点。体内に巡る力までは吸収出来るわけでは無いため、変身を直接解除させるような真似は出来ませんし、そもそもエレメントを纏わない攻撃に対してはその力を十二分に発揮させられません。

鉄鋼剣黒鉄は鉄の属性を持つ聖剣。その力は外側へ放出するのではなく、内部で蓄積することで斬撃の強化、刀身の強度上昇に特化しています。そのためエレメントを放出することで真価を発揮する他の聖剣と異なり、餓欲によってその力を吸収されづらいという大きな特徴を持っています。

その鉄鋼剣黒鉄の力を発揮した一撃。ですが奴を追い詰めてはいるものの、それだけでは決め手にはなりません。だからこそ、この瞬間を逃すわけにはいかない。

私はバックルからライドブックを取り、深魂の切っ先へと翳した。

『必殺リード！ 百夜怪談！』

欲望剣餓欲のもう一つの弱点。それはエネルギーを吸収できるのは刀身部分のみであるということ。刀身に触れなければ、防がれることは無い。

『深魂必殺撃！』

ライドブックから力を取り込んだ剣が銀色の光を放つ。そして私はそれをレボスが抑え込んでいた強欲の剣士に向かって振るう。

「妖魔百閃!!」

聖剣から幾重もの光弾がミサイルのように放たれる。

「おらあつ!!」

そしてレボスが勢いよく腕を振るい、奴を吹き飛ばします。その勢いに抗うことが出来ず、奴は体勢を崩したまま光弾に直撃。大きな爆発が巻き起こり、土煙が辺りを覆いました。

「へっ、どうだ!」

「レボス、油断をしてはいけませんよ」

まだ奴を倒せたわけでは無いはずです。私は深魂を握り直して、もうとうと土煙が舞うその場所を睨みつけました。

「……」

「つやはり!」

土煙の中からゆっくりとした足取りで現れたのは、五体満足の強欲の剣士。予想通り、そのダメージは完全に回復していますが、少し動きがぎこちなく感じる。それを疲労によるものと判断した私は、奴へ会心の一撃を叩きこむためにとあるライドブックを取り出そうとして、ふと気づきました。

奴の注意がこちらに全く向いていないという事実……。

「ふうん、またあの力がね……」

「何?」

ふと気になって奴の視線の先を見ると、そこには驚くべき光景がありました。

地面から空へと昇る紅の龍。そして全てを飲み込もうとする破滅の書から現れた白と黒の龍。この三体の龍が重なり、眩い光を放ったのでした。

「な、何だこれ!?!」

その輝きにレボスは呆然とします。

ですが私にはこの光景に覚えがありました。それは昔、私が強欲の剣士にまつわる記録を読んだ時のこと。強欲の剣士とその仲間である二人の破滅の剣士。彼らを封印するために生み出されたワンダーライドブック。その誕生の瞬間を記した文章にはこのように書かれ

ていました。

—破滅の書より解き放たれる二つの希望—

—災いを恐れぬ勇氣と交わるとき—

—滅びを退ける輝きの中で、未来を切り開く力が生まれん—

この光景はまさにその記録とそっくりでした。

「……今のバハトじゃ、これは難しいかな」

ふと我に返ると、奴はいつの間にか桃色のライドブックを取り出してこちらを見つめていました。

「生憎だけど、もう戦う意味が無くなったから、帰らせてもらうよ」

「そんなこと……っ！」

奴を止めようと動き出しましたが、それよりも奴がライドブックを剣に翳す方が早かった。

『夜桜奇譚』

『強欲な夜桜！』

『欲求一突！』

「くっ!？」

「じゃあね……」

奴の聖剣から大量の花びらが舞い散り、私達の視界を封じます。その量はまさに花びらの嵐と言って良いでしょう。

そして旋風が止んだ時、そこには既に強欲の剣士の姿は有りませんでした。

「ちっ、逃げやがった!!」

まんまと奴に逃げられたことにレボスは怒りを露にしますが、この戦いにも意味はありました。

私達の力は強欲の剣士に十分通じるということ。きっとこのワンダーライドブックを使えば、倒すことも可能なはず。

「今は悔しがっている場合じゃありませんよレボス。今は破滅の書を……」

「……そうだな。よし、行くぞー!」

そしてレボスを追いかけるように私も走り出します。懐に金色のワンダーライドブックを潜ませながら……。

【SIDE：エドナ】

「……面倒だったな」

私はワンダーワールドの僻地で大木にもたれ掛かりながら呟いていた。

まさか、あの一族の連中とまた会うなんて。未だに私を目の敵にするとは、随分と恨みがましい。しかも餓欲の弱点を理解した戦い方をしてきたのが厄介だ。

あの連中はまた私を狙って来るだろう。そう考えると憂鬱で仕方ない。

「……まあ、どうでも良いか」

あんな連中のことを考えるよりも、他のことの方が大事だ。

あの炎の剣士が、キングオブアーサーに続いて、破滅の書に隠された力すら引き出すとは思ってもみなかった。厄介な相手が増えたことに変わりはないが、面白いと思う感情も有る。

しかし、あの力を手にしたということは、きっとバハトも破滅の書も封印されることだろう。そうなれば破滅の書はソードブロゴスの手に渡り、禁書庫へと封じられるはずだ。

つまり私も目的のためには、禁書庫があるサウザンベースへと侵入する必要があるということ。しかし、今の私はサウザンベースへと繋がるブックゲートを持っていない。さてどうしたものか……。

「……ちよつと待てよ？」

むしろ今の状況はチャンスなのでは無いだろうか。静かに今の私が置かれている状況を思い起こし、整理する。

うん。これなら私の目的へ大きく近づくことが出来る。問題は、向

こうが行動するのをただ待つしか無いわけだが。

「……仕方ないか」

今はとりあえず腹ごしらえでもしようか。そう考えて、私は聖剣の力で現実世界への扉を開いたのだった。

第8章 優しい人、けれど私は。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル」

「前回は大変だったよ。なんせ破滅の本から復活した不死身の剣士ファルシオンによって、世界が崩壊する寸前だったからね」

「でも神山飛羽真を始めとした剣士達の手によってファルシオンは倒され、破滅の本は無事封印されたんだ」

「だけどまだこの世界には、シヤムシールというもう一人の危険な剣士が残っている」

「サウザンベースから来た二人の剣士が彼女を追っているようだけど……彼らは無事に彼女を倒せるのだろうか？」

【SIDE：芽依】

もぐもぐ、バリバリ、むしゃむしゃ、ぐくぐく……

そんな擬音が聞こえてきそうなほど、沢山のケーキを一心不乱に食べる一人の女の子。どう見たって入るとは思えないのに、まるでブラックホールのように華奢な体に次々と飲み込まれていく光景は、周りの人の注目を集めていた。

どうしてこうなったのか。ベンチで女の子の隣に座りながら、うちはその光景を遠い目で見つめていた。

今日もまたノーザンベースへと向かうべく、飛羽真の本屋へと向かっていた。

ただの編集者だったうちは、小説家の神山飛羽真と共に突如としてソードオブゴスという組織とメギドの戦いに巻き込まれて、その日から色々な出来事が有った。ある時はメギドに襲われたり、ある時はメギドに攫われたり……あまりろくな目に遭ってないような気はす

るけど、まあ良いや。

何はともあれ、うちも（自称）組織の一員として頑張ってきた。だけど最近はどこか雰囲気グロッキーしている。少し前には破滅の書が復活して、世界が滅びる寸前にまでなったり、時々現れていた闇の剣士の正体が実は飛羽真の命の恩人だったことが判明したり……。

そのせいか皆どこか緊張しているみたいだし、少しでも雰囲気を和らげようと、ちよつと奮発して高いケーキを買ってみた。皆喜んでくれると良いけど……。

—ぐきゆるるる—

そんな時、妙に甲高い音が耳に入った。

その音が聞こえたのは、人気のない路地裏がある方向。どこか不気味な雰囲気醸し出すその場所へ、少し身構えながら音の正体を探ろうと一歩ずつ近づいてみる。

もしかしたらメギドかもしれない。そんなことを考えながら、もしもの時にはすぐに飛羽真や倫太郎に連絡できるように、片手にスマホを持ちながら、その路地裏を覗き込んでみた。

だけどそこでうちが見たのは、予想外のもの。

「……ううう」

「え？」

そこに居たのは、うちよりも年下と思われる女の子が、倒れている光景だった。

一体何が……事件にでも巻き込まれたのか。そんな不安を抱えてうちはその女の子に近寄り、抱え上げる。

「どうしたの？ しっかりして!？」

必死に声を掛ける。いや、こういう時こそ落ち着かないと……まず救急車だ！ 急いでスマホに手を掛ける。だけどそこで女の子が口を開いた。

「……か……った」

「え、どうしたの？」

何を言おうとしているのか聞き取るべく、彼女の口元に耳を近づけ

る。するとさつきより明確な言葉が耳に入った。

「……おなか、へった」

「お腹減った？」

「ぐきゆるるる〜」

再びあの甲高い音。それが彼女のお腹の虫と気付いて、うちは全身から力が抜けてしまった。

そしてうちは持っていた高級ケーキを分けてあげた訳なんだけど……本当は一個だけのはずだったのに、なぜか箱ごと持っていかれ、そのまま女の子がケーキを貪る光景をただ茫然と見つめることしか出来なかった。

それほどお腹が空いてたんだろうけど……少しは遠慮して欲しかったなあ……それ買うのに財布の中身がほとんど全部吹っ飛んだし……。

だけどそんな気持ちも全く気付かず、女の子はケーキを手づかみで次々と口に放り込んでいく。

そして遂に最後の一個まできれいに平らげると、ふうと息を吐いて一言、

「……足りない」

っ、ケーキをあれだけ食べて足りない!?

驚きと怒りがなймаぜになりながら、どうにか気持ちを落ち着けようとする。

女の子はそのまま自分の手に付いたクリームをペロリと舐めると、こつちに視線を向けてきた。

「……ああ、ごちそうさまでした。これ、美味しかったよ」

「あ、うん。それは何より……」

「でも悪いことしたね。あんたの菓子、全部貰っちゃって」

そう思うなら少し残して欲しかった。でもそのことはとてもショックだけど、まあケーキならまた今度買えばいい。

「それよりも、どうしてあんなところで倒れていたの？」

あんなところで飢えて倒れているなんて、普通なら有り得ない。そ

れも、まだ20歳超えているかも分からない子がだ。

そう聞くと、女の子はどこかはぐらかすような笑みを浮かべた。

「まあちよつと色々あつてね。探してるものがあるんだけど、それがなかなか見つからなくてさ。それで気が付いたらお腹が減って倒れてた」

「その探してるものって?」

「……ちよつと言えない」

何か隠してるようだけど、あまり話したくないみたいで、そこで会話が途切れた。

そして女の子は唇をぺろりと舐め上げると、座っていたベンチから立ち上がる。

「お菓子、ありがとね。助かったよ」

「あ、うん」

そのまま去っていく女の子。だけど不意にうちの方に振り返ってこう呟いた。

「人間が皆、あんたのように優しかったら……」

「え?」

聞き返すけど、女の子が答えることは無く、そのまま人込みの中に消えていく。

うちはその後ろ姿をただ見つめていた。

【SIDE・蓮】

「でやあつ!!」

いきなり街にメギドが現れた。しかも六体も。そいつらを倒すために、俺はワンダーワールドの一つに入り込んだ。

「ギシイっ!!」

そこに居たのは、小鬼みたいな姿のメギド。それを見た瞬間に俺は

「風双劍翠風」ふうそうけんはやての力で、仮面ライダー剣斬へと変身した。

このメギド、この前現れた蛇のメギドと比べたら、大して強くは無い。俺のスピードには付いてこれず、さつきから攻撃を空振りしてばかり。対して俺の連撃は面白いくらいに命中する。

この程度ならさつきと他のところの奴も大したことは無さそうだ。

「すぐに終わらせてやる！」

さつきとケリをつけるため、ワンダーライドブックを風双劍翠風から外す。このまま必殺技で終わり。そう思ってた。

『強欲な大蛇！ 欲求一突！』

「うあっ!？」

不意に殺気を感じて右を向くと、そこには紫色の斬撃が迫る光景が有った。思わず後退るけど、躲し切ることが出来ず、俺の体に斬撃が当たった衝撃で吹っ飛ばされる。

「うぐ……」

一体何が……まさか新手のメギドか……。

そんなことを考えながら俺は顔を上げる。

「風の剣士か……予定外だったけど、まあ良いや。さて、あんたはあれを持ってる?」

そこに居たのは、紫色の鎧を纏った女の剣士。まさかこんな時に会うなんて……

「強欲の剣士……」

尾上のおっさんや賢人君たちが言ってた相手。あの不死の剣士と同じ実力を持つという、最悪の剣士の一人。

いつか会ったら、俺が倒してやろうと思っていた相手。コイツを倒すことが出来れば、賢人君も俺のことを認めてくれるだろうし、それのサウザンベースから来たいけ好かないあいつらも見返してやれる。

「お前は俺が倒してやる！」

俺は双剣となった翠風を両手に持ちながら、強欲の剣士に向かって挑みかかる。例えばどんな相手だって、俺のスピードには付いてこれない!

「喰らえっ!」

フエイントを織り交ぜながら、一瞬で無防備な背後に回り込んで、俺は翠風を振るう。これは絶対に躲せない！

「……とろいね」

だけどソイツは、俺の動きが予測していたように振り向いて、その剣で攻撃を防いで見せた。

「つやるじゃん。なら、これはどうだ！」

今度は連撃。俺の武器は二本でコイツは一本。手数なら俺の方が多。防御が追い付かなくなるまで攻撃すれば良い！

「ふうん……」

俺の剣と強欲の剣士の剣がぶつかる度に火花が散る。だけど俺の攻撃に対して、奴は防御することしか出来ない。これなら……。

—ギンツ—

—ガンツ—

—ガイン—

一撃、二撃、三撃と連続で剣を振るう。その度に奴は剣で防御して、俺は次の攻撃を放つ。何度も何度も……。

「……つまらないや」

「っ!?!」

どうして俺の攻撃が当たらないんだ。全力の振り下ろしも、二刀を別方向から振るっても、回転で勢いを付けた一撃も、その全てが奴の聖剣に防がれる。

徐々に焦りが出る。そんな俺に奴は一言、

「……つまらないや」

「なっ!?!」

つまらない。そう言われて思わずカチンと来た。そんなに俺を舐めるなら、これでも食らえ！

『猿飛忍者伝！ ニンニン！』

『翠風速読撃！ ニンニン！』

『疾風剣舞・二蓮！』

ワンダラーライドブックの力を宿した双剣を俺は何度も振るい、疾風の斬撃を放つ。まるで嵐のように奴に迫る攻撃。これを躲すことな

んて……

「無駄」

だけどソイツはまるで声色を変えず、ただ剣を前に掲げた。だけどそれだけで、俺が放った攻撃の全てがソイツの聖剣に吸収されていく。

「なっ!？」

ソイツの聖剣が取り込んだ風を纏い、徐々にその力を増していく。

「はっ!!」

そしてさつきとは逆に、暴風のような斬撃が俺に襲い掛かった。

それを俺は双剣で防ごうとしたけど、食い止めることは出来ずに、渦に飲み込まれながら吹き飛ばされ、地面へと強く叩きつけられた。

「ぐあっ……」

こんな奴に俺が……その事実を認めたくないけど、すぐに立ち上がることが出来ない。その間に奴はゆっくりと俺に近づいてきていた。

「さて、それじゃ」

そして倒れ込んだ俺に聖剣の切っ先を向けると、勢いよく振り下ろす。

思わず自分が受けるだろう痛みを覚悟して目を閉じる。

—ガイーンツ—

だけど俺に届いたのは、剣で突き刺される痛みじゃなく、金属同士がぶつかり合う音。

「無事ですか、風の剣士?」

「な、お前っ!!」

俺の命を救ったそいつは、俺が嫌いな奴、サウザンベースから来た剣士の一人だった。

【SIDE：タルス】

強欲の剣士を仕留めそこなった私達は、あれからも奴の行方を追っていました。未だに発見することは出来ず、一向に進展しない状況に対し、ビルの上で溜息を吐いていました。

「つたく、あいつはどこに居やがる!!」

レボスも苛立ちを隠し切れないようで、近くの建物の壁を殴りつきます。

その後、一度ノーザンベースへと戻りましたが、そこでも大した情報は得られず、逆に風の剣士から「あんな大きいこと言っておいて、逃げられてんの？」と挑発されたのが、大分レボスのストレスとなつていくようです。

「落ち着いてくださいレボス。私達の戦術は確かに奴に効いていました。次は必ず勝てます。焦ることはありませんよ」

「つタルス……」

私の言葉を聞いて、何とか落ち着いてくれました。

ですが、出来るだけ早く奴を見つけなければいけない事は確かです。奴がこの世界に彷徨っている。それだけで、多くの人々にとって危機が近いということでもあるのですから。

「っ!?!」

しかし、そんな私の思いとは裏腹に、世界に異変が起きました。そう、メギドの出現です。

「レボス、これはっ!!」

「ええ、まさかこんなことが……」

私達の視線の先に有るのは、メギドの出現によって現実世界がワンダーワールドに侵食されていく光景。それ自体は見慣れたものであるため、特に慌てるようなことではありません。ですがその数が問題でした。

「まさか、六ヶ所同時とは……」

通常なら有り得ないほどの侵食が、同じ場所で同時に起こる。それは話に聞く15年前の重大事件のそれとそっくりです。

「これは奴を追っている場合じゃありませんね」

私達の目的は奴を探して倒すこと。しかし使命はこの世界の平和

を守ることです。ここでメギドを見過ごしては、剣士を名乗ることとは出来ません。

「ああ、行こうぜタルス！」

鉄鋼剣黒鉄を担いだレボスに私は頷き返すと、ブックゲートを開き、メギドを倒すべくワンダーワールドへと侵入しました。

そしてそこで見たのは、倒れ伏す風の剣士と彼を手に掛けようとする強欲の剣士の姿。

「っ!!」

急いで私はワンダーライドブックをベルトのバックルに装填し、スイッチを押します。

「Don't fear! The one hundred souls turn into the your force.」

「百夜怪談！」

「深魂解読！ 冥府の剣が彷徨う魂を支配する！」

— ガインツ —

強欲の剣士の一撃がまさに風の剣士へと振り下ろされるその瞬間、魂魄剣深魂を割り込ませることに成功し、聖剣がぶつかり合う音が鳴り響きました。

「無事ですか、風の剣士？」

「な、お前っ!!」

私の姿に思わず絶句した様子の子の風の剣士。その隙に強欲の剣士が私に斬りかかろうとしましたが、ここに居るのは私だけではありません。ん。

「させるかよ！」

「ちっ」

変身したレボスが奴に向かって斬りかかります。上手く奴の隙を突いた一撃、しかしながら奴は瞬時に背後へと跳躍し、その攻撃を躲しました。

「はっ、大口叩いた割に、随分とこっぴどくやられたみたいじゃねえか」

「っ煩いな！ お前達だってあいつ逃がしてたんじゃないか！」

「はんっ、俺達はアイツに負けた覚えはねえよ！」

互いに憎まれ口を叩く二人。どうやらそれほどダメージは無さそうです。

ですがまさかこんなところで強欲の剣士と出会うとは……あれは倒すべき相手。ですが同時にこの場も放置することは出来ません。

「……風の剣士、貴方はメギドを倒しに行ってください。奴の相手は私達がします」

「なっ、お前達の助けなんか……」

「お願いします。ここで言い争っている暇はありません」

私が強くそう言うと、風の剣士は押し黙ります。

「確かに強欲の剣士は倒すべき相手です。ですが同時にこの街も救わなくてはなりません。何せ六ヶ所同時にメギドが出現しているのです。ここで時間を取られては、他の場所に居る人々が危険です」

風の剣士は状況を理解し、どこか不満げな雰囲気を纏いつつも、手にした聖剣をこちらに向けました。

「分かった。お前らもしくじんなよ！」

「ええ、任せてください」

彼が駆けだす姿を見送り、私とレボスはそれぞれの聖剣を構える。

「それでもう良い？ ちょっと必要な物があるから、さっさとしたいんだけど」

「ふん、わざわざ待っててくれたのかよ。随分と余裕だな」

剣をゆらゆらと振る強欲の剣士に対し、レボスが挑発し、私もゆっくりと隣に立ちます。

「では、今度こそ決着を付けましょうか」

そして私達は意気揚々と私達は強欲の剣士へと挑みかかりました。

第9章 迫る暗雲、立ち上がる剣士。

「皆さん、ボンヌレクチュール！ 僕はタツセル。今、世界では大変なことが起きているんだよ！」

「何と突然、街に6体のメギドが現れて、暴れだしたんだ！」

「そのメギドを倒すために街に出た剣士の一人、緋道蓮。だけど彼が入り込んだワンダーワールドには、あの強欲の剣士も居たんだ！」

「強欲の剣士シャムシールの力に追い詰められる蓮。だけどそこに現れたのは、サウザンベースから来た二人の剣士、タルスとレボス」

「彼らはメギドを蓮に任せ、シャムシールと再び対決することになる。彼らは強欲の剣士を倒すことが出来るのだろうか？」

「メギド達もなにやら企んでいるようだし……もうそろそろ僕も動かないと……」

【SIDE：レボス】

「おらあつ!!」

やっと見つけた強欲の剣士を倒すために、俺は鉄鋼剣黒鉄で斬りかかる。他の聖剣と比べて特殊な能力こそ持ってないが、だからこそ俺の剣の腕前が十二分に発揮できる。

「ふっー！」

そしてタルスもまた同じように魂魄剣深魂を振るう。俺達の一族が代々継承している聖剣。それを受け継ぎ当主となったタルスもまた、ソードオブゴスではトップクラスの腕前を持つ剣士だ。

俺とタルス。二人が力を合わせれば、たとえどんな敵だろうと敵うはずがない。それは強欲の剣士シャムシールに対してもそう言える。事実、この間の戦いでは終始俺達が圧倒していた。

「……相変わらずだね」

だけど、今日は様子が違った。俺達の剣戟。それが全て奴の技に受け流されている。俺が放った渾身の斬撃も、タルスが放った素早い突きも、全てが奴の聖剣に弾かれ、空を切る。

この間とはまるで違う。あの時は本気じゃなかったとでも言うのか？

焦りを覚え始めた俺達に、強欲の剣士がぼつりと呟く。

「あんた達の技はこの間覚えた。その程度じゃ、私は倒せない」「何だと！」

あからさまな挑発に怒りを感じるが、内心は冷静さを保っていた。まさかこの間の一回の戦闘で俺達の技を全て見切ったとでも言うのか。

思わず冷や汗が流れるほどの学習能力。そもそも、俺達の剣技と奴の剣技は共通点が多いのも理由だろう。元々は奴もゴート家の一員。基本の技術は共通している。まさかそれが仇となるとは……。

だが、それで勝てないようでは、マスターに顔向けできない！

「これでも食らえー！」

『必殺鋼読！』

『黒鉄斬鉄閃！』

俺達と奴の剣術が似ているということは、逆を言えば俺達も奴の動きが分かるということだ。タルスが奴の剣を捌きながら俺に一瞬アイコンタクトをした。その意図を理解し、俺は黒鉄のスイッチを押す。

いくら奴が動きを見切つていようと、それが出来ない状況にすればいい！

「はああああっ!!」

狙うのは奴の剣。俺が奴の剣を封じている間に、タルスが——を使う。これが奴を倒すために考えた作戦だ。

奴の視線が俺の剣を捉える。この間と同じ戦術。だがこれは逃れられない。防ごうとすれば剣が封じられ、躲そうにも体勢が悪い。もらった！

「……ど？」

「な!？」

だが、すぐに俺は驚愕で目を見開いた。奴は俺の技を防ぐでも、躲すでもなく、それどころか自らの聖剣を腰に収めると、その身体で鉄鋼剣黒鉄の一撃を受け止めたのだ。

鋭く放たれた俺の剣は奴の体を突き刺し、強固な鎧と柔らかい肉、二つを引き裂く感触が俺の手に伝わる。

「レボスー！」

「っ!!」

タルスの声ですぐに正気に戻り、剣を抜こうと力を入れる。だが奴は左手で鉄鋼剣黒鉄の刃を挿んで離さない。

「っ放せ!!」

幾ら力を込めようと、奴が放す気配は無い。それどころか、奴が持つ再生能力によって、切り裂かれた体と鎧が元に戻り、どんどんと抜けにくくなっていく。

『餓欲居合……』

「っ!？」

そして奴が腰に収めた聖剣が膨大なエネルギーを迸らせる。すぐに危険に気付いた俺は、黒鉄から手を離して下がるが、僅かに遅かった。

『黙読一閃!』

「ぐああああっ!？」

抜刀された聖剣から放たれた暗紫の斬撃。それは俺の体を捉え、衝撃と共に切り裂いた。

「レボス!？」

タルスが駆け寄ってくるのが見える。くそ、下手を打った。

強欲の剣士は身体に刺さった鉄鋼剣黒鉄をずるりと引き抜くと、地面に投げ捨てる。

「はあ。私は別に痛いのは好きじゃないんだけどね」

この間はずっと防御に専念していたから、気に留めていなかった。そうだ、奴の再生能力を考えれば、防御しないという選択肢が取れるということだ。分かったはずなのに……悔しさを歯を食いしばる。

そんな中、奴はゆっくりと俺達に近づいて来る。

「それじゃ……」

そして奴が剣をゆっくりと掲げた……その瞬間、異変が起きた。

—ドオンツ!!—

「ん?」

「あれはっ!?!」

「何だよあれ……」

三者三様の反応を示す俺達。その視線の先には、天に上る緑色の光の柱。あれが有る方向はたしか、風の剣士が向かっていった方向のはず……。

「っ!!」

強欲の剣士もこの状況が呑み込めていないのか、呆然と光の柱を見つめる。その隙を突いて、俺は落ちた鉄鋼剣黒鉄を拾い上げ、そのまま強欲の剣士に向かって振るう。だがそれも難なく躲され、剣は空を切った。

「……」

そして再び睨み合う。

だがそのすぐ後、突如として猛烈な突風、いや衝撃波が俺達を襲った。

「くっ!?!」

「うわっ!?!」

「なっ!?!」

目も開けられないほどの衝撃に飲み込まれ、俺達は抗うことも出来ずに吹き飛ばされていく。

「ぐあっ!?!」

「っ……は……?」

そして気が付くと俺とタルスは地面へと投げ出されていた。全身の僅かな痛みを無視して辺りを見回すと、どうやらワンダーワールドの外へと弾き出されてしまったようだ。

強欲の剣士の姿はどこにも見当たらないため、別の場所に飛んできたのか。

「あ、お前ら!!」

癪に障る声が聞こえ、顔を動かすと、そこには変身を解除した風の剣士が走り寄ってくる姿。

「お前、何でここに……いやその前に何をした？」

あの光の柱が有ったのは、この風の剣士が向かった方向。何か知っているはずだと問い詰める。だが風の剣士も怪訝な表情を浮かべるだけだ。

「俺だって分かんないよ。なんか、メギドを倒したら突然あの柱が……」

「なるほど……」

風の剣士の言葉にタルスが顎に手を当てて思案する。

「……一度、ノーザンベースに戻りましょう。もしかすると、何か大きな異変が起きているのかもしれない」

タルスの言葉に俺は頷いた。今は強欲の剣士は後回しだ。それよりも目の前の異変に対処した方が良いんだろう。

風の剣士も渋々と言った様子で「分かった」と一言。不愛想だが、そんなことは気にしてられない。

そして俺達はブックゲートを使ってノーザンベースへと向かったのだった。

【SIDE：エドナ】

謎の衝撃波によってワンダーワールドから弾き飛ばされた私は、空高くそびえる光の柱をぼうつと見つめていた。

私が居たワンダーワールドから伸びた緑色のものと、別の場所から伸びた赤色のもの。今はその二つの柱が伸びている。

あの柱からは聖剣に似た力を感じる。それぞれ風と火。私が居たワンダーワールドでは風の剣士がメギドを追っていた。つまり、何ら

かのきつかけによって聖剣の力が増幅されて、あのような形で顕現しているのだろうか……。

……恐らく、いや確実にメギドの手によるものだろう。わざわざ複数箇所同時に侵食を行ったのも、これが理由のはずだ。

だけど、これは一体何のためなのだろうか。狙っているのは、ワンダーワールドの浸食の数から、六本の聖剣の力を増幅させることで間違いないだろう。だけどメギドが聖剣の力を手に入れたとして一体何を……。

そこで私は一つの可能性に思い至る。

「目次録……」

かつて全知全能の書と呼ばれる、あらゆる知識が記された本が有った。それはソードオブロゴスとメギドの争いによってバラバラとなり、その紙片一つ一つがライドブックに変化したという。

そのバラバラになった全知全能の書に残された一部、そして知識の源とされているのが目次録であり、それに至るための鍵こそが聖剣というわけだ。

目次録へと至るためには、十一本の聖剣、そして全知全能の書の力を強く引き継いだライドブックが必要とされている。私も昔、目次録を手に入れようかと興味を持ったけれども、その中で必要な聖剣の一本が失われているため諦めたことがある。

それはともかく、つまりは六本の聖剣の力だけでは、目次録への道が作られることは無い。けれども、それはあくまで本来ならばだ。メギドはそもそも、全知全能の書から生まれた怪物とされている。即ち、あいつらもまた全知全能の書の力の一部を持っているということだ。

そしてこの間戦った闇の剣士。あれもまたメギドに力を貸しているはず。聖剣、ライドブック、そしてメギド。全知全能の書の力を宿す、この三つの存在が噛み合っているとするとするならば、もしかすると目次録への道も開かれるかもしれない。

「……まあ良いか」

だからどうしたという話なのだが。

私としては、メギドによつて世界を変えられるのは、それはそれで気に食わない。

けれども仮に私の考えが当たっていたとして、それで手に入るのはいせいで目次録が持つ知識だけ。世界を書き換えるほどの力が手に入るわけでも無いはず。それなら私がわざわざ手を出す必要は無い。そんなことよりも破滅の書を手に入れた方が手っ取り早いだろう。ちようどよく、メギド達がワンダーワールドの浸食をしてくれたのだ。これは良いエサになる。

「さて……」

残るワンダーワールドは四つ。どれに行こうかと迷いながら、私は歩き始めた。

【SIDE：タルス】

ノーザンベースに戻った私達を待っていたのは炎の剣士達、そして重傷を負った水の剣士でした。話を聞くと、組織を裏切った闇の剣士カリバーによるもの……。

彼らにどのような因縁があるかは知りませんが、今はそれを聞いている暇は有りません。どうやら炎の剣士もまたメギドを1体倒したようですが、我々が居た場所同様に光の柱が生まれ、ワンダーワールドから弾き飛ばされたとのことでした。

メギドが何かを企んでいるのは明らか。これは確実に罠です。しかし、だからと言ってメギドを野放しにするわけにはいきません。街を守りながら、奴らの目的が達成されないようにしなければ……。

私にはその時、一つの案が思い浮かびました。

「今この場に居る剣士。それぞれが残り四つのワンダーワールドへ乗り込み、手分けしてメギドを倒す。時間的にもそれがベストです。私

とレボスはこちらを、あなた方はそれぞれ別のワンダーワールドの対処をお願いします」

「確かに、それが一番だろう。それなら私は西側、飛羽馬は東側の一つ、蓮と尾上は最後の一つ。これで……」

私の案。それは分担してメギドを倒す。ただそれだけのことのように思えたでしょう。ですが、その真意に気付いたであろう者、聖剣の刀鍛冶でもある音の剣士が作戦を詰めていきます。私だけの言葉では納得しなかったでしょうが、彼の言葉であれば他の剣士も従うでしょう。

「それじゃあ、行くぞ!!」

土の剣士の号令の下、私達はブックゲートを開いて、それぞれの担当する場所へと跳びました。

「……」

ワンダーワールドへ向かう中、私には一つの懸念事項が……。

それは強欲の剣士。奴は「必要な物が有る」と言っていました。恐らく、奴も何かを企んで行動をしている。

奴が何を狙っているのか……真っ先に思い浮かぶのはワンダーライドブック。600年前、奴は多くの剣士達を倒し、そのライドブックを奪っていったという話です。ライドブックを集めて何をしようとしたのかまでは分かっていますが、世界を混乱に陥れることになるのは間違いないでしょう。

もしくは聖剣も考えられます。聖剣自体が強力な武器であり、全知全能の書の鍵でもある以上、絶対に奪われてはいけないものです。奴が聖剣を手に入れていけば、我々の戦力は下がり、奴の力は増す。そのような状況は考えたくもありません。

後は破滅の書でしょうか。先日封印が解かれ、蘇った不死身の剣士によつて世界が崩壊の危機に瀕しました。今は再度封印され、サウザンベースの禁書庫で保管されているはず。あれは奴にとっては世界を滅ぼすための都合の良い道具であり、同時に仲間が封じられている本でもある。これもまた、狙っていてもおかしくはありません。

何はともあれ、奴が何かを狙っている以上、それは絶対に阻止しな

くては……。

今、やるべきはメギドを倒すこと。しかし近くに奴が居ることが分かっています。きつと奴は、今の状況を利用して、ワンダーワールドに潜んでいるでしょう。

メギドと奴を同時に相手をすれば、間違いなく苦戦することになる。そうだとしても私達が逃げることは許されません。

すぐそこまで迫っているであろう奴の存在に気を張りながら、携えた聖剣の柄をぎゅつと握り、私はワンダーワールドへ駆け出したのでした。

第10章 明かされる真実、偽りの聖剣。

【SIDE：タルス】

「随分と奇遇なこと……」

私は侵入したワンダーワールドの中で思わず眩きました。そこに居たのは、可能ならば今は会いたくは無かった相手。

「今日は運が良いね。美味しいケーキは食べれたし、獲物は勝手に来るし……」

我が一族の因縁の相手、強欲の剣士シヤムシール。既に変身し、臨戦態勢を取っている。

まさかこんな時にまで出会ってしまうとは……この不運に奥歯を噛む。この状況は悪い。出来ることならば、奴とは剣を合わせずメギドを倒してしまいたかったところですが、奴がそれを見逃すというわけが無いでしょう。

「てめえ、面倒な時に現れやがって！」

「別に良いでしょ。さつきだって会ったんだし」

そう言っつて剣を向ける彼女を私とレボスは睨みつけます。

「ここで最善なのは……」

「レボス、ここは私が相手をします。あなたはメギドを倒してきてください」

「は、何を言ってるんだよ!？」

私の言葉にレボスが食って掛かりました。それは彼女に誰よりも強い敵対意識を持っているからでしょう。

「認めるのは癪だが、あいつは一人で倒せる相手じゃない。ここは俺も……」

「レボス、ここで優先すべきは何ですか？」

しかしだからこそ、私は彼に呼びかけました。

「今はメギドを倒すのが我々の役目。しかし奴が私達をみすみす見逃すことは無いでしょう。だから私が時間を稼ぎます。あなたはメギドを」

「いや、それでも……」

レボスも分かっています。ここで強欲の剣士に執心していても、人々が危険に晒されるだけだ。それでも私を一人にするのが心配なのでしよう。その思いに感謝をしながら、私は言葉を受けました。「私はあなたの力を信じています。だからあなたも、私を信頼してください」

その言葉にやっと覚悟を決めたのか、レボスは横目で私に一瞥しました。

「分かった。俺が戻ってくるまで、出番は残してくれよ」

「ふふっ、それはどうでしょうか」

互いに軽く冗談を口にする、レボスはその場から走り去ります。その後ろ姿を強欲の剣士は不気味なほど静かに見届けました。

「おや、あなたが何も仕掛けないとは……」

「まあ、一人でも残ってくれば良いし」

こちらを見つめる奴から感じられるのは、獲物を前にした獣のような雰囲気。ですが私も無様にやられる気はありません。

「悪いですが、あなたの蛮行もここまでです！」

『百夜怪談！』

「変身！」

ライドブックから放出された力が私の身に宿り、剣士としての姿を解放します。

『Don't fear! The one hundred souls turn into the your force.』

百夜怪談！』

『深魂解読！ 冥府の剣が彷徨う魂を支配する！』

「……では!!」

そして私は剣を構えながら走り、奴もまた対抗して剣を振るいます。

自分はレボスがメギドを倒すまでただ耐えればいいだけ。しかしそんな姿勢では、奴を止めることは出来ない。だから私は、奴を倒すという気概を込めて挑みかかりました。

「はっ！」

「くっ!?!」

最初の戦い。その時の感覚では、たとえ一人でも奴を抑え込むことは出来ると考えていました。しかし二度目の戦闘では奴が未だに本気を出していないという事実を叩きつけられ、そして今まさに私が感じていた奴の力は、私の予測を遥かに超えていました。

その動きは目で追えず、僅かに発せられる気配を頼りに何とか攻撃を防いでいる状態。しかもその一撃一撃が重く、何度も受け続けていると手が痺れてきてしまいそうになる。

「ですがっ!!」

ここで退くわけにはいきません。相手の動きが追えないのであれば、移動の範囲を制限してしまえば良い。

『必殺リード! 百夜怪談!』

『深魂必殺撃!』

「妖魔百閃!!」

ライドブックを読み込むことで放たれた光が、周囲を縦横無尽に駆け巡ります。

いくら奴が不死身と言えど、この攻撃の全てを受けてまで迫ってくることは無いでしょう。きつと回避をしながらこちらに向かつてくるはず。そこをカウンターする!

「……それ、見飽きたよ」

そんな私を嘲笑うかのように、奴は聖剣をゆっくりと構えると、勢いよく走り出す。そんな奴目掛けて舞う光弾。私も奴の動きを予測して構える。

しかし、奴が取った行動は私の想像を超えていました。

「ふん……」

奴は自らに向かう無数の光弾の一つ一つを、まるで踊るかのように剣を振るって受け止め吸収した。徐々に刀身が纏うエネルギーが増していくのが分かりました。

『必殺黙読!』

放たれた全ての光を吸収した聖剣を腰のドライバーに装填した奴の動きを見て、背筋に冷たいものが走る。

不味い……この距離では奴を止めることが出来ない。

状況を瞬時に判断した私は、腰のホルダーに魂魄剣深魂を納める。

『深魂居合……』

そして奴と私は、ほぼ同時に剣を抜き放つ。

『大蛇欲心撃！』

『読後一閃！』

奴の剣から姿を現した、大蛇を模したオーラ。迫りくるそれに対し、私は斬撃を当てて何とか軌道を逸らそうとします。しかし私が放った光弾を吸収して威力を増した大蛇を抑えきることは出来ませんでした。

「ぐうっ!？」

間一髪で直撃こそしなかったものの、掠っただけであるのにその衝撃で吹き飛ばされ、地面を転がる。明らかな大きな隙。それを奴は見逃しませんでした。

「ふっー!」

剣を大きく振るい、こちらに走り出す。確実に止めを刺そうという一撃。ですが同時にそれは、私にとっても千載一遇のチャンスでした。

懐から一冊のワンダーライドブックを取り出す。それはかつて、覇剣の使い手を封印した力を持つ、伝説の本。

『必殺リードー・グローリーベオウルフー!』

魂魄剣深魂の刀身に清廉なる光が宿り、周囲を照らし始める。

「それはっ!？」

私が使ったライドブックに奴も気付いたようで、急ブレーキをかけて止まる。しかし、もう遅い!

「はああああっ!!」

渾身の力を込めて聖剣を振るうと、放たれるのは眩い斬撃。その一撃は躲す暇も与えずに命中すると、爆音と共に奴の姿は光と炎の中に掻き消えた。

その光景を見た私は溜息を一つ吐くと、足から力が抜けその場に跪きました。

さすがにこれで確実に倒せたわけでは無いでしょう。しかしこのワンダーライドブックは、奴の不死身の源である覇剣を封じる力を持っています。その力を込めた必殺の斬撃を受けた以上、奴はしばらくは復活できない。

今、私達が置かれている状況で奴の介入を受ければ、きつと厄介なことになる。その前に奴の動きを封じられたのはかなり大きいと言えるでしょう。

ですが、予想以上に消耗しました。出来ることなら、レボスが戻ってくるのを待ってから対処するべきでしたが、それを待つほどの余裕が無かったというのが事実。不完全になってしまいました。それも得た物は多い……。

「さて……レボスの様子を確認しますか」

彼のことだからきつと大丈夫だろう。そう考えながら、私は聖剣を支えにして立ち上がり……まさにその瞬間でした。

『ムゲンウロボロス！』

「……え？」

突然、聞こえたその音に私が振り返ると、炎の中から紫色の大蛇が姿を現し、私を睨みつけたかと思うと、その太い尾を振っていました。消耗していた私はそれを躲すことも、防御することも出来ず、まともにも食らい、近くのコンクリートの壁に叩きつけられました。

「ぐはっ……」

肺から空気が漏れ、呻き声が零れる。そして霞む視線の先に居たのは……殆ど無傷の強欲の拳士の姿でした。

【SIDE：エドナ】

危なかった。あの一撃を受ける瞬間、少しでも判断が遅かったら、間違いなくただでは済まなかった。

「どうして……」

倒れ込みながら私を見つめる剣士。その瞳には文字通り困惑が映っている。それだけあの攻撃には自信があったのだろう。それが効いていなかったのだから、こいつの動揺は当然だ。

「昔、自分を封印した力に、何の対策もしないと思っていたの？」

私が何故無事なのか。それを教えてあげる義理は無いけれど、まあ別に話したところで大した問題じゃないか。

「ただの予想だけれど、そのワンダーライドブックは私の聖剣を封印することに特化してるんでしょ？ だったら、聖剣に頼らなければ良いだけ」

そう言っただけ私には差し込まれたライドブックを撫でる。やったことは単純。こいつの攻撃が当たる瞬間、ライドブックのページを押し込んで、封じられていた神獣を呼び出した。ただそれだけだ。もし私の予想が当たっていれば、あくまでワンダーライドブック単体から発生した力は封じられないはず。そう考えての行動だった。

勿論、それが当たっている保証なんて無い。もし外れていけば、この体を維持させることは出来なかっただろう。だけど、私はその賭けに勝った。それがただ一つの事実だ。

「それに、そのライドブック使いこなせていないのに、本当に私に勝てる気でいたの？」

「っ!!」

どうやら気付かれていないとでも思っていたのだろうか。あのワンダーライドブックは本来は変身で使うためのもの。それをただ技を使うためだけに使用した。それは間違いなく、こいつがそのライドブックを完全に使いこなせていない事の証明だった。

「さてと……」

私はお目当てのものを手に入れるために、倒れ伏した剣士に近づく。既にこいつは満身創痍。抵抗は出来ないだろう。

そんなことを考えていた最中だった。

「ギキョーっ!!」

「待ちやがれっ!!」

突然、私の前に飛び出して来たメギド。そしてそれを追うようにして現れた灰色の鎧を纏った剣士。

「な……タルスっ!!」

灰色の剣士は倒れ伏した仲間の姿を見て驚いたような声を上げると、私を睨んで激昂する。

「お前っ!!」

「待ちなさいレボスっ!」

倒れ伏した剣士が制止するものの、その声は届いていないようだ。奴は手にした剣を振るい、私に立ち向かってくる。しかし、怒りの感情がそのまま乗った剣閃は読みやすい。何度も振るわれるその攻撃を避け、往なし、捌いて行く。

「お前は絶対にここで倒す!!」

『必殺鋼読!』

何としても私を倒そうと、必殺の一撃を放つ準備をしたのが見えた。しかし、それは先程破っているのを忘れているのだろうか。

『黒鉄斬鉄閃!』

「だああああああっ!!」

気合と共に放たれる一撃。私はそれを餓欲で受け止める。それまで以上の力が込められたその一撃は、こいつの感情がそのまま表れている。絶対に私を許さない。そう言っているように聞こえた。

しかし、結局はそこまででしかない。こいつなんかには許されたいとは思わないし、そもそもこいつの怒りは浅い。私の絶望には程遠い。

「はあっ!!」

「なっ!?!」

力を込めて、私は剣を弾いた。全身全霊の一撃。零れ落ちた言葉からは、奴の仮面の奥に隠れた驚愕の感情が浮かんでいた。

その隙を狙って、私は聖剣で斬り上げる。それを慌てて目の前の剣士は防御しようとして腕を動かす。

—ザンツ—

それが結果的に、あるものを切り裂く結果となった。

「え……」

私がそれを切り裂いたことが信じられなかったのか、灰色の剣士は呆けたような声を上げる。

それはエンブレムと呼ばれるもの。聖剣の力の根源であり、通常であれば破壊はおろか傷一つ付くことのない、聖剣の心臓部とも入れる部位だ。それがこれほどまでにあっさりと言つ二つにされたことが信じられないのだろう。

「ど……どうしてだよ？」

狼狽えるその剣士の体から装甲は消え去り、生身の体が露となる。さらには、破壊された剣が徐々にくすみ、まるで錆び付いたかのように変化した。

まあ、これは当然のことだ。何故なら……

「所詮は偽りの聖剣。本物の聖剣には勝てるわけが無いんだよ」

「……偽りの……聖剣？」

あれ？ 呆然自失とする剣士の呟きに私は疑問を抱く。まさか知らなかったのだろうか。私と同じ一族――ゴート家のものなのに。

そして私は背後で倒れ伏した、魂魄剣深魂の使い手だった剣士に視線を動かすと、彼は苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべていたことに気付き、理解した。

「なるほどね。あんた、当主候補でも無かつたんだ」

つまりは、目の前の剣士は何も知らされずに偽りの聖剣を与えられただけであるということか。

「おい……答えろよ。偽りの聖剣って何なんだよ……」

言っていることが信じられないのか、力の抜けた声で呟く。まあ、折角だから教えてあげよう。どうせ知ったところでどうしようもないのだから。

「単純なことだよ。ゴート家は本物の聖剣を守るための罠だつてこと」

全ては1000年前に遡る。無銘剣虚無を手にした剣士バハトが、光の剣士に封印された後、その光の剣士もまた自らの聖剣が悪しき者に利用されることを恐れ、異空間へと姿を消した。これにより、ソー

ドオプロゴスは、限られた数しか存在しない聖剣の内、二振りが消えたということになった。

これに悩んだのは当時のマスターロゴス。当時は光の剣士の尽力によって多くのメギドが撃退されたものの、その光の剣士は姿を消してしまった。もし再びメギドが活発化した時、苦戦は免れないだろう。さらに、もし聖剣が敵に奪われでもすれば、それはバハトに並ぶ危険になり得る。

そこで当時のマスターロゴスと賢神、刀鍛冶はあるものを作り上げることにした。それは聖剣に近い力を持ち、聖剣を守るために存在する剣。それこそが「偽りの聖剣」と呼ばれる代物だった。

そして初めて作られた偽りの聖剣である魂魄剣深魂を与えられた人物こそ、初代ゴート家当主となる剣士だった。

魂魄剣深魂は代々、ゴート家の当主に伝えられた。時にメギドを倒し、時に聖剣とその担い手を守るために命を賭して戦う。それこそがゴート家の役割。文字通り、聖剣を守るための囷となることが定められた一族だった。

そしてこの事実は外部に漏れださないように、限られた者のみに伝えられた。

私もかつて、魂魄剣深魂の継承者の候補であり、この事実は父だった男から直接伝えられた。だからこそ知っていたのだ。自分達がただの捨て駒でしかないことに。

「そんな……嘘だ……俺は、聖剣に選ばれた……」

目の前の剣士は震えながら振り向くが、その視線の先に居た深魂の剣士は俯き黙っている。その事実は知られなくなかったとも言いたげに。

まあ、私にはどうでも良いわけだけど。それよりもさっさと目的のものを手に入れよう。私は震える剣士の傍に落ちていた一冊の本を手取る。その表紙には「BOOK GATE」と記されている。

「これが欲しかったんだよね。これが無いとサウザンベースに行けないから」

「っ、やはりお前の目的は……っ!!」

どうやら深魂の剣士は私の狙いに気付いたようだ。だけでも、最早私を止めることは出来ない。一人は満身創痍で、もう一人は最早立ち上がる気力も無さそうだ。

そんな私の視界の端に、あるものが映る。それは先程までの私達のやり取りをただ見ていたメギドだ。そう言えば、このメギドを倒すと聖剣の力が増幅されて……。

「ふーん……」

「ギシツ？」

こつちの方が面白いかもしれない。

『餓欲居合……』

『黙読一閃！』

素早く私はそのメギドに近づくと、居合切りによって胴体を真つ二つにする。

それと同時にメギドが爆散し、巨大な光の柱を作り出す。そこから放たれる突風に私も、倒れた二人の剣士も飲み込まれる。視界は遮られ、全身の自由が利かない。

そして気が付くと私は、ワンダーワールドから弾き飛ばされていた。周りにあの剣士達の姿は無く、代わりに天に聳え立つ光の柱が禍々しく輝いていた。

「さて、どうなるかな」

このままメギドの思い通りに進むのか、それとも剣士達が抗うのか……。

まあ、私は私のやることをしよう。そう考えて、ブックゲートを開くと、目の前に巨大な本を横った門が作り出される。この先に有るのは、サウザンベース。ソードオブロゴスの本部だ。きっとその禁書庫に破滅の書がある。

それを手に入れるべく、私は一歩前に踏み出したのだった。

第11章 目覚めるは、慈悲の剣。

現実世界とは異なる、不思議な空間「ワンダーワールド」。そこは普段とは異なり、どこか恐ろしい空気が渦巻いていた。

その一角にあるファンシーな家。その家の主は現在、とある人物に会うべく留守にしており、人の気配は一切感じられない。

そんな中、机に乱雑に置かれた幾つかのワンダーライドブックの内、一冊がどこか怪しい光を灯す。桃色のその本の表紙には、一人の剣士と人魚の姿が描かれていたのだった。

【SIDE：エドナ】

「……随分と様変わりしたね」

変身を解いた私はサウザンベースへと潜り込むことに成功したものの、内装はやはり600年前と大きく変わっている。しかし構造自体は大きく変わっていないようで安心した。これなら禁書庫に辿り着けるだろう。

記憶を辿りながら、廊下を進んでいく。勿論、誰にも見られないようにだ。ここでもし見つければ、戦闘になるのは必須。そこは別に良い。しかしその相手が問題なのだ。

「賢神を相手にはしたくないね……」

ソードオブゴスには賢神と呼ばれる者たちが居る。マスターロースに並ぶソードオブゴスの最高位であり、組織の方針を決める存在だ。その賢神たちの厄介な点、それはあらゆる剣士達の技術を会得しているということ。純粋な剣の腕前は文字通り最強と言って良いだろう。

そんな賢神を相手にしては、さすがの私でも分が悪い。何せ、彼らは聖剣もワンダーライドブックも持たず、純粋な剣技だけでメギドを

相手取れる存在。私の欲望剣餓欲とは相性が最悪だ。

だから私は、賢神達が来るまでに破滅の書を見つけ出さなくてはならない。

息を潜め、静かに、しかし足早に進む。気配を感じれば物陰に隠れ、それが過ぎ去ったのを見計らって先へ歩く。少しずつ、しかし着実に私は目的の場所へと向かった。

そして辿り着いた禁書庫への入り口。特殊な偽装によって、何の変哲もない壁にしか見えないように細工されている。サウザンベースでも重要な場所であるが故に、そこには結界によって厳重な封がされていて、開くことが出来るのは鍵となる特別なブックゲートを持つ者のみ。勿論、私はそんなものを持っていないし、あの剣士から拾ったブックゲートも普通のもので、禁書庫を開くことは出来なさそうだ。

だけど、それは最初から分かり切っていたこと。600年前と同じようにすれば問題ない。私は欲望剣餓欲を振りかぶると、勢いよく壁に向かって突きだす。

―バリイッ!!―

まるで雷が落ちたかのような音が響き渡る。勿論、この音はきつとマスターロゴスや賢神達にも聞こえているだろう。だからこそ私はより一層力を込めて、切っ先を壁に押し込む。すると徐々に壁に刀身が食い込んでいく。

「ふっ―」

一呼吸をしてさらに力を込めた。その瞬間、それまで感じていた抵抗が消え、私の体は壁の中へと吸い込まれていく。

「つとと……」

そして私が次に見たのは、視界一杯に広がる膨大な本が収められた空間。一冊一冊が特殊な力を秘めているのが分かる。しかしこれらはただの本でしかない。私が求めるのは、世界を無に帰す破滅の書。それが収められているのは、きつとこの書庫の奥だ。

さつき、強引に結界を破ったことで、私の存在はサウザンベース全体に気付かれていることだろう。追手が来る前に見つけて、撤退しない……。

そして私は書庫を掻き分けながら奥へ奥へと進む。この書庫は特殊な空間で、方向感覚が狂いそうになる。その上、やはりかつて私が侵入したことが原因か、もしくは新たに多くの書を封印したのか、内部の様相は600年前と大きく変わっていた。そのせいで中々目的の場所に辿り着けない。

それがかれこれ数分。次第に焦れ始めたその時だった。

「ハアッ!!」

「っ!!」

不意に気配を感じ取り、私はその場から飛びずさる。すると先程まで私が居たその場所に、剣の一撃が振り下ろされた。

切っ先と床がぶつかり、火花と衝突音が書庫に響く。

「……ふん、まさか気付くとはな」

その一撃を放ったのは、真紅の衣装を纏った男。鋭い視線を向けるその男の手にある剣に、私は見覚えがあった。

「時の聖剣……ってことは神代家のか」

「時国剣界時」。代々、マスターロゴスに使える神代家の人間が所持してきたという歴史を持つ聖剣。その力は名の通り時間にまつわるものであり、私でも完全には理解しきれない厄介なものだ。

「よく知っているな、強欲の剣士」

その男は感情を押し殺した表情でこちらを見つめてくる。

……600年前から思っていたことだけでも、この神代家の連中はやはり気に食わない。それはかつての私を思い起こさせるからだろうか。

「この神聖なる書庫に踏み入り、世界を滅ぼそうとする害悪。貴様はここで消えて貰う!」

男はそう言っつて碧い表紙のワンダーライドブックを取り出す。私もそれに応じるようにワンダーライドブックを開いた。

『オーシャンヒストリー』

『この群青に沈んだ命が、今をも紡ぐ刻まれた歴史……』

『ムゲンウロボロス』

『かつて全てを貪り喰らった蛇の王が今、蘇る!』

そしてライドブックを男は手にした聖剣に、私は腰に巻かれたドライバーにそれぞれ装填する。男はそのままゆつくりと刀身と柄を分離させ、私は静かに聖剣の柄を握る。

『界時逆回！』

『抜刀！』

「変身!!」

発生はほぼ同時だった。

男は上下逆転させた刀身を再び柄と接合して三叉槍に変化させ、私は聖剣をドライバーから抜き放つ。

その勢いのまま、互いの刃から放たれた斬撃がぶつかり合い、周囲の本が木の葉のように散っていく。

『時は……時は……時は時は時は！ 我なり！ オーシャンヒストリー！』

『ムゲンウロボロス！ 餓欲！ 飢え渴く剣が喰らい尽くす！』

ワンダーライドブックから放たれた力と聖剣のエネルギーにより、私の姿が変わる。それと同じように男も、青いラインが特徴的な鎧を身に纏った。

そして私と男―時の剣士「デュランダル」は互いの獲物を構え、鋭く振るった。

【SIDE：凌牙】

サウザンベースの神聖なる禁書庫。そこに侵入した強欲の剣士を俺は相手をしていた。

かつて世界を滅ぼそうとした、忌まわしき剣士。何故、奴がここに居るのかは分からないが、恐らくタルス達はしくじったのだろう。マスターから与えられた使命に失敗するとは……そのことに怒りを覚えるが、今は目の前の相手に集中するべきだ。

俺は手にした時国剣界時を操り、奴の斬撃を往なしつつ、僅かに出来た隙に鋭く突きを繰り出す。だが奴もその攻撃を最低限の動きで躲し、距離を詰めてくる。

やはり伝承に残るだけの力はあるようだ。その上、奴の聖剣の能力も厄介だ。聖剣とワンダラーライドブックの力を吸収し、己の力に変える能力。下手に本の力を用いれば、逆にこちらが追いつめられることになりかねない。

だが俺が持つ聖剣もまた、奴の聖剣に決して劣っては居ない。俺は聖剣の刀身を分離し、トリガーを引いた。

『界時抹消！』

その瞬間、俺の意識はその空間から消え去る。

深海に沈むかのように、全身に圧力を感じながら沈んでいく。それは光も音も遅れて聞こえる空間。そこには奴と剣を交えるもう一人の……いや本来の俺の姿がある。

周囲の空間の時間を削り取ることで、この特殊な空間を発生させる、それこそがこの時国剣界時の能力。そして本来の時間の光景を視認しながら、俺はゆっくりと奴の背後に回ると、聖剣を連結させて再びトリガーを引いた。

『再界時！』

それと同時に俺は抹消された時間から、変化した時間へと浮上する。そしてそのまま勢いよく聖剣を振り下ろした。

—ザシユツ!!—

「うぐっ!?!」

奴の装甲を容易く切り裂き、その身にまで到達させた一撃を受け、奴は体勢を崩す。

抹消された時間を知覚できない奴からは、瞬間移動したようにしか見えないだろう。そして奴が俺の方向に振り向こうとした瞬間に、再び俺は界時の能力を発動させる。

『界時抹消！』

『再界時！』

奴の死角に周り、攻撃を行っては、時間を抹消して移動する。言葉

にすれば簡単だが、抹消された時間の移動には多大な負担が掛かる。しかし、俺はそれを修練によつて完全に使いこなすことに成功した。どんな相手であろうと、この攻撃から逃れることは出来ない。

奴の攻撃は俺には決して当てることは無く、逆に奴の体には少しづつ傷が付いて行く。その傷は徐々に回復していくが、関係無い。奴がダメージと疲労で動けなくなるまで攻撃を続け、動きが止まった後に確保するだけだ。

『再界時！』

そして再び、奴の背後へと回ると、聖剣の鋭い切っ先を奴の心臓に掛けて放った。

「……もう慣れた」

—ギインツ!!—

だが手に伝わったのは、奴の体を突き刺す感覚ではなく、金属同士がぶつかり合う硬い感触。

俺は確かに奴の死角から攻撃を放った。回避することは出来ない絶対の一撃。しかし、俺が放った渾身の一撃を、奴はまるで後ろに目があるかのように、一切顔を動かすことも無く、ただ腕の動きだけで聖剣を巧みに操り防いだのだ。

「何?！」

予想外のことには愕然とする。マスターに仕える剣士として、今もなお鍛錬を続けてきた自分が放った必殺の一撃。それをまさか防がれるとは……。

いや、これはただの偶然だ。そう考え、再び聖剣を分割してトリガーを引く。

『界時抹消！』

抹消された時間の中をゆっくりと動く。

次は無い。回避不能の一撃を放つべく、今度こそ奴の真後ろ……完全な死角へと回る。

『再界時！』

そして浮上した時間の中で、俺は先程以上の力とスピードを込めた一撃を放った。

「……だから言ったよ」

「ガギッ！」

だがその一撃もまた、奴に命中することは無く、代わりに背中へと回した聖剣によって防がれた。

一回のみならず二回も連続で防がれたという事実が信じられず、僅かに動きが鈍った。それが決定的な隙を作った。

「もう慣れたってね……」

ポツリと呟いた奴は振り向く勢いで聖剣を振るい、時国剣界時を払いのけると、そのまま流れるように二度の斬撃を放った。すぐに気付いて後退して回避しようとしたが、奴の攻撃の方が速く、刃とぶつかった俺の装甲が火花を散らした。

「ぐっ!!」

咄嗟に背後へと跳躍したためダメージは抑えられたが、それでも急な事だったため、近くにあった本棚へと体をぶつけてしまう。その間にも奴は距離を詰めてくる。

「っ!!」

『界時抹消!』

『再界時!』

だが寸前のところで何とか界時の能力を発動させることに成功し、距離を離してその攻撃を躲すことに成功した。だが急激な抹消された時間への潜行は、予想以上に身体の負担が大きく、息が乱れ始める。

そんな俺に対し、奴は嘲るかのように口を開いた。

「その聖剣の戦い方、600年前からあまり変わって無いね。少し慣れてしまえば、簡単に対処できる。思った以上に、大したことないや」その言葉は、俺を怒らせるのに十分だった。組織を裏切り、世界を滅ぼそうとした害悪如きが、代々世界を守って来た我らを愚弄するなど、絶対に許せん。

「……あまり俺を怒らせるなよ」

最早、自分の体などどうでも良い。奴はここで必ず処分する。

俺は再び聖剣を奴へ向けて振り上げた。

【SIDE：エドナ】

さて、どうしたものでしょうか。あまり良くない現状に歯噛みする。時の剣士は怒りを露にしながら攻撃してくるため、その剣の軌道は読みやすい。しかし、こちらが攻撃に移ろうとすると、すぐに回避してくるあたり、思った以上に頭は冷静なようだ。

ここで問題なのは時間。既にこの戦闘が開始してから、数十分は流れているだろうか。未だに他の剣士や賢神が現れないのは謎だが、それを確かめる時間が有るわけでも無い。

可能な限り早く破滅の書を見つけて脱出しなければならないが、その破滅の書がどこにあるのかも分かっていない。それを戦いながら見つけなくてはならないのだ。

こうなったら一度諦めて撤退するべきだろうか。しかしここで退いたら、より防衛は嚴重となるはず。そうなったら、さらに目的から遠ざかることになる。

せめて何か成果を手に入れなくては見合わない。しかしどうしたものか……。

「はあっ!!」

「っ!」

そんなことを考えていた時だった。男が放った斬撃を跳躍で躲したその瞬間、私の視界にあるものが映った。それは戦闘の影響で崩れ落ちた本棚から落下したであろう一冊の本。それを見た瞬間、私の勘が語り掛ける。

あれは彼女だ。

それに気付いた瞬間、私はすぐさま腰に吊り下げたワンダーライドブックを取り出す。

『夜桜奇譚』

『強欲な夜桜!』

『欲求一突!』

本の力を宿した聖剣から、幾重もの花びらが舞い、時の剣士の視界を妨げる。その間に出来た隙を突いて、私はすぐさまその本を拾いに駆けだす。

「な、くっ!!」

時の剣士も私の狙いに気付いたようだけど、奴が聖剣の能力を起動させるよりも早く、私はその本の回収に成功する。

『界時抹消!』

『再界時!』

そんな私の背後から迫る槍の一撃。しかしそれは予測していた。私は床を転がって回避する。その勢いのまま私はブックゲートを開いた。本来なら結界によってこの禁書庫内と外を繋げることは出来ない。しかし、その結界は既に私が壊してる。

「待て!!」

そんな私に追いつがろうとする時の剣士。ただどこかで追われるのは面倒だ。

『餓欲居合……』

『黙読一閃!』

僅かな動きで放った斬撃。それは容易く剣士の聖剣によって防がれる。けどこれはあくまで足止め。別に倒す必要は無い。

「じゃあね……」

最後に嫌がらせ交じりの台詞を呟き、私はサウザンベースからの脱出に成功したのだった。

【SIDE：凌牙】

「くっ!!」

まさか強欲の剣士をみすみす逃すとは……自らの不甲斐なさに怒りを覚える。

苛立ち交じりに聖剣の刃を地面に叩きつけると、甲高い音が辺りに響いた。

「残念でしたね」

そんな俺の背後から声を掛けてくる人物が一人。聞きなれたその声が耳に入った瞬間、俺は振り向きながら膝を付く。

「申し訳ございません、マスター」

そこに居たのは、一人の青年。真紅のローブを纏ったこの方こそが、このソードオブゴスの頂点に立つ存在、「マスターロゴス」だ。

この方の刃となり、仇為す者を打ち倒す。それこそが己の使命だった。しかし、それを達成できなかったという事実には思わず顔を伏せる。

そんな俺に対し、マスターは笑みを深めながら言葉を紡ぐ。

「いえ、あなたは十分な仕事をしました。あの本を奪われたのは予想外でしたが、大した問題では無いでしょう。既に状況は整いつつあります」

そう話すマスター。彼の心中にある計画。それは全知全能の書を復活させるというもの。何故、今まで封じてきたそれを目覚めさせるのかまでは知らない。だがマスターであるのなら、必ずそれを正しい形で用いるはずだ……。

「さて、ノーザンベースの方ももうそろそろ終わるでしょう。ここから忙しくなりますよ」

そう言って踵を返すマスターに付き添うように、俺もその後を歩くのだった。

【SIDE：エドナ】

霧深い山の中。人の気配どころか獣すら見当たらない、不気味な霧
囲いの場所。そこに私は居た。

ここなら邪魔は入らない。私はサウザンベースから奪取した本に
視線を向ける。本当ならばバハトが封じられた破滅の書を手に入れた
かったけれども、仕方ない。これが手に入れられただけマシだろう。

この本には破滅の書のような世界を滅ぼすような力は無い。ただ
対象を封じるだけの代物。だけどそこに封じられている人物こそが
重要だった。

「さて、そろそろ起こそうか」

私は静かにその本を開くと、中から桃色の嵐が吹き荒れる。しかし
それはまるで鎖に縛られているかのように苦し気にのたうち回る。

その嵐から感じられる覇剣の気配。それを狙って私は欲望剣餓欲
を勢いよく振るう。

——リイイーン——

まるで鈴がなったかのような澄み渡った音が山中に響き渡る。そ
れと同時に嵐の中から一つの人影が地面に転がり落ちた。

その人影は苦し気に何度か咳をすると、きよろきよろと辺りを見回
す。

「……は……一体？」

木々の枝の間から零れ落ちる太陽の光。それが彼女の姿を照らし
出す。

腰まで届きそうな長い黒髪が風に揺れ、すらりとした肢体を包み込
むのは修道服と呼ばれるもの。しかしその手に握られているのは、灰
色の刃を持つ桃色の長剣。

「久しぶりだね」

私がそう言うと、彼女はハツとしたような表情を浮かべ、私を見つ
めた。

「……エドナ？」

「そうだよ、この醜い世界にお帰りなさい『ロレラ』」

その言葉に、かつて慈悲の剣士と呼ばれた彼女は、悲し気な表情を

浮かべたのだった。

第12章 あの時の借り、ここで返すよ。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル。まさか僕が少し目を離している間に、大きな事件が起きるなんて!!」

「かつて世界を滅ぼそうとした剣士のことは知っているね？ 不死身の剣士バハト、強欲の剣士エドナ。そしてその二人に並ぶ最後の一人、慈愛の剣士ロレラが復活してしまったんだ！」

「ただでさえ、飛羽真達が大変な状況に置かれているのに、彼女まで復活したとなると、とんでもないことになっちゃうよ」

「既に彼女は動き出しているみたいだし……早くどうかしないと！」

【SIDE:???

俺は仕事を終え帰り道を歩いていた。やたらとうるさい上司の説教も聞き流し、一日の疲れを感じながら一人歩く街並み。既に周りは暗く、街灯の明かりが周囲を照らす。明日もまた仕事だ。夕食は適当なコンビニ弁当にでもしよう。そんなことを考えながら、誰も居ない家を目指してとぼとぼと歩いた。

昔は色んな夢を持っていた。小学生の頃はサッカー選手を目指して、毎日のように練習した。しかし中学生、高校生と進むにつれ、俺よりも才能がある連中が山ほどいることに気付くにつれ、そんな夢は色褪せていった。

そして今は、特にやりたいわけでも無い仕事をしながら、惰性のようになっている。楽しさも何も感じられない空虚な生活。しかし、今の俺に何が出来るわけでも無い。溜息を一つ溢した。

—♪—

そんな俺の耳に入ったのは、美しい歌声だった。それもアイドルが

歌うような軽快な歌でも、演歌歌手が歌うような圧力を感じる歌でも無く、それは鳥や虫の声のような自然と聞き入ってしまう澄んだ歌声だった。

思わず導かれるようにその歌声が聞こえた場所へ足が進む。

—♪—

そこは小さな公園。普段であれば、小さな子供、あるいは時間を潰すサラリーマンしか寄らないだろう場所。しかしこの時は、年若い女性、部活帰りであろう高校生、杖を突いた老人、子供連れの母親、老若男女様々な人間が居た。そして俺を含めた全員の視線の先に居たのは、一人の女性。まるでアニメのシスターのような服を着た女性が、公園の中心に建てられた街灯をスポットライトにして、美しい歌を披露していた。自分に芸術のセンスがあるとは思わないが、それはまさに神々しい絵画のような雰囲気だった。多くの人々の中心で光を浴びながら歌い続ける彼女の姿は、俺には天使に見えた。

だから気付かなかったのだろう。いや、気付いていても気にしなかった。彼女の右手に一本の長剣が握られていることに。

—♪—

ふと違和感に気付く。少しずつ瞼が重くなっていることに。抗いがたい睡魔を感じる。抗おうにも、この空間に響く歌声が、眠りへと誘い込もうとしているのが感じられ、逃れることが出来ない。

視界の端で一人、また一人と誰かが倒れていくのが見える。きつと俺と同じように、この睡魔に誘われ眠ってしまったのだろう。だけど不思議と、それを異常とは思えない。

そして俺もまた、誘われるままにその歌声に身を委ね、意識を沈めていく。おぼろげになる意識。そんな俺が最後に聞いたのは、一人の女性の声。

「全てが終わるその時まで、安らかな眠りがあらんことを……」

それが歌う彼女の声であることに気付いたその瞬間、俺の意識は完全に失われたのだった。

【SIDE：飛羽真】

『ここで速報です。今日の深夜1時半ごろ、市内の公園にて26名の民間人が昏睡状態となっていてのが発見されました。これにより昏睡状態となった人は全国で284名となりました。二週間前より発生しているこの現象ですが、現在もまだ原因は分かかっておらず、調査が続いております』

ラジオから聞こえるニュースに耳を傾ける。

ここ最近、テレビや新聞でもこの昏睡事件が取り沙汰されていた。連日連夜、どこかで人々が昏睡状態となって倒れているのが発見されている。被害者はいずれも眠っているような状態らしく、それ以外で健康状態に大きな問題は見られないらしい。しかし、どのような刺激を受けても起きることは無く、文字通り生ける屍といった様子だ。

原因は未だに不明。新種の菌やウイルスが原因と言う医師も居れば、特殊な化学物質が原因と掲げる科学者も居る。しかし、それらの説を裏付ける証拠は全く見つかっていない。

ただでさえ、今の状況は複雑だというのに、このような出来事まで起きると、どこか不吉な予感がした。

「どうした飛羽真？」

そんな俺に声を掛けて来たのは、古びた外套を纏った人物。今の俺の大切な仲間でもある、1000年前の光の剣士「ユーリ」だった。

数週間前、俺は大切な友の賢人を失いながらも、ソードオブゴスの仲間と共にメギド、そして闇の剣士カリバーの目論見である全知全能の書の復活を阻止することに成功した。しかし、そのカリバーの正体であり、かつて俺を助けてくれた先代の炎の剣士「上條大地」から語られた衝撃の真実があった。

それは15年前、俺が巻き込まれて記憶を失う要因となった事件について。その要因となったのは、先代の闇の剣士である賢人の父親がソードオブゴスを裏切ったことだが、その賢人の父親を唆した人物

が組織内に居るということだった。その真の敵を見つけるために、上條大地は組織を離れ、メギドと共に行動していた。その真実を伝えた後、彼は消滅しその生涯を終えた。

残された謎、組織の中に潜むという真の敵。もしこれを放っておけば、再び15年前のような出来事が……いやそれ以上に酷い災いが起きるかもしれない。それを止めるために、俺は戦いを続けるという選択をした。

しかし、それを止めようとしたのは、共に戦って来たはずの仲間達。突如として俺の前に現れると、聖剣とワンダラーライドブックを渡すように言ってきた。だけど、ここで聖剣を手放せば、真実に辿り着く方法が失われる。それに、ルナへの手がかりも……だからその言葉には従うことは出来ない。

だけどそんな俺の言葉に怒りを爆発させた蓮が斬りかかると同時に、戦闘へと流れ込んでしまった。しかし、仲間を攻撃するわけにはいかない。1対4の数の差に圧倒され、瞬く間に窮地へと陥った。

その時、現れたのがユーリだ。彼は以前俺が訪れた異空間「アヴァロン」で出会った人物で、1000年前に光の聖剣である「光剛剣最光」と融合した剣士。彼が助けてくれたおかげで難は逃れたものの、倫太郎たちとは分断状態になってしまった。

その後、大秦寺さんとは何とか合流できたものの、問題は山積みだ。人間を取り込んだ新しいメギド、組織の中に居る真の敵、消えたルナの行方、それにこの頃姿を現さなくなった強欲の剣士……。それらに頭を抱えつつも、今は自分が出来ることをするしかない。

「大丈夫、何でも無い」

ユーリにそう答え、俺はブレイブドラゴンのワンダラーライドブックを手にし、見つめる。必ず全てを救って見せる。

そんな時、不意に携帯が鳴り響く。そのメロディが指し示すのは、俺の担当編集であり大切な仲間でもある芽依ちゃんからの通知。すぐに電話を取ると、耳に入ったのは、背後から聞こえる慌ただしい音と、芽依ちゃんの焦った声だった。

「飛羽真、大変!! 街にメギドが現れたの!!」

「メギドが!?!」

その言葉を聞いて、すぐに俺は火炎剣烈火を取る。その様子を見ていたユーリは静かに頷き、そして店の奥に居た大秦寺さんも姿を現す。そして二人と共に、俺は店から急いで駆け出した。

【SIDE：芽依】

街中で響き渡る悲鳴。ガラスが割れ、コンクリートの壁が砕ける。その光景を陰から見つめながら、うちは飛羽真が来るのを今か今かと待ちわびていた。

そんなうちの視線の先に居たのは、全身を硬そうな殻で包んだ怪物メギド。突然、街中で一人の女性が苦しみ始めたかと思ったら、あのメギドに変化した。

その姿を見た瞬間、うちはすぐにスマホを取り出して飛羽真に現状を伝えた。多分、そう遅くないうちに来てくれるはず。そうすればきつと、あのメギドの中に居る人も助けてくれる。そう考えてた。

「ん、そこにダレカいるのかっ!?!」
「っ!?!」

だけど不意に振り向いたメギドが大声で叫んだのにびっくりする。もしかして気付かれてしまったのかと、すぐにその場から逃げ出そうとしたけど、それは間違いだった。

「ひっ!?!」

そのメギドの視線が向く方向。そこに居たのはうちじゃなく、まだ幼い女の子。ぬいぐるみをしたその女の子は、メギドに睨まれて涙を浮かべる。

どうしてこんなところに女の子が……もしかして騒ぎのせいで親と逸れてしまったのだろうか。だけどそんなことを考えている暇なんて無かった。

「ソノ泣き顔、イライラするなあ〜っ!!」

メギドは右腕を回しながら女の子に近づく。このままじゃっ……そう考えると同時に、うちの体は動き出していた。

「っ!!」

うちは隠れていた物陰から飛び出ると、女の子を抱える。そしてメギドに背をむけて急いで走り出した。

「キサマっ、逃げるなっ!!」

背後からメギドが追ってくる気配を感じる。もし足を緩めれば、うちの命も、女の子の命も無いだろう。そのせいか、女の子を抱えているにも関わらず、うちの足は何よりも速く動いていた。

とにかく飛羽真達が来るまで、逃げ続けないと……!!

そんな使命感を抱えながら、走り続ける。だけどうちも体力にはそれなりに自信があるとはいえ限界はある。

「はっ……はっ……」

息が切れ、脇腹が痛み始める。だけどここで止まったら、抱えてる女の子まで……。

だけど絶望は途切れない。うちの前を塞ぐように、それらが現れた。

「『ヴヴヴッ……』」

「えっ!？」

それは茶色の布を身に着けた異形。前に何度か見たことがあるそれが、群れとなつてうちを見つめていた。

「コマデだ。もうニガサンゾー!」

振り向くと、そこにはメギドが鋭利な爪を見せびらかしながら近づいてくる。

「キシヤアっ!!」

そして爪を大きく振りかぶった。

「ひっ!!」

腕の中で悲鳴を上げる女の子……せめてこの子だけでも! そう思つてうちは強く抱きしめる。その時だった。

—キーン!!—

何かが響く音。それに気を取られて、うちは顔を上げた。

「さて、久しぶりだね」

そこに居たのは、見覚えのある顔……以前、近くで行き倒れていて、うちが買ったケーキを残さず平らげた女の子が、手にしたものでメギドの爪を防ぐ光景。その手にあるものは、明らかに飛羽真達が持っている聖剣にそっくりだ。もしかして彼女も剣士？

「それにしても、私が偶然居なかつたら、あんた死んでたよ？」

そう言つて彼女は、その剣でメギドの爪を弾くと、無防備な胴体を横薙ぎする。剣と硬い殻がぶつかると音響を響かせながら、メギドはよろめき後ろに下がった。

「キサマ、何者ダツ!!」

突然の乱入者に警戒を露にするメギド。周囲でも怪物の群れが蠢く中、彼女は何の焦りも緊張も無く、リラックスした様子で剣を肩に担ぐ。

「悪いけど、この人には借りがあつてね。それを返さないのはポリシーに反するんだよね」

そう言つて彼女とメギドが睨み合う。そんな中、うちが待っていた足音が聞こえ始めた。

「芽依ちゃん!!」

「飛羽真!!」

変身した飛羽真が異形の群れを蹴散らしながら姿を見せる。その後ろからユーリと哲雄も駆け寄ってくる。

「ごめん、こいつらの相手をしていたら遅れた！」

「うちは大丈夫。あの子が助けてくれて……」

「あの子……っ!!」

うちがそう言つと、飛羽真は彼女に視線を向け、同時に硬直した。

「その聖剣……」

「あれ、知り合い？」

哲雄も同じように動きが止まる。それらの様子に気が付いた少女

はごちらを振り向くと、どこか煩わし気な溜息を吐いた。

「あー炎の剣士に……音の剣士か。それと……見たことないけど誰？」

「俺はユーリ。世界を守る剣だ」

唯一、平常運転なユーリが答えるものの、彼女は大きく興味は無いようで、すぐにメギドへと向き直ると、懐から何かを取り出して、腰に装着する。

『覇剣ブレードライバー』

「生憎だけど、今はあんた達と関わる気は無いんだよね。これは私が片付けてあげるから、どっか行ったら？」

そう言うと、彼女は装着したベルトに聖剣を収めると、ワンダラーイドブックを右手で掴んで開いた。

『ムゲンウロボロス』

『かつて全てを貪り喰らった蛇の王が今、蘇る！』

そしてそれをベルトに収めると、まるで心臓の鼓動のような音が周囲を包む。誰もが息を飲む中、彼女は収めた聖剣を引き抜いた。

『抜刀！』

『変身』

その剣が掲げられると、紫色の巨大な蛇が現れ、彼女の周りでのたうち回る。そして彼女は剣を反転させ、勢いよく地面に突き刺した。

地面が割れ、そこから紫色の衝撃が発せられる中、彼女の体は蠢く大蛇に包まれる。

『ムゲンウロボロス』

『餓欲！ 飢え渴く剣が喰らい尽くす！』

そして大蛇の体が消えたかと思うと、後に残ったのは少女が変身した紫色の剣士。その姿を見た飛羽真が神妙そうな声で呟く。

「強欲の剣士……」

それを聞いて、やっとうちは気付いた。この子があの、飛羽真達が苦戦したという強欲の剣士であると。

少女……強欲の剣士は手にした聖剣をメギドに突きつけた。

「さて、さっさと終わらせようか」

第13章 その剣士は、第三の覇者。

「皆さん、ボンヌ・レクチュール！ 僕はタツセル。前はまさかの出来事が起きたね！」

「須藤芽依が街に現れたカブトガニメギドに襲われそうになった時、彼女を助けたのは、なんと破滅の剣士の一人であるエドナだったんだ！」

「彼女は駆け付けた飛羽真達の前で変身し、仮面ライダーシヤムシルとなってメギドと戦い始める」

「思わず僕も唾然としちゃったよ。彼女が人間を助けようとするなんて。だって、あんなことがあったんだから……おっと、この話はまた後でね」

「さて、彼女は何を考えているんだろうか？」

【SIDE：飛羽真】

「強欲の剣士……」

メギド出現の知らせを受けて、俺達が芽依ちゃんの許に駆けつけたとき、その場に居た少女。その彼女が変身した姿に思わず絶句した。それは以前、圧倒的な力を見せて姿を消した、強欲の剣士そのもの。突然現れなくなったから、サウザンベースの剣士によって倒されたものだと思っていた。

彼女は世界を滅ぼそうとした剣士の一人らしいが、その行動は謎に包まれている。時折姿を現しては、メギドや剣士と戦って、姿を消す。彼女が何をしたいのか、全く分からない。

「さて、さっさと終わらせようか」

そんな彼女は、手にした聖剣を構え、メギドに向かってゆつくりと歩く。そんな彼女へ周りに居たシミーたちが群がった。

だけど、それに一切動じず、強欲の剣士―シャムシールは腰から一冊のワンダーライドブックを取り出す。

『強欲な列車!』

『欲求一突!』

本から力を得た聖剣、その切っ先から光の線路が現れると、まるで鞭のように撓りながら、周囲のシミーたちを一瞬で掃討してみせた。

「あれは覇剣の一つ……600年前に感じた気配は、あいつのものか……」

ぽつりとユーリが呟く。その口ぶりから何か知っているのかもしれない。

「くそつ、イライラするっ! オマエなんか、細切れにシテヤルっ!!」

メギドは鋭い爪を振り回しながら、シャムシールへと躍りかかる。左右の腕を交互に振るいながら、反撃は許さないといわんばかりの連撃を繰り出す。仮に反撃できたとしても、見るからに頑丈そうな甲殻を破るのは難しいだろう。

しかし彼女は、軽やかな足取りでその攻撃を躲すと、僅かにメギドの体勢が崩れた瞬間を狙い、そのメギドの体を足場にして跳躍。

「ふっ!」

そのままメギドの背後に回ると、放ったのは鋭い突き。それは正確無比に、メギドの装甲が薄い関節部分を貫いた。

「グアっ!」

そのダメージによってメギドが怯んだ隙に、攻守交替と言わんばかりに、シャムシールはメギドに斬撃を繰り出し続ける。ほとんどがメギドの甲殻に当たり、音を響かせながら火花を散らすものの、軽そうに見える目に反してその攻撃の威力は高い。少しずつメギドの装甲に罅が入っていくのが分かる。

「あんた、つまらないね。はっ!」

そして大振りの一撃。それがメギドの胴体に見事に入り、その甲殻を大きく砕いた。

あまりにも苛烈な攻撃を受け、メギドは最早瀕死の状態。そんなメギドに、彼女はゆつくりと歩みを進める。

「さて、止めだね……ん？」

しかし、その足が止まる。彼女の視線の先、そこには甲殻が崩れ、輪郭が朧気となつていくメギド。やっぱり、あのメギドも……！！

「うう……何、だ……一体、俺は？」

崩れ落ちたメギドの中から姿を現したのは、右腕が異形と変貌した青年。予想通り、あのメギドも人間が変えられたものだった。

少し前から現れた、人間を体に乗っ取ったメギド。他のメギドと違って、下手に倒そうとすれば、取り込まれた人の命に危険が及ぶ、厄介な相手。

そんなメギドから人々を解放するには、ユーリの光剛剣最光か、俺の火炎剣烈火で倒すしか無い。

「ふうん、何かおかしなことになってるみたいだけど、まあ良いや」

そう言つて、シヤムシールは聖剣を倒れた青年へと向ける。まさか、あの人を!? そんなことはさせない!!

「止めろっ!!」

振り下ろされる一撃。それが彼に届く前に、俺は二人の間に割つて入り、その一撃を受け止めた。

「あれ、今の剣士はメギドを助けるのが趣味なの？」

「この人はメギドに乗っ取られた人間だ！ 助ける方法だつてある！ 命を奪う必要なんて無いんだ！」

「いや、そんなの私の知ったことじゃないし」

俺の言葉も意に介さず、彼女は力を込める。じりじりと刃が押し込まれ、呻き声が漏れそうになった。

「飛羽真！」

「はあっ！」

そんな俺を助けるため、ユーリと大道寺さんがそれぞれの聖剣で、シヤムシールへと斬りかかる。しかし、その攻撃が届く前に、彼女は大きく後ろへと跳躍して躲した。

「その聖剣……ああ、なるほど」

メギドとなつた青年を殺そうとするシヤムシール。それを止めようとする俺達。緊迫した雰囲気流れる。

「何でっ!？」

そんな空気を破ったのは、思いがけない声だった。

「何でうちを助けてくれたのに、その人を殺そうとするの!？」

【SIDE：エドナ】

「何でうちを助けてくれたのに、その人を殺そうとするの?」

炎の剣士と音の剣士……それにこんなところで会うとは思っても居なかった光の剣士と相對する私に、この間、菓子をくれた彼女が、幼い少女を抱きかかえながら、声を荒げて問い掛けてきた。

何で、か……。

「別に私はそいつの命はどうでも良いんだよ。この間、あんたから菓子を貰った借りを返すために、そいつを倒そうとただけだよ」

「っそれなら、うちに借りがあるって言うなら、その人を傷つけるのは止めて!」

……はあ。面倒な。全く、わざわざ助けてあげたのに、自分の命を狙って来た奴を助けようだなんて……。

「まあ、良いよ。あんたがそれを望むっていうなら、それで貸し借り無しってことで……」

まあ、別にこの男がどうなろうと、何をしようと私には関係ない。私に関わらなければ、それで充分。

「だけど……」

私は男と一瞥した後、視線を光の剣士へと向ける。遙か昔に姿を消した伝説の剣士。あのバハトと互角以上に渡り合い、封印したという彼がこの場に居るとは……。

予想外の登場人物に驚きを覚えたけど、それ以上に諦めていたプランが実現しそうなことに内心でほくそ笑みながら、彼へ欲望剣餓欲を向ける。

「光の剣士、あんたには用が有るからさ、少しばかり付き合ってもらおうよ」

「何?」

答えを聞く義理なんて無い。私は光の剣士に向かって餓欲を突き出す。だけど光の剣士の体はまるで溶けるかのようにその場から消える。

「?」

「はあっ!!」

何が起きたのか分からないでいると、残った光剛剣最光が浮遊しながら、私の許へ飛来する。それを捌くと、いつの間にか光の剣士が背後に立ち、聖剣を掴み取る。いや、さっきの声から察するに……

「ふうん、そっちの聖剣が本体ってことなんだ」

「ああ、俺は世界を守る剣だからな」

どうやら剣士としての意識は、あの聖剣の方に宿っているらしい。光の聖剣についての情報は、600年前に読んだ文献にも多くのことは書かれていなかった。ある程度は想像していたものの、それを斜め上に超える能力だ。これは少々厄介……

「ひっ、何なんだよ……こんなの嘘だろ!? うわあああああああ

あっ!!」

「あっ!!」

そんなことを考えていると、あのメギドに変貌していた男が絶叫を上げながら逃げ出した。自分がメギドになっていたことへの恐怖か、はたまた目の前で繰り広げられる剣戟に対する困惑か。どちらにせよ、あの男にとっては、信じられない出来事の連続だったのだろう。

剣士達も彼の後を追いかけてようとす。しかし、

「待った。私の用事は終わってないよ」

ここで逃すわけが無い。彼らの行く手に立ちふさがるように立つ。

「ちよっと、あの人を助けてくれるって」

「何言ってるの?」

非難するように後ろに居たあの女性が声を上げる。彼女には恩はあった。だけど、もう私には関係ない。

「あんたから受けた借りは返した。だから私は私のやりたいうようにやるだけだよ」

「そんな……」

「じゃあ、そう言うことで……っ!!」

そして私は斬りかかる。再び光の剣士は人型を溶かして、回避しようとする。だけど、それはもう見た!

『ムゲンウロボロス!』

「何っ!?!」

指先から放たれた蛇のオーラが本体である光の聖剣に向かつて放たれる。光の剣士は素早い動きで躲そうとするけど、そうそう逃すわけが無い。徐々に追い詰めていく。

そして蛇の牙が光の聖剣に迫ったその時だった。

「させんっ!!」

『錫音音読撃!・ イエーイー!』

横から放たれた斬撃が蛇達を切り裂いた。

その発射方向に居たのは、剣を構えた音の剣士。彼は炎の剣士に背を向け、口を開いた。

「飛羽真。ここは俺達が引き受ける。お前はメギドを追え!」

「大秦寺さん……分かりました!」

「芽依。君もその子連れて、ここから離れるんだ」

「う、うん。分かった」

『ディアゴスピーデー!』

『発車爆走!』

『ダイヤを開け、真紅のボディが目を覚ます! 剣がシンボル! 走る文字! 毎号特別加速! ディアゴスピーデー!』

炎の剣士はドライバーに一冊のワンダラーライドブックを、聖剣によつて解放する。するとそのライドブックは、一瞬のうちに一台の乗り物へと変貌した。それは復活してから見た、バイクと呼ばれる乗り物によく似ている。あんなワンダラーライドブックもあるなんて……。

そのまま炎の剣士はそのバイクに跨って、メギドを追って走り出す。

幼い少女を連れられたあの女性も、光の剣士の言葉に従って、退避した。これでこの場に居るのは私達だけ。

「お前はここで倒す」

「その覇剣……封印させてもらおうか」

「へえ、出来るものならね」

そして互いに一拍置き、聖剣を構えて走り出した。

【SIDE：飛羽真】

「見つけたー！」

逃げ出した青年を追って街を駆け抜けた俺が辿り着いたのは、海が一望できる公園。その中心で、彼は胸を押さえながら呻き声を上げていた。

「ううう……何でだよ。俺が何をしたっていうんだ。どいつもこいつも……俺はただ、認めて欲しかっただけなのに……」

明らかなその姿は、耐えがたい苦しみを抑え込もうとしているのが分かる。早く彼とメギドを分離させないと！

だけど、そこに一つの影が近づいていた。

「ふむ、あなたもこの世界に苦しみを感じているのですね」

そこに居たのは、明らかにこの場には似つかわしくない、古めかしい修道服を着た女性。彼女は慈愛に満ちた表情で近づく。

「ああ……何だよ、お前……駄目だ、俺は……俺はあああああつ!!」

そんな彼女の前で青年はメギドへと変貌すると、暴れ出そうとする。不味い！

だけど、次の瞬間、俺は思わず動きを止めてしまった。

『覇剣ブレードライバー』

彼女が腰に装着したのは、色こそ違えど、あの強欲の剣士やバハトが使っていたものと同じドライバー。それに加え、一冊のワンダーラ

イドブックを取り出して起動する。

『エンドレスマーメイド』

『かつて封じられし人魚の歌が今、解き放たれる……』

そして彼女はメギドの攻撃をゆったりとした動きで躲すと、ドライバーにライドブックを装填した。その瞬間に、辺りをまるで教会の鐘のような音が包み込む。

「さあ、あなたにも安らぎを与えましょう」

『抜刀！』

彼女はドライバーから抜き放った聖剣を両手で手にすると、一度メギドを斬り上げる。その衝撃でメギドが倒れ伏す中、彼女は静かに呟いた。

「変身」

『エンドレスマーメイド』

『夢幻！ 魅惑の剣が揺らめく！』

ワンダーライドブックから現れた人魚。それが周囲を跳ねまわりながら、彼女と一体化すると、そこに現れたのは桃色のスーツに、灰色の装甲を纏った剣士。

彼女は静かにメギドを見つめ、その名を宣言した。

「剣士ブロード、参ります」

第14章 慈悲が齎す、永久の眠り。

「ボンヌ・レクチュール！ 僕はタッセル。前回から物語は続いているよ」

「メギドに変えられた人を無視して攻撃を行うエドナ」

「須藤芽依の呼びかけによって何とか彼女を止めることは出来たけど、今度は代わりに剣士達に牙を剥いたんだ」

「さらに逃げ出したメギドを追いかける飛羽真の前にも、別の剣士が姿を現す」

「彼女の名はロレラ。またの名を慈悲の剣士ブロード！」

「彼女もまたメギドを倒そうとしているみたいだけど、あれ……ちよつと様子が？」

【SIDE：飛羽真】

『幻世剣夢幻！』

メギドの前に現れたブロードを名乗る桃色の剣士。彼女は手にした剣を力強く振るい、メギドに攻撃を仕掛けていく。

メギドも抗うけれども、その力の差は圧倒的でただ一方的に切り裂かれていく。それはまるで、さっきの強欲の剣士との戦いのリプレイのようにも見える。

だけど駄目だ。彼女も取り込まれた人ごとメギドを倒そうとしてる。そんなことはさせない！

「待てっ!!」

再び俺はメギドを庇う様に、剣士の前に立ちふさがる。

「あなたは……今代の炎の剣士ですか。一体何を？」

首を傾げながら、装甲によって覆われた瞳で俺を見つめる。そんな彼女に、俺はシャムシールにも投げかけた言葉を口に出す。

「このまま倒せば、取り込まれている人まで死んでしまう！」

「ですが、そのまま放っておいても、メギドとなって苦しむだけ。それならここで安らかに終わらせてあげるべきでは？」

「この人を助ける方法があるんだ！ だからそれまで手を出すな！」

多分、俺の言葉は届かないだろう。この剣士のベルトは、バハト達と同じもの。それにさっきの台詞から、彼女は今の俺とソードオブロゴスの関係を知らない。

この二つの点から、多分彼女もバハトやシャムシールと似たような剣士なのだろうと思う。その予想が正しければ、彼女の目的は世界を滅ぼすこと。きっと俺の言葉も意に介さず、メギドを倒そうとするだろう。

この状況、一体どうすれば……そんなことを考えていたからだろう。一瞬とはいえ、俺は背後のメギドから注意を逸らしてしまった。

「ジャマだアアアっ!!」

「っ!!」

その叫び声と共に、背後からメギドが爪を真つすぐ突き出して来る。

すぐに振り向いたものの、それを避けるには距離が近すぎる。体勢を整える暇もなく、その爪が迫りくるのをじっと見るしかない。

まずい、このままじゃ……!!

せめて少しでもダメージを減らそうと、体を振じる。それでもその一撃は間違いなく、俺の胴体を捉えていた。

痛みを覚え、俺は歯を食いしばる。だけど、その前に、目を疑うような光景が流れた。

「ふっー」

「ギギイっ!?!」

俺に迫っていた攻撃を、誰かが防いだ。

「それは本当でしょうか？」

そう疑問を投げかけたのは、紛れもなく桃色の剣士。俺が止めようと思っていた剣士ブロードだった。

「あのメギドを人に戻せるというのであれば、手伝いますが、どうなんですか？」

振り向いて俺をじっと見つめる剣士。そんな彼女に俺は一瞬呆気にとられながらも頷く。

「ああ。必ずあの人を助ける」

「分かりました。それでは……」

再び桃色の剣士はメギドに向き直り、そして口を開く。

「私の名はロレラ。あなたの名は？」

「俺は神山飛羽真。一緒に戦ってくれ」

「ええ」

互いに名乗りながら、俺は彼女―ロレラと共に、起き上がったメギドへと走り出した。

【SIDE：エドナ】

「はあっ！」

「ふんっ！」

「せやっ！」

幾度となくぶつかり合う剣。その度に火花が散り、腕に衝撃が伝わる。

私が光の剣士へと斬りかかると、その攻撃は巧みに裁かれ、その隙に音の剣士が変形した聖剣で銃撃しようとする。その動きが見えた瞬間、私は地面を強く蹴って跳び上がり、光の剣士の背後へと回ることで、ちょうど音の剣士の射線が通らないようにする。

しかし構わずに放たれる銃弾。その瞬間、再び光の剣士の影が消え、本体である剣が目にも止まらぬ速度でその場から離脱し、私の周囲で飛び回る。

迫る銃弾。銃弾を回避しようにも、周囲で光の剣が飛び回っている

ため、下手に動くことも出来ない。かといって剣で防御すれば、その隙を狙って光の剣の方から攻撃を仕掛けてくるだろう。

「ただこの程度なら、どうとでもなる。」

『ムゲンウロボロス！』

「何っ!？」

ワンダーライドブックから解放された蛇のオーラが、私を包み込むようにとぐるを巻く。これなら全方位、全てに対応できる。

そして全ての銃弾を防いだことを確認すると、そのまま蛇を操作し、その巨体で周囲を薙ぎ払う。

「ぐっ！」

「っ、やはり強力だな……」

光の剣士は剣の姿という小さな体躯を活かして避けたものの、音の剣士は防ぐことも躲すことも出来ずに大きく吹き飛ばされていた。

その大きな隙を狙って、音の剣士に向かって剣を振り下ろす。

「させるか！」

—ギインツ!!—

だがその攻撃も、カバーに回った光の剣士によって妨げられる。

「光あれ！」

『最光発光！』

視界を覆い尽くすほどの眩い光。突然のことに思わず目を逸らすものの、構えは解かずに後退る。光の剣士も追撃は行うことなく、光が収まると音の剣士の許へと移動していた。

「一つ聞きたいことがある」

そんな光の剣士は浮遊しながら私を見つめ、最早聞きなれた質問を投げかけてきた。

「お前は何故戦う？ 何のためにその聖剣を振るう？」

「……またその質問？」

600年前から、私と出会った剣士はどいつもこいつも似たようなことを問い掛けてくることに辟易する。

「聖剣は世界を守るためのもの。身勝手な理由でそれを使うことは許されない」

「世界を守る、ね……」

きつとこの光の剣士も、他の剣士と同様に、いやそれ以上にこの世界を守る使命を崇高なものと思っっているんだろう。

なんか、かつての自分を見ているようで心がざわつく。

「……あんたたちにとつてこの世界がどうかは知らないけど、私にとつてこの世界はつまらないだよ」

かつて父から教えられたのは、この世界に生きる遍く命に価値があり、それを守るのが自分達の使命だということ。

だけど、そんな綺麗事が通じる世界なんて、存在しなかった。

「醜い人間、意味の無い世界。そんなものを守るより、いつそのことこの世界を滅ぼしちやつた方が、面白そうでしょ？」

そんな私の返答に光の剣士は小さく震える。怒りでも感じているのだろうか、なんて思っっていると、彼は予想外の言葉を口に出した。

「それは何故だ？」

「は？」

思わず首を傾げるが、光の剣士は構わずに続ける。

「お前は どうしてその答えに至つたんだ？ お前は 何を見た？」

突然の言葉に私は空を仰ぐ。脳裏を走るのは、今でも忘れられないあの光景。

燃え盛る村。人々の悲鳴や怒号。そこらかしろに倒れ伏す死体。それを踏みつける兵士。その一人の顔は……。

「……それをわざわざ教える必要なんてある？ ただ私にとって、この世界は守る価値の無いものだってだけだよ」

溜息を吐いて、私は二人に背を向ける。

「白けた。今度会つたときは、容赦しないから」

「っ逃がさん！」

音の剣士が再び銃撃しようとする。だけどそれより、餓欲にライドブックを読み込ませる速度の方が速かった。

『強欲な夜桜！』

『欲求一突！』

全身が桜の花びらに包まれ、その場から瞬時に退避する。

…折角光の剣士に出会ったのだから、その力を奪いたかったころだけど、思わず撤退してしまった。まだ心がざわつく。とりあえず、何か食べて落ち着かせよう。

そう言えば、ロレラはどうしているんだろう？

私はその時、彼女が炎の剣士と共に戦っていることは、知る由も無かった。

【SIDE：飛羽真】

『ドメタリッククアーマー！ ドハデニックブースター！ ドハクリョクライダー！』

『ドラゴニックナイト！』

『すなわちド強い！』

俺はドラゴニックナイトの力を使って、メギドを装甲の上から焼き切る。メギドがダメージを受ける度に、その身体が揺らぎを見せた。「ジャマするなああっ!!」

だがメギドもただでやられるわけでは無い。反撃といわんばかりに、その爪から水圧の刃を放つ。

「させませんよ」

その攻撃を防ぐのは、ロレラ。彼女は俺の動きを邪魔しないように巧みに位置取りしながら、メギドの攻撃が俺に当たらないようにサポートしてくれている。おかげで俺も攻撃に集中出来た。

「グガアっ!?!」

そしてロレラが反撃の一刀を叩きこんだ瞬間、メギドの体勢が大きく崩れる。今だ！

「はあっ!!」

俺の意思に同調するように、火炎剣烈火が赤く光り輝いた。そして動きが一瞬止まったメギドに向かって勢いよく剣を振り下ろす。

「ナっ!？」

先程までと異なり、火炎剣烈火は甲殻に弾かれることなる、まるで豆腐を斬るかのように、すんなりとメギドの体を真つ二つにした。それと同時に、メギドの右半身が変化し、取り込まれていた男性の姿を現す。

「っ!!」

俺はすぐに彼の腕を掴み、メギドの体から引き剥がす。すると反発するかのようにメギドの体が弾かれ、解放された男性はその場に倒れ込んだ。

「大丈夫ですか?」

俺が問い掛けると、男性は自分の体のあちこちに視線を巡らせ、混乱しながらも「え、あ……はい」と答える。どうやら無事に助け出すことが出来たようだ。

ロレラもその姿を見て安心したように溜息を吐いている。

これで後は、メギドを倒すだけだ。

「ググっ、マダだっ!! もっと全てヲ壊すんだっ!!」

メギドは怒りのままに水圧の斬撃を放つが、その全てを俺とロレラは防いでいく。こんな奴らに、この世界の……人々の結末を決めさせはしない!

「物語の結末は俺達が決める!!」

『ドラゴニック必殺読破!』

『必殺黙読!』

俺に合わせ、ロレラもドライバーに聖剣を収める。そして同時に聖剣を抜刀し、暴れるメギドに向かって走り出した。

『烈火抜刀! ドラゴニック必殺斬り!』

『抜刀! 人魚幻影斬り!』

『神火龍破斬!』

灼熱の炎を纏った斬撃と、妖しい泡沫を纏った斬撃、その二つがメギドの体を甲殻を打ち破り、十字に分断する。

「ギギっ、俺はまだ……グアあくっ!？」

断末魔の叫びと共に、メギドはその全身をひび割れさせながら、内

部から弾け飛び、爆散した。その姿を見届け、俺は一息吐く。

人間を取り込んだメギド……きつとまだ多く居るはずだ。ただでさえ、今の俺の状況は苦しい。ユーリと大秦寺さんは協力してくれているけれど、それでも手が足りない。

だからこそ、俺は共に戦ってくれたロレラ existence を嬉しく感じた。もし彼女が俺達と一緒に戦ってくれるのなら、その分多くのことが出来るようになるはずだ。

俺は彼女に「ありがとう」と「一緒に戦って欲しい」と声を掛けようとした。

「……」

しかし彼女は俺に一瞥することなく、メギドに取り込まれていた男性の許へと歩き出す。

まだ状況を飲み込めていなかったのか、男性は腰を抜かしたまま、ロレラのことを見上げていた。

「……無事でしようか？」

安否を確かめる言葉。それに男性は緊張した面持ちで頷く。どうやら特に怪我は無いようで、動けないのもまだ心が落ち着いていないからだろう。

そんな彼女の行動は、普通なら事件に巻き込まれた人を労わる姿に見える。けど何故か俺は、どこか不穏な雰囲気を感じていた。

「良かった。それなら……」

そう言うと、ロレラは一冊のワンダーライドブックを取り出して、聖剣に翳す。

『スリーピングプリンセス』

「なっ!？」

何をしてる。そう言う前に、彼女は剣を男性に向かって突きだしていた。

『慈悲深き眠り姫!』

『幻惑一突!』

剣先から伸びた茨。それが体に絡みつくと同時に、男性の臉が落ち、まるで眠るかのようにその場に倒れ伏す。

「あなたに永久の安らぎがあらんことを……」

「何をしたんだ!？」

思わず声を荒げる俺とは対照的に、ロレラの声色は全く変わらな
い。どこまでも優しい気な雰囲気のまま、彼女は答える。

「眠らせただけです。二度と苦しみを味わうことのないように、彼
は永久とわに幸福な夢を見続けます」

「っ、どうしてそんなことを!？」

「人々を救うためですよ」

その彼女の言葉は、どこか強い悲しみを感じさせる。

「例えば、幸福であったとしても、それは永遠には続きません。必ずそ
の幸福が奪われ、悲しみと苦しみに心が埋まる時が来ます。であるな
らば、永遠に続く幸せな夢に浸らせ、苦痛なく終わらせてあげた方が、
人々にとって幸せでしょう」

そう言ってこちらを見つめ返す。

「だから私は、人々を救うためにこの世界を滅ぼします」

それは強い決意の言葉。彼女は他の破滅の剣士と違って、人々のた
めに剣を振るう。だけど求めるものは彼らと同じ世界の破滅。その
アンバランスな姿に、言葉が続かずたじろいでしまう。

そう言えば、朝やっていたニュース……その音声が唐突に頭に過
る。

『今日の深夜1時半ごろ、市内の公園にて26名の民間人が昏睡状態
となっているのが発見されました』

突然、人々が昏睡状態となって発見されるという事件：眠っている
かのような状態の被害者。その姿が目の前で倒れ伏した男性と重な
る。

まさかその事件も彼女が!？」

「どうやら分かってはもらえないようですね。私もあなたと同じ、た
だ人々を守りたい一心だというのに……」

絶句する俺に、彼女は残念そうに溜息を吐く。

「ただどすぐに気を持ち直して、俺は彼女を睨んだ。」

「その人を元に戻せ!」

「それは出来ません。これは救いなので」

語気を荒げる俺に相反し、彼女は剣を下す。

「申し訳ありませんが、今はあなたと戦う気はありません。まだこの体も万全とは言い難いので」

『エンドレスマーメイド!』

そう言つてロレラは俺に背を向ける。それがここから退こうとしているのだと察知し、すぐに俺は走り出す。ここで逃がすわけにはいかない!

「それではまたいずれ……あなたにも永久の安息があらんことを」

しかし烈火の剣先が彼女に到達するよりも早く、彼女の全身は桃色の泡となって溶けていく。そして吹き抜ける風と共に、泡は揺らめきながら飛ばされていった。

「っ!」

残されたのは俺と、彼女によって眠らされた男性だけ。

また助けられなかった。自分の不甲斐なさに歯噛みすると同時に、また新しい脅威が現れたことに、冷や汗が流れたのを感じたのだった。

第15章 真実を、知るために。

【SIDE：タルス】

強欲の剣士に敗北してから、既に2か月近く。使命を果たせなかった私達は、マスターから待機を命じられ、ただ鍛錬の毎日を送っていました。

あの強欲の剣士が何をしているかも分からないのに、何も出来ない自分が歯がゆい。しかしそれは自分の過信と実力不足のせいだ。言い訳をするつもりはありません。

だけどそれ以上に心配なことがありました。それはレボスのこと。偽りの聖剣の事実を知ってから、彼とはほとんど会うことも無く、やっと見つけたと思ったら、すぐに姿を消してしまう。それは偽りの聖剣について、何も教えなかった私に対する、彼の拒絶なのでしょう。偽りの聖剣。それは真の聖剣を守るための、言うなれば囮。その存在が外部に漏れることを阻止するべく、その事実を知っているものはごく僅かに絞られます。故に私もその事実を決して誰にも教えることはありませんでした。それが兄弟同然に育ったレボスだとしても……。

しかしこのような状況になって、改めてそれが正しかったのかと迷う。彼は聖剣の担い手に幼い頃から憧れ、鉄鋼剣黒鉄を与えられてからは、その立場に強い責任と自信を持つようになりました。ですが、その聖剣が囮であると告げられたが故に、それらが一気に崩れ去ってしまった。

こうなることが分かっていたら、もっと早くその事実を私から伝えておくべきだったのではないか。ですが、それは組織のルールに反すること。それを易々と伝えるわけにはいかない。私は一体どうすれば良かったのでしょうか……。後悔が絶えませんが、今はもう起きてしまったこと。もしものことを考えていても仕方ないでしょう。

もう一度、レボスと直接会って話したいですが、結果として彼を騙してしまった私が今更どのような顔をして彼と話をすればよいのかも分かりません。それらの悩みを吹き飛ばすべく、私はただ鍛錬に打

ち込んでいました。

そんな折、私は衛兵達からある噂を耳にしました。それは組織を裏切ったという炎の剣士、神山飛羽真がサウザンベースに侵入し、禁書を盗み出したというもの。

寝耳に水の話で酷く驚くと同時に、幾つか疑問が浮かびます。このサウザンベースはソードオプロゴスの本部であるが故に、常に厳重な警備が張られ、入り込むにも一部の認められた者のみに渡されたブックゲートを用いるしかありません。その上、普段は特殊な結界で誰にも見えないように隠蔽されている禁書庫から、誰にも気付かれることなく禁書を盗み出すなど、果たして出来るのでしょうか。

……それに、それほど重大な出来事となれば、普通なら剣士達を呼び出して奪還に向かうはず。しかしそのような話は私の耳にも届いていません。全くの事実無根であるという話も聞いていません。混乱を避けるために、敢えて情報を隠しているのかもしれませんが、既にこのような噂が出ている以上、隠す必要があるのでしょうか？

何か嫌な気配を感じました。

……本来、私は組織を守るために、マスターの命に従うべき。しかし、ただでさえメギドが活発化し、その上禁書まで盗まれたというのなら、これはまさに非常事態。何もしいない訳にはいかないでしょう。

無断で行動するのは、剣士として許されない事。ですが、この噂が事実なら、何者かが手引きした可能性が有ります。ならばここは、私一人で事実を確かめに行くことにしましょう。

そして私は密かにブックゲートを取り出し、神山飛羽真がいる街へと跳ぶ。

そこで私の人生を一変させる出来事が始まるとは、その時は予想だにしていませんでした。

〔SIDE：尾上〕

組織から離れ、飛羽真と共に戦うことを選んでから数日。メギド出現の情報を聞いたオレは大秦寺、ユーリと共に街を駆け抜けていた。最近出現しているという、人間を変貌させたメギド。今回出現したのもその可能性がある。それを元に戻せるのは飛羽真とユーリだけ。しかしその飛羽真は今、この場には居ない。というより、オレ達が止めた。

何故、あいつが来るのを止めたのか。その理由は、ノーザンベースで保管している一冊のワンダーライドブックにあった。

マスターロゴスに会うべく、オレが持っていたブックゲートを使って飛羽真がサウザンベースへと転移した時のことだ。その時、何故かサウザンベース内に居たというメギドの首領の一人「ストリウス」が持っていた禁書が飛羽真の許へと渡り、それが水色のワンダーライドブックへと変化した。だが禁書の力はあまりにも危険で、飛羽真の意思を乗っ取って二度の暴走を引き起こした。

その力は、ストリウスと同じメギドのリーダーである「レジエル」を一蹴するほど。それほどの力が解き放たれば、それはメギド以上の脅威になりかねない。

そこで飛羽真はその禁書の力を制御するべく、乗っ取られていた際に見えた映像を手掛かりに、方法を探していた。

だが、進捗は芳しくなさそうだ。オレも手伝いたいが、ヒントが少ない現状では飛羽真の記憶を頼りにするしかない。

だからオレがやるべきことは、飛羽真の負担を少しでも減らすことだ。

そのため、今回のメギドの対処にアイツが行こうとするのを止め、代わりにオレ達が駆け付けた。

体は鈍ったとはいえ、伊達に何年もの間剣士として戦っていたわけじゃ無い。メギド相手にそう簡単に不覚は取らない。

街を見渡すと、立ち並ぶ建物の一部が不自然に崩れ、まるで石膏像のような形状に削り出されている。きつとメギドによるものだろう。このままでは、街中の建物が破壊されてしまう。

さらに今も、ビルの一つが崩れるのが見える。恐らく、メギドはそう遠くには居ないはずだ。

そう考えて辺りを見回すと、一人の男が蹲っているのが見える。

「う、うう……嫌だ……何が、うああーっ!？」

男は苦しみながら絶叫すると、その身体が真つ赤なメギドへと変わっていく。それはまるで、御伽噺に出てくる赤鬼のよう。

「これが……」

あらかじめ聞いていたとはいえ、直接目になると、その悍ましさがかかる。そしてオレと同じように、この光景に啞然としていた奴が居た。

「何なんですか、これは……」

「っ!？」

その眩きが聞こえた方向へと視線を向けると、そこにあったのはサウザンベースから来た剣士の一人の姿。確か名前はタルス……。

あの上條との決戦の日から姿を見かけなくなっていたあいつが、一体なぜこんなところに……。いや、あいつもあの女《神代玲花》と同じサウザンベースの人間。飛羽真から聖剣を奪いに来たと考えるのが自然だ。そしてオレ達も標的である可能性は十分ある。

ここはどうするべきか。それを考えるよりも先に、メギドが手にした金棒を振りかぶって飛び掛かって来た。

ちっ、ここで悩んでいる暇は無え!

「変身!」

『一刀両断! ブツた斬れ! ドゴ・ドゴ・土豪剣激土!!』

『銃剣撃弾! 銃でGO GO! 否、剣でいくぞ! 音銃剣錫音!!』

『Get all colors! エックスソードマン!!』

攻撃を回避したオレ達はすぐに変身し、メギドに相對する。だが、いつ襲って来るかも分からない後ろの奴にも気をつけないといけない。

緊張しながらも、土豪剣激土を握りしめる。

「芸術は……バクハツだーっ!!」

「っ!!」

オレ達が動くよりも先に、メギドが地面に向かって金棒を叩きつける。すると周囲の地面が盛り上がり、見上げるほどの大きさの像が作り上げられた。その像はゆっくりとその自重によってオレ達に向かって倒れこんでくる。

「おらあつー！」

『激土乱読撃！』

すぐにオレはワンダラーライドブックの力を使い、倒れこむ像を渾身の一撃によって粉碎する。

周囲には土塊が降り注ぎ、土煙が舞い上がる。その中を大秦寺とユーリが疾走し、メギドに肉薄した。

「はっー！」

大秦寺の鋭い突きがメギドの金棒による一撃を逸らし、

「ふっー！」

ユーリの熟練の一撃がメギドの体を捉える。

メギドと取り込まれた人間を分離するチャンスを作るべく、少しずつだがダメージを与えていく。

「ググ、我が芸術をミヨっ!!！」

だがそんなオレ達に対抗するように、メギドも手にした金棒を再び地面を叩きつけた。すると今度はメギドと同じ姿をした像が現れる。その数はざっと十体。

「行けっ!!！」

メギドの号令に従い、像が動き出す。その動きは本物と大差なく、その数に今度はオレ達が追い詰められていく。

「くっ、ならばー！」

僅かな動きで大秦寺がワンダラーライドブックを交換しようとする。しかし僅かに注意が逸れたその瞬間、像の金棒が大秦寺の腕に直撃する。

「ぐっ!!！」

火花を散らしながら転がる大秦寺の体。その明らかな隙を逃すメギドじゃない。何体かの像がそのまま大秦寺に迫る。

「っ、どけっ!!！」

カバーに入ろうとするものの、オレもユーリも像に囲まれ、動くことができない。そして大秦寺を像達の金棒が再び振り下ろされようとしていた。

「っ大秦寺!!」

オレは声を上げることしか出来ない。

大秦寺は近くに転がっていた聖剣を拾い迎撃の姿勢をとるが、腕にダメージを受けた今の状態じゃ、まともに受けることは出来ない。

「おらあつ!!」

強引に大秦寺の許へ走ろうとする。オレの体にも像の攻撃が辺り、痛みを感じるが、それを無視する。だがそれでも辿り着くには時間が足りなかった。

そして大秦寺に像達の攻撃が直撃する……その直前だった。

『深魂解読！ 冥府の剣が彷徨う魂を支配する！』

「はあっ!!」

ガキインと金棒が何かとぶつかる高い音が響く。

「なっ!?!」

大秦寺が顔を上げると、驚愕の声が漏れる。そしてオレもまた、思わず口を開けた。

「……ぐうっ!!」

大秦寺を攻撃から庇った人物。それは見覚えのない鎧を身に纏った剣士。いや、声で分かる。その剣士があのだルスであると。

何でこいつが大秦寺を守ったのか。だがそんなことを考えている暇はない。実際、あいつもまたガードするのはギリギリの状態で、像達の金棒が少しずつ押し込まれていく。

「やらせるかっ!!」

ダッシュの勢いをそのままに、像達に向かって激土を叩きつける。強度はそれほど高いわけでは無いらしく、オレの攻撃を受けた像は、そのまま土塊に変わっていく。

その光景を横目に見ながら、オレはサウザンベースの剣士へと視線を向ける。

「……お前がどうしてここに居るのかは知らないが、大秦寺を守って

くれたことは感謝する」

「いえ、私も色々聞きたいことがありますから。ですが今は……」

軽く言葉を交わして、オレ達は再びメギドに相對する。体勢を立て直した大秦寺に、像の包圍網から抜けたユーリも合流する。

「あれは……あのメギドは一体なんなんですか？ 先程、人間が変わったように見えたのですが……」

「知らないのか？」

オレの問い掛けにタルスは困惑したように頷く。あの女神代玲花と同じサウザンベースの人間だから、何か聞いているものと思っていたが、こいつの態度からは嘘は感じられない。

意図的に情報が閉ざされているのか？ やはりあの女は信用できない……。

「あれは人間を取り込んだメギド。元に戻せるのは、光の聖劍か炎の聖劍だけだ」

「人間を取り込んだ？ そんなことが……」

大秦寺の説明に困惑しながらも、構えを解かない辺りは場慣れしているのだろう。その姿には頼もしさを感じる。

「とりあえず詳しい話は後にしよう。俺がメギドを倒すから、その間、あの像を抑え込んでくれ」

ユーリの言葉にオレは頷く。シンプルだが、それが一番有効なはずだ。大秦寺も同様に賛成し、タルスは「あなたが光の……」と呟きつつ提案には乗った。

「行くぞー！」

オレの号令と共に、オレ達とメギドは同時に仕掛ける。

「さっきのようにはいかねえぜ、Yeah!!」

『劍で行くぜ！ No No！ 銃でGo Go！ Bang Bang！
ng！ 音銃劍錫音!!』

最初に攻撃を放ったのは、ワンダライドブックを交換した大秦寺。他の聖劍とは異なり、銃に変形させることが出来る音銃劍錫音の弾丸が、迫る像の足を撃ち抜き、その動きを封じる。

「どらあつー！」

そこにオレが土豪劍激土を叩きつけ、像の胴を両断する。そこに来た穴を縫うように、ユーリとタルスが走り抜ける。

「行きますよー！」

『必殺リードー！ 百夜怪談！』

タルスが剣を振るうと、無数の光弾が不規則な軌道を描いて像達に命中し、道を作っていく。

そして勢いよく駆け抜けるユーリ。一瞬でメギドに肉薄すると、金棒を僅かな剣の動きだけで弾いて見せた。さらにユーリはドライバーに装填したワンダライドブックのボタンを押す。

『移動最光！ 腕最高！ Full color goes to arm！』

ユーリの全身を覆っていたカラフルな装甲が変化し、左腕が大剣のように変化する。

「さっさと決めるぞ」

『Finish reading！ サイコーパワフル！！』

右手に握った聖剣と、左手の大剣に光が集まる。そして放たれた斬撃は、メギドの体を十字に切り裂く。

「ググ、ぐがあっ!?!」

勢いよく吹き飛ばされるメギド。その身体は二つに分かれ、取り込まれていた人間がその場に倒れる。

「よしー！」

その光景を見て、思わず俺はガッツポーズする。さらに人間と分離したためか、メギドの力が弱まり、残っていた像も崩れ落ちる。

ここで一気に決める。

『激土乱読撃！』

『錫音音読撃！』

体勢を崩したメギドに向かってオレは斬撃を叩き込み、止めに大秦寺が音波の弾丸で貫いた。

「グギ、グアアっ!?!」

断末魔の叫びと共に、メギドはその身を爆散させ消え去った。

「……その人は大丈夫ですか?」

メギドが倒れたことを確認すると、タルスは取り込まれていた人間に視線を向ける。

「ああ、ケガはない。時間が経てば目覚めるだろう」

ユーリの言葉にオレも安堵する。

だが、まだ終わりじゃない。オレと大秦寺は再びタルスに視線を向ける。

「さて、それじゃさっきの続きとするか。オレ達に聞きたいことって言うのは何だ？」

オレの言葉に、タルスはじつと見つめて口を開いた。

「先程のメギドについても疑問ですが、私がまず聞きたいのは、神山飛羽真についてです。彼がサウザンベースから禁書を盗み出したという件について、何か知っていますか？」

すこし予想とはずれた質問。どう答えるべきか迷うが、わざわざこのようなことを問い掛けるということは、恐らくこいつはあ神代瑠花の女とは無関係なのかもしれない。

警戒しつつも、オレは大秦寺に目配せをしながら、ゆっくりと事の顛末について説明を始めた。

第16章 迷える者に、迫る毒牙。

【SIDE：尾上】

サウザンベースから神代玲花と名乗る女が派遣されたこと。ソフィアが突如として姿を消したこと。飛羽真が組織を裏切ると語り、マスターロゴスの意思と称してオレ達に火炎剣烈火とワンダーライドブックを奪うように、ソフィアに変わって指示を出し始めたこと。それと同じ時期にユーリと光の聖剣、そして人間を取り込む新たなメギドが現れるようになってからも、メギドに対しては一切触れず、逆に光剛剣最光に対しては執着を見せるようになったこと。

これらの態度に疑問を感じたオレ達が、飛羽真の覚悟を見届け、組織から離れ飛羽真に協力するようになったこと。上條が飛羽真に、組織の中に裏切り者が居ると語ったこと。マスターロゴスから真意を確かめるべく、飛羽真がサウザンベースへ侵入したものの、そこでメギドの幹部であるストリウスに会ったこと。そのストリウスを追った先で、奴が禁書の封印を解き、それが新たなワンダーライドブックに代わり、飛羽真を乗っ取って暴走を始めたこと。そして今は、そのワンダーライドブックの暴走を止める方法を調べていること。

オレ達が知っていることを全て語り終えると、タルスは文字通り信じられないといった表情を見せた。

「まさか、そのようなことが……?」

タルスは顎に手を当て、しばらく考え込むと、ゆっくりと口を開いた。

「正直なことを言うと、貴方達の言うことを全て鵜呑みにすることは出来ません」

自分が知る神代玲花という人物は、組織とマスターロゴスに忠誠を誓った、崇高な人物であり、我欲で動くような人物ではない。そんな彼女が組織を裏切るような真似をするとは思えず、かといってマスターロゴスがまるでノーザンベースを混乱に陥れるような指示を出したとも考えにくい。そのため、今の話を信じることは難しいと、タルスは言った。しかし、同時に「ですが」と続ける。

「先程の人間を取り込んだメギド。あれについては私は知りませんでした。本来であれば、あのような存在が現れたのであれば、すぐに組織全体に周知されるはず。それがされていないということは、何か組織の内部で異変が起きているのかもしれないかもしれません」

それはオレ達自身も抱いていた疑問だった。それまでとは違う新しいメギド。人々と世界を守ることが使命である組織にとって、あのメギドの存在は新たな脅威そのもの。分離する手段が限られている以上、それは広められるべき情報ははず。しかし、あの女がそのことをマスターロゴスに伝えたと言っていたものの、状況が変わる気配は全くない。まるでわざと情報が隠されているかのような感覚を感じさせる。

そんなことを考えていると、タルスはブックゲートを起動させると、俺達に背を向けた。

「今回の件は、マスターロゴスに報告させてもらいます。その上で何が起きているのかを確かめることにしましょう」

「良いのか。今のオレ達は組織を裏切ったも同然の状態なんだぞ」

「……今回、私が貴方達と接触したのは、あくまで私の独断です。私自身に火炎剣烈火の奪取や、貴方達の拘束は命じられていません。よって今回は見逃すことにしましょう。ですが、もしマスターからの指示があれば、その時は容赦しません」

そう告げると、タルスはブックゲートの中へと姿を消した。

どうやらアイツの反応から、サウザンベースの中でも情報が錯綜しているようだ。上條が言っていた、組織の内部に居る裏切り者の存在が、俄然真実味を帯びてくる。

「とりあえず今は戻るべきだ。今の情報も整理しないといけないからな」

大秦寺の言葉にオレとユーリも頷くと、飛羽真の本屋へと足を進める。

ふと空を見上げると、空は薄暗い雲で覆われ、どこか不気味さを感じさせるのだった。

【SIDE：タルス】

私はサウザンベースの長い廊下を、一人歩いていました。

私の中に渦巻くのは、これまでにない悩み。その原因は、先程のマスターとの対話にありました。

「マスター、ご無礼は承知ですが、お耳に入れたいことがございます」

1時間ほど前、私はマスターロゴスが座する玉座の前で跪くと、謝罪をすると同時に、土の剣士から聞いた内容を報告しました。

正直、私でもその内容の全てを信じる事が出来ません。あの神代玲花がノーザンベースを混乱に陥れるかのような真似をしていること。組織の内部に裏切り者が居るかもしれないということ。その他、いずれもそれまでの私の価値観を大きく揺るがしかねない内容です。ですが、あの人間を取り込んだメギドの存在しかり、土の剣士の眼差しもまた嘘を言っているようには思えませんでした。

それ故に、私は直接マスターと話す機会を頂き、先程の内容を包み隠さずマスターへと報告することにしたのです。きっとマスターなら、この疑問を払拭させてくれるだろうと。

「そうですね。ですが心配はありません。彼女の行動は全て私の指示によるものです」

ですがマスターの言葉は私の期待したものとは異なりました。

「……失礼ですが質問をよろしいでしょうか」

「何でしょう？」

「私が出会った、人間を取り込むメギドに対しては、どのような対策をしているのでしょうか？」

「ふふっ、何も心配はありません。全ては私の計画通りに進んでいます。それが為されれば、メギドへの対処も全て完了します」

「計画……ですか？ それは一体？」

続けて質問すると、マスターは耳を疑うことを口に出しました。

「全知全能の書について、貴方はどう思いますか？」

「全知全能の書……？」

それはソードオブロゴスが設立当初から守って来た存在。森羅万象、ありとあらゆるものを司り、その本に記された知識によって人間は進化し、文明は発展してきた。手にすれば、この世界全ての知識を得ることが出来るとも言われる、伝説の書物です。

「我々は全知全能の書を、長きに渡って守ってきました。ですが私は思うのですよ。果たしてこの力を守っているだけで良いのかと」

「それは……」

満面の笑みで語るマスターロゴス。その顔に思わず寒気を感じました。ですが、続けて語られた言葉は、さらに私を驚かせるものでした。

「私は全知全能の書を復活させます」

「っ!？」

「その力を手にすれば、この世界は全て私の思いのまま。平穏もまた容易く実現するでしょう」

確かに、伝説の力を手にすることが出来るのであれば、メギドを倒すことも容易いでしょう。しかし……

「貴方も協力してくれませんか？ この崇高な目的の為に」

私はその言葉に、ただ黙ることしか出来ませんでした。

その出来事を思い出し、私は思わず溜息を吐きます。

マスターロゴスの語る計画。それは鍵となる聖剣とワンダーライドブックを集めることで、全知全能の書を復活させ、その力を用いて世界に平穏を齎すというもの。確かに実現すれば、ソードオブロゴスの悲願である世界の平穏を実現できるでしょう。

ですが、それだけ強大な力。もし使い方を誤れば大きな災厄となる。だからこそ初代マスターロゴスはその力を封じたと言われていま

す。そのような力を、果たして復活させて良いのでしょうか。

マスターであれば、きつとその力を正しく扱はず。ならば迷う必要は無いでしょう。ですがそれは果たしてソードオブロゴスの在り方として本当に正しいのでしょうか。

それに、何故マスターはわざわざ混乱を煽るような真似をしてこのような計画を進めているのでしょうか。先程聞いた話では、上條大地のような裏切り者を警戒して、信頼できる一握りの者のみに明かしているとのことでしたが、それでも違和感は拭えませんか。

……こんな時、凌牙なら迷うことは無いのでしょうか。

我がゴート家と同じく、代々マスターロゴスに仕える神代家の現当主であり、時の剣士でもある神代凌牙。古くからの私の友であり、家族以上に信頼できる相手でも有ります。

そんな彼は、私以上に組織の理念とマスターに忠実であり、今はマスター直属の剣士という立場になっています。きつと彼もこの計画を知っていることでしょう。

この悩みを払うためには、彼に打ち明けた方が良い。そんな気がして、私は彼が居る部屋へと向かうべく、振り向いたその時……

「えっ？」

—ズツ—

気配を何も感じませんでした。

振り向いた先、私の眼前に立っていたのは、それまで見たことのない装甲を纏った剣士の姿。そしてその剣士が握っている剣、その刃先が私の脇腹に突き刺さっていました。

「ぐっ……!?!」

数秒の後に感じる灼けるような痛み。剣が抜けると同時に私はその場に蹲ります。

「あなたは一体!?!」

「……」

私の問い掛けにその剣士は答えることなく、頭上に掲げた剣を振り下ろしてきました。

「ぐっ!」

すぐさま私も魂魄剣深魂を抜いて、その攻撃を防ぐものの、傷のせいで上手く動けません。いや、それどころか、痛みが全身に広がっているような……

「ぐうっ!!」

力を振り絞って剣を弾き、ふらつく体に鞭を打って後退します。その最中、私はその剣士が持っていた剣を見て、あることに気付きました。

「それは……まさか!？」

「……」

大きく曲がった刀身。鋸状の刃。その形状が記憶の片隅にあった記録と一致しました。

「600年前に失われたはずのそれを、どうして!？」

かつてあの強欲の剣士によって失われ、行方知れずとなっていたはずの偽りの聖剣の一振り、『毒牙剣弧毒』。目の前の剣士が手にした獲物は、ゴート家に残された記録に残されたそれと形状がそっくりでした。

何故、失われたはずの毒牙剣弧毒がこんなところに……いや、それ以上にこの剣士は一体!？」

ですがそんな疑問を考える暇もなく、再び謎の剣士は攻撃を仕掛けてきます。

「っ!!」

その攻撃を紙一重で躲しますが、徐々に全身に痺れと痛みが広がっていくのが感じます。

不味い。恐らくあれは本物の毒牙剣弧毒なのでしょう。そしてそれが扱う属性は、名の通り『毒』。その刃で切り裂いたもの全てを蝕む強力な毒を操ることが出来るとされています。

このままでは、避け切れずに剣で斬られるか、毒で動けなくなるか……どちらにせよ私の命は無いですよ。

ならばマスターロゴスの下に逃げるべきでしょうか。そう考えたとき、ふと疑問が浮かびます。

何故、このような襲撃者が居るにも関わらず、誰も来ないのか……。

このサウザンベースは結界によって覆われ、外部の者が入ればすぐにマスターに伝わり、衛兵達が即座に対応できるようになっています。

ですが今、衛兵達が来る気配はありません。それはすなわちこの剣士はサウザンベースの者であるということ。そしてもう一つ、嫌な考えが浮かびました。

いや、そんなはずはない。マスターロゴスに忠誠を誓う者として、そのような疑問を浮かべることがは在ってはならない。しかし……

「っ！」

頭の中をその考えが埋め尽くし、思わず集中が途切れたその隙を突かれ、今度は左手を斬られます。キズは浅いですが、それでも体がさらに毒で侵されるのが感じられました。

「……」

剣士はゆっくりと私に近づいてきます。

どうすれば……変身をするにも、戦う体力も無い。ですが迷っている暇は有りませんでした。

「っ!!」

私は懐からブックゲートのワンダーライドブックを取り出し起動させると、一目散にそのゲートへと走り出しました。

「……っ！」

不意に背中で感じる熱。それはあの毒牙剣弧毒によって背中を斬られた痛み。再び全身に毒が広がっていきます。ですが何とか堪え、ブックゲートへと飛び込むことに成功しました。

「……うう」

呻き声を上げながら、ゲートをふらふらと進みます。サウザンベース以外で私に向かえる場所。その中で真っ先に思い付いた場所へとゲートを繋げ、倒れこむようにその場所へと降り立ちました。

「なっ、お前は!?!」

「その傷は、一体どうしたんだ!?!」

霞む視界では、その声の主を捉えることも出来ません。僅かに言葉にならない声しか出せず、私の意識はそこで沈んでいきました。

【SIDE：マスターログス】

「よくやってくれましたね」

「いえ、全てはマスターの意思のままに」

私の言葉に、その剣士は跪きながら答えます。

タルスもこれくらい私に忠実であれば良かったのですが、残念です。私が計画を語った時点で怪しい反応を見せたので、仕方なく処分することになりました。

もし神代凌牙と接触してしまえば、彼までも反旗を翻すかもしれませんでしたからね。まだ手駒を失うわけにはいきません。

「これからも頼みますよ、私の剣士」

「はい」

そう言つてその剣士は静かに玉座の間から出ていきます。

やはり手駒は、あのような疑問も持たずに忠実に動いてくれる者こそ相応しい。きつと彼は長い間、私の道具として動いてくれるでしょう。

さあ、いよいよ計画は佳境。私が望む世界も、もうすぐ実現します。

ふふふ……あっはっはっはっは!!

仮面ライダーブロード&仮面ライダーエストック 資料

〔ロレラ〕

●エドナ同様に600年前封印されていた剣士の一人である女性。
●かつては修道女であり、人々を苦難から救うべく活動していたが、とあるきっかけからソードオブゴスに所属する。その後は組織の一員として世界の平和を守るべく剣士達のサポートをしていたが、突如として行方を晦ませると、幻世剣夢幻の所有者となり、バハトとエドナと共に世界を消し去ろうとした。

●性格は他のバハト達と比べると温和。しかし人間は生き続ける限り苦痛に苛まされるといふ考えから、世界を無に帰そうとする過激な思想の持ち主でもある。

〔仮面ライダーブロード〕

身長 196.4cm 体重 82.5kg パンチ力
57.3t キック力 92.6t ジャンプ力 98.5m
(ひと跳び) 走力 1.7秒(100m)

●ロレラが覇剣ブレードライバーで変身した姿。メインカラーは灰とピンク。覇剣ブレードライバーの色はピンク色。

●ファルシオン、シャムシールと並ぶスペックを持っているが、変身者であるロレラは元々剣士では無く、飛羽真のような才能も無いため、剣術という面では数段劣る。しかしあらゆるワンダーライドブックを完全に使いこなす能力を有しており、変幻自在の力で敵を圧倒する。

『ブロードヘルム エンドレスマーメイド』:ブロードの頭部。「幻世剣夢幻」の刀身の意匠を持つ。

『エンドレスマーメイドボールド』:右肩部分。神獣「エンドレスマーメイド」の力を宿している。

『チャリティキュイラス』:胸部装甲。敵に撃破された時は、神獣「エ

ンドレスマーメイド」が発する「久遠の雫」により復活することができる。

『ヴォイドローブ』：「幻世剣夢幻」に選ばれし者が纏う甲冑。聖剣の覚醒と同時に装着され、変身者の剣技、身体能力を向上させ、特殊能力の発動を可能とする。

『ウエベンレッグ』：脚部。神獣「エンドレスマーメイド」の力により、どんな足場でも軽やかな動きを可能とする。

『ウエベンアーム』：腕部。神獣「エンドレスマーメイド」の力により変身者の肉体が超活性化され、凄まじい剣技を可能とする。

『ウエベンガント』：グローブ。「幻世剣夢幻」にありとあらゆる幻想の力を送り込み強化する。

『フロータセット』：流れる水の意匠を持つ、ブロードの装甲。受けた衝撃を吸収し、即座に「久遠の雫」によって癒す。

『ウエベンソール』：ブーツ。「久遠の雫」を纏わせることで、全てを打ち砕く必殺技「人魚幻影撃」が発動可能となる。

【幻世剣夢幻】

● ロレラが所有する幻の聖剣。

● 幻の名の通り、様々な幻覚を見せることができるが、その本質は幻想の力であり、他の聖剣はワンダーライドブックとの相性の有無が存在するのに対し、幻世剣夢幻は全てのワンダーライドブックの力を完全に使いこなすことが可能。

● 他の覇剣同様に封印されていたが、ロレラを所有者として封印から解き放たれた。

『幻世剣夢幻エンブレム』：「幻世剣夢幻」の根源。ブロードを表す紋章が描かれており、ありとあらゆる幻想の力をコントロールする機能を有する。

『ソードグリップ』：剣の持ち手部分。刀身に宿った力が所有者に逆流することを防ぐ。

『ムゲントリガー』：「幻世剣夢幻」の引き金。剣士の操作を受けて、各種攻撃のスターターとしての役割を果たす。

『シンガンリーダー』：刀身の根元にある速読器。これにワンダーライ

ドブックの裏表紙にあるスピリダーを接触させることで、あらゆる伝承の力を聖剣に宿らせることが出来る。

『ムゲンソウル』：刀身部分。叡智を宿した桃色に発光する刀身で、ワンダーライドブックの伝承を具現化する。

『レーブティン』：「幻世剣夢幻」の刃。あらゆる幻想の力を纏う性質を持つ。

【覇剣ブレードライバー】

● 仮面ライダーブロードに変身するために用いられるドライバー。カラーは桃色。

『ブレードライバーシエルフ』：ワンダーライドブックを収めるための部位。「エンドレスマーメイド」が装填され、騎士の甲冑であるソードローブにその能力を授ける。

『エンドレスストリーマー』：ドライバーの左側のパーツ。ライドスペルラインにより伝達された「エンドレスマーメイド」の力を、変身解除後も所持者に絶えず齎す。また変身者が復活する際の体の情報を溜め込む部位でもある。

『ブレードフルゴル』：覇剣ブレードライバーの右側にあるエネルギー生成器。ワンダーライドブックから抽出したエネルギーを用いて、ワンダーオールを生成する。

『ライドスペルライン』：ワンダーライドブックの能力伝達路である下側部分。ブレードライバーシエルフで読み取ったワンダーライドブックの力を聖剣に伝える。

【エンドレスマーメイド】

● 「かつて封じられし人魚の歌が今、解き放たれる……」

● ロレラが所持しているワンダーライドブックの一冊。ジャンルは神獣。カラーはピンク。

● 1ページ目には「海で歌う人魚」が描かれており、2ページ目のテキストには「無垢なる愛を持つ人魚が聖剣と交わり身に宿る」と記載されている。

● 神獣「エンドレスマーメイド」が発する「久遠の雫」によって、使用者の傷を絶えず癒し続け、致命傷すら完全に治癒する。ロレラの不

死身の根源。

●「久遠の雫」は浴びている者をその状態に保つ性質を有している。この性質によって幻世剣夢幻は常にワンダーライドブックの力が纏われている状態が維持されている。

●理論上は他の聖剣でも扱うことは可能である。

【スリーピングプリンセス】

●「とある茨に覆われた国に、眠れる一人の姫が居た……」

●ロレラが所持するワンダーライドブックの一つ。ジャンルは物語。カラーは緑。

●1ページ目には「茨に覆われた城と眠る姫」が描かれており、2ページ目のテキストには「長き眠りを誘う茨が聖剣と交わり身に宿る」と記載されている。

【タルス・ゴート】

●代々ソードオブロゴスで聖剣を守る役割を持つゴート家の現当主。

●分家の子孫であるレボスとは兄弟同然に育った。また神代凌牙、神代玲花とは共に剣の腕を高め合う仲間である。

●物腰は柔らかいが、自らの使命に忠実であり、マスターロゴスに高い忠誠心を持つ。

●ゴート家はかつては神代家に並ぶマスターロゴスの懐刀であったが、当主候補であったエドナの叛逆をきっかけとして立場が下がった。

【仮面ライダーエストック】

身長	217.5cm	体重	126.8kg	パンチ力
24.6t	キック力	45.5t	ジャンプ力	44.8m (ひと跳び)
走力	3.2秒 (100m)			

●タルスが霊剣エストックドライブで変身した姿。紺色のボディに銀色の装甲を持つ。

● スペックはシャムシールと比べると数段劣るが、「魂魄剣深魂」の性質により、歴代の所有者の技術が使い手にフィードバックされ、スペック以上の力を発揮させることが可能。

『エストックヘルム 百夜怪談』：エストックの頭部。「魂魄剣深魂」の意匠を持つ。

『スピリットショルダー』：肩の装甲。「百夜怪談」の力を宿しており、周囲に蠢く魂の気配を感じ取ることが可能。

『レイスメイル』：胸部。「百夜怪談」の力を宿しており、物理的な攻撃だけでなく、実体の無いエネルギーからも装着者を守る。

『ライドヒャクヤアーム』：腕部。ワンダーライドブックの力によって常人には不可能なパワーを発揮する。

『ヒャクヤガント』：手甲。実体の無い魂に干渉することが可能。

『ソードローブ』：「魂魄剣深魂」に選ばれた者が纏う甲冑。変身者に剣技の向上、身体能力の増強、特殊能力の発揮を齎す。

『ライドヒャクヤレッグ』：脚部。「百夜怪談」の力を宿しており、亡霊のような自由自在な動きを実現する。

『ヒャクヤコート』：腰部から伸びる外装。ありとあらゆる攻撃を受け流し、装着者のダメージを最小限に抑える。

『ヒャクヤソール』：ブーツ。「百夜怪談」の力を纏うことで、魂すら砕く必殺技を発揮する。

【魂魄剣深魂】

● タルスが所有する魂の聖剣。ゴート家の当主が代々受け継いできた。

● 歴代の所有者の記憶を宿しており、それを所有者へフィードバックすることで、高い戦闘能力を発揮させることが可能。

● 聖剣とされているが、実際は全知全能の書と繋がりを持つ11本の聖剣を守るために作られた模造品「偽りの聖剣」。発揮される力は本物の聖剣と遜色ないが、全知全能の書の復活に用いることは不可能。

● 見た目は闇黒剣月闇のリデコ。

『スピリットヒルト』：柄。末端に備えられた打突器には紋様が刻ま

れ、「霊剣エストックドライバー」の操作に用いられる。

『ミタマトリガー』：引き金。剣士の操作を受けて、「魂魄剣深魂エンブレム」から魂の力を発生させる。各種攻撃のスターターとしての役割も持つ。

『魂魄剣深魂エンブレム』：「魂魄剣深魂」の根源。エストックを表す紋章が描かれており、神秘的な魂の力を発生させる。

『ソウルフルリーダー』：「魂魄剣深魂」の速読器。ワンダーライドブックの裏表紙にあるスピリダーと接触させることで、あらゆる伝承の力を発揮させる。

『ミタマソウル』：「魂魄剣深魂」の刀身。叡智を宿した刀身で、「霊剣エストックドライバー」やソウルフルリーダーからワンダーライドブックに綴られた伝承を学び取り、具現化することが出来る。

『デッドスレイブ』：「魂魄剣深魂」の刃。この刃によって斬られた対象は魂を削り取られ、精神的にもダメージを負う。

【霊剣エストックドライバー】

● 仮面ライダーエストックに変身するために用いられるドライバー。ワンダーライドブック装填位置は紺色でベルト部分は銀色。

● 「魂魄剣深魂」が偽りの聖剣であるため、ドライバーの名称も「聖剣」ではなく「霊剣」となっている。

● 形状は邪剣カリバードドライバーのリデコ。

『スピリットジェネレーター』：ドライバーの右側に存在するエネルギー生成器。「邪剣カリバードドライバー」のデータを参考に作られ、ワンダーライドブックに内包されている森羅万象が持つエネルギーを抽出して、剣士や各種装備を活性化する特性を備えた「ワンダーエレメンタル」を生成する。

『ライドインテグレター』：「霊剣エストックドライバー」の始動装置。「魂魄剣深魂」のスピリットヒルトで打ち込むことで、各部が作動する。

『エストックドライバースィエルフ』：ワンダーライドブックを収める部位。ワンダーライドブックの力を引き出して聖剣に伝えるほか、「ソードローブ」に様々な能力を齎す。

『セミガードバイディング』：外装。聖剣のベルトの装甲である「ガードバイディング」と比べると強度は劣るものの、激しい戦闘に耐え、内臓機器を守る機能を有する。

『エストックドライバールベルト』：バックル本体の顕現と同時に、自動で腰に巻かれるベルト。その後、剣士の甲冑である「ソードローブ」を顕現させる。

【百夜怪談】

●「とある亡霊達が集う、恐ろしき夜の出来事……」

●エストックの変身に用いられるワンダーライドブック。ジャンルは物語。カラーは紺。

●1ページ目には「積み重なる多数の髑髏」が描かれており、2ページ目には「数多の亡霊が聖剣と交わり身に宿る」と記載されている。

●全知全能の書に至るために必要なワンダーライドブックでは無く、その力はブレイブドラゴン等と比べると劣る。しかし「霊剣エストックドライバール」はこのワンダーライドブックの力を完全に引き出すことによつて、聖剣に選ばれた剣士達に並ぶ力を発揮させることが出来る。

【グロリーベオウルフ】

●「とある災いに立ち向かう勇気が、気高き英雄を呼び覚ます……」

●タルスは所持するワンダーライドブック。ジャンルは物語。カラーは白。

●600年前にバハト達を封印するべく生成されたワンダーライドブック。エモーショナルドラゴン同様に、覇剣の力を封じる効力を持つている。

●その正体は、ユーリがバハトを封印した際に、破滅の書に宿った光剛剣最光と闇黒剣月闇の力の残滓がワンダーライドブックと化したもの。

●本来の力は未知数であり、卓越した力を持つ剣士でなくてはその力を完全には発揮できない。

第17章 相対する、幻と闇。

【SIDE：大秦寺】

「まさか、賢人が生きていたとはな……」

尾上の言葉に、その場に居た全員が押し黙った。

サウザンベースからやって来て、私達を翻弄した神代玲花。奴が私達が持つ聖剣を奪うために、煙の剣士としてノーザンベースを襲撃してきた。

何とか私達も対抗したものの、その実力は圧倒的で、あと少しで土豪剣激土と音銃剣錫音が奪われる寸前。あのワンダースライドブックープリミティブドラゴンが飛羽真に取り憑いて暴れ始める始末。暴走した飛羽真は神代玲花を一蹴し、その勢いのまま生身の倫太郎へ斬りかかろうとしたその瞬間、突如として闇の剣士カリバーが現れて、その攻撃を防いだ。それと同時に飛羽真とカリバーの変身が解け、私はそのカリバーの正体を見て愕然とした。

それは数か月前、上條大地によって斬られ、死んだと思っていた雷の剣士、賢人だった。

どうして闇の聖剣を持っているのか、何で生きていたことを伝えてくれなかったのか。そんな気持ちもあつたけど、それ以上に生きていてくれたことの喜びが溢れた。しかし賢人はどこか影のある表情のまま突如としてこう宣言した。

「俺は全ての聖剣を封印し、この世界を滅びから救う」

そう言うと、そのまま姿を闇の中へと沈め、俺達の前から消えた。ユーリによると、闇黒剣月闇には空間を切り裂いて、聖剣の中に有る闇の世界へ繋げる力があるらしい。賢人がカリバーによって殺されたと思ったあの時、実際は闇の世界へ送り込まれていたということだ。

それから何があつたのか。あの時の賢人の目は、私達を映していなかった。

飛羽真はまた一緒に戦うことが出来ると言っているが、それは空元気のように感じる。実際、飛羽真も不安はあるだろう。それを支え

てやるのが、私達の役目だ。

「それと、こいつのことも問題だ」

私は近くのベッドへと視線を向ける。

「う……」

そこに居たのは、青ざめた表情で唸りながら眠る男。サウザンベースの剣士の一人、タルスだ。

神代玲花が姿を消してすぐのこと。突如としてノーザンベースの扉が開き、また誰かが襲撃に来たのかと警戒していた中、姿を現したのがこの男だった。

左手で抑えた腹から血を流し、苦悶の表情で倒れ込んだタルス。一体何があったのか聞こうにも、意味のある言葉を口に出すことは出来ないほど弱っていた。

ユーリが特殊な力によって傷を塞いだものの、未だに目を覚まさない。ユーリが語るには、恐らく毒によるもので、傷を塞いでも毒が消えない限り完全に回復することは無い。

私はふと思い出す。かつて強欲の剣士によって奪われた、毒を操る偽りの聖剣があったと。その名は『毒牙剣弧毒』。刀傷に加えてユーリでも治すことの出来ない毒となると、その剣によるものだと直感的に感じた。

今、所在不明となつているはずの毒牙剣弧毒によって、何故こいつが傷つけられたのか。一体何があったのか。それはタルスの目が覚めない限り分からない。

しかし、メギドに加え、神代玲花に蘇った賢人、それに破滅の剣士達。大きな異変が起きているという事実には、これまで以上に過酷な戦いが待っているであろうことは、想像に難くなかった。

「タルスが……？」

お兄様と共にマスターと呼ばれた私は、玉座の間でマスターの口から紡がれた言葉に、思わず呆然としました。

「ええ。彼もまた私の理想を理解してもらえらると思つたのですが、残念ながらそれは敵わず、何を血迷つたのか私に剣を向けて来たのです」

マスターの目的である全知全能の書の復活。それを進めるべく、私とお兄様はマスターの指示の下、極秘に行動していた。これも全て、世界を守るといふソードオブゴスの理念のために。

しかし組織を裏切つたノーザンベースの剣士達や、封印から逃れた破滅の剣士など、不確定要素が増えてきたことを理由に、マスターはタルスに協力を求めるべく、彼に計画を明かしたらしい。しかし、突如として彼はマスターを裏切つて、マスターを襲おうとしたというのだ。

「幸いにも彼が居たので大事には至りませんでした……」

そう言つてマスターが視線を横に向けると、そこに居たのはフードを目深に被つた剣士が一人。脇に携えるのは、毒を操る剣である毒牙剣弧毒。マスターが時間を掛けて回収したそれを与えられた剣士は、口を開くことなく、マスターの前に跪いている。

「今回のように、タルスのように反旗を翻す者が近くに居るかもしれませんが。信用できるのはこの場に居る者のみ。あなた達もそのことを理解して、行動してください」

マスターが笑みを湛えながらそう言い、話を終えた。

私とお兄様は静かに玉座の間から退室する。背後では、あの剣士がずっと黙つたままこちらを見ていたのが、少し苛立たしく感じるけれども、それ以上にタルスが裏切つたということが信じられなかった。サウザンベースの内部にある、神代家の私室へと着くと、私は口火を切る。

「お兄様。タルスが裏切つたというのは、本当なんでしょうか？」

「……マスターが言ったことが全てだ。我らがそれを疑うことはあつ

てはならない」

いつも通りの凜とした表情でそう言うお兄様。だけどその声が少し震えているのを私は感じた。多分、それだけシヨックがあるのだと思う。

実際、タルスは長年ソードオブロゴスの理念に忠実に動いてきた剣士だ。気は食わないけれども、私もお兄様も彼と幼い頃から共に剣の腕を磨いてきただけに、その人格と実力を認めている。

強欲の剣士を封印するという役目にこそ失敗していたけれども、彼は決して言い訳はせず、自らの失態を認めていた。ただひたすらに自らの役目に専念するその姿には好感が持てた。

そんな彼が、突然マスターを裏切るといふのは正直言っただけがたい。何かの間違いなんじゃないかと思ってしまう。マスターのことを信じていないわけではありません。でも、何故タルスが裏切ったのかが分からない。

しかしお兄様は、鋭い目を決して緩めることなく、私を見つめた。

「神代家は代々マスターロゴスに仕え、世界の均衡を守って来た。今までも、そしてこれからそれは変わることは無い。俺達はただ一振りの剣として、己の使命に殉じるのが使命だ」

強い決意の瞳。例えどんな試練が待ち受けていようと、我々が切り開く道の先に、人々の平穏があると信じ、自らの役割を遂行する。お兄様のそんな思いが感じ取れる。

「……そうですね、お兄様」

なら私もまたお兄様と同じ道を行くだけ。そこに迷いはない。私は煙叡剣狼煙の柄を強く握り直し、お兄様に頷いた。

【SIDE：ロレラ】

鈍色の建物が並ぶ街。その中心で私は歌う。人々を安らぎへ誘う

ために。

—♪—

私が持つワンダーライドブック、「スリーピングプリンセス」の力を込めた歌。それを聞いた人々は、静かに意識を奪われ、眠っていきま
す。彼らはこれ以上苦しむ必要はありません。安寧の夢を見続け、安
らぎのままに世界が終わる。それこそが人類にとつての幸福なので
すから。

「見つけたぞ」

そんな私の前に現れたのは、深く暗い闇を瞳に宿した剣士でした。

「……あなたは？」

手に握られているのは、確か闇の聖剣。ということはあの炎の剣士
の仲間ということでしょうか。

ですが私の問い掛けに応えることなく、彼はワンダーライドブック
を構えました。

「答える必要は無い。お前の聖剣はここで封印させてもらう」

『ジャオウドラゴン』

『邪道を極めた暗闇を纏い、数多の竜が秘めた力を解放する！』

どうやら彼は言葉を交わす気も無いようです。仕方ありません。
ですがその瞳から、彼もまた苦難を味わったものなのでしょう。であ
るのなら、私のやるべきことは一つ。

『エンドレスマーメイド』

『かつて封じられし人魚の歌が今、解き放たれる……』

彼に呼応するように私もワンダーライドブックを開きます。既に
私の力は完全に戻っています。これなら十分戦うことが可能。

互いにワンダーライドブックを腰に装着したドライバーに装填す
ると、剣士は手にした聖剣の柄でドライバーを叩き、私はドライバー
から幻世剣夢幻を引き抜き、互いに睨み合い、一言。

「二変身！」

『闇黒剣月闇！』

『Jump out the book. Open it and
burst. The fear of the darkness

s.s.』

『You make right a just, no matter dark joke. Fury in the dark.』

『ジャオウドラゴン！ 誰も逃れられない！』

『抜刀！』

『エンドレスマーメイド』

『夢幻！ 魅惑の剣が揺らめく！』

私は桜色の装甲を、闇の剣士は紫色の装甲を纏うと、互いに剣を構え、そして

「ふっー！」

「はあっー！」

互いに相手に向かって飛び掛かりました。

闇の聖剣。かつて私を封印した剣士も使っていました。目の前の剣士が使ったワンダーライドブックは知らない物です。油断はできません。ですがそれでも易々とやられるほど、私の覚悟は甘くはありません。

闇の剣士が力強く横に振るった剣を、私も手にした夢幻で受け止めます。しかしワンダーライドブックと聖剣の力で強化されているこの体でも、純粋な剣士では無かった私では、剣術という点では他の剣士に圧倒的に劣ります。

幾度か剣をぶつけ合いますが、私の動きよりも闇の剣士の動きの方が素早く、どうしても攻勢に出れません。

ですがこのことは600年前に既に分かりきっていました。

「だあっ!!」

闇の剣士がより一層力を込めて鋭く突きを放つと、私は静かに剣を下しました。

「っ!？」

彼にはまるで自ら剣を受けようとしているように見えたでしょう。その事実疑問が浮かんだとしても、その攻撃を止めることはもう出来ません。

―ザンツ！―

私の体が鎧ごと貫かれる鈍い音が響きました。ですがその瞬間、闇の聖剣に貫かれた私の体が無数の泡へと変わっていきます。

「これは……っ！」

一瞬、闇の剣士の動きが止まるという明確な隙。それを狙って私は闇の剣士の右側から斬りかかりましたが、寸前に何かに気付いた闇の剣士が大きく後退して躲しました。

「今のは幻覚か」

闇の戦士がぽつりと呟きます。

そう、今の彼が貫いたと感じたのは私が生み出した幻覚。幻世剣夢幻は幻の属性を宿した聖剣。自由自在に幻を生み出し、相手を攪乱する力を有します。

ですがこれは夢幻の力の一端に過ぎません。

闇の剣士との距離が出来たことで、余裕が出来ました。

『トルネードグリフォン』

『終わりなき翼獣！』

「ちっ！」

闇の剣士が私の動きに気付いて止めようと駆け出しますが、もう遅い。

『幻惑一突！』

「はっ！」

私が剣を振るうと同時に、強大な竜巻が引き起こされ、闇の剣士を飲み込まんとします。

『月闇居合！ 読後一閃！』

「ふっ！」

闇の剣士も対抗して斬撃を放ち、竜巻を押しとどめようとしますが、ですが、地力が違います。

「ぐ、なっ!?!」

緑の竜巻は闇の斬撃を飲み込むと、闇の剣士の体を軽々と吹き飛ばし、近くの建物の壁へと叩きつけました。

もし私が使っている聖剣が夢幻でなければ、彼の斬撃は竜巻を切り

裂いていたことでしょう。ですが夢幻には、他の聖剣とは一線を隔す力が有ります。

本来、ワンダラーライドブックには聖剣との相性があり、相性が良いほど強力な力を発揮することが出来ますが、逆に相性が悪ければその力を十分に発揮することは出来ません。

しかし私の幻世剣夢幻にはその相性が存在しません。幻世剣夢幻の属性である「幻」は、幻覚だけを指すのではなく、幻想の力も表します。つまりこの夢幻は全てのワンダラーライドブックを完全に使いこなすことの出来る、唯一無二の聖剣なのです。

ですが、闇の剣士もまた熟練なのでしよう。あれほど激しい竜巻に巻き込まれたにも関わらず、壁に叩きつけられる瞬間に受け身をとってダメージを抑えたのが見えました。実際、倒れはしたものの、すぐに体勢を整えて私に剣を向けてきます。

そして再びお互いに走り出す。ですが純粋な剣技で劣る私は直接、剣を交わす気はありません。

『エンドレスマーメイド』

ワンダラーライドブックの力を解放したことによって、私の体は無数の泡となって掻き消えました。それだけではありません。闇の剣士の周囲に漂う無数の泡。その一つ一つに私の姿が映っては消える。そんな光景が闇の剣士には見える事でしょう。

勿論、これは現実ではなく、夢幻の力によって生み出された幻。闇の剣士もそれを理解して、じっと私の動きを伺っているようですが、この幻を破ることはできません。

「くっ！」

右腕を狙った突き、背後からの袈裟斬り、あるいは真正面から横薙ぎ……。

無数の幻に紛れて放たれる攻撃を見極めることなど出来るはずがありません。

すぐに終わらせ、彼も安寧に沈めてしましましょう。そう考えて私が一歩踏み出した時でした。

『必殺リードー！』

『ジャオウドラゴン』

『月闇必殺撃！ 習得一閃！』

ずぶりと、まるで泥沼に踏み入れたかのような感覚が足から伝わります。思わず目線を下げると、そこにあつたのは、深く暗いドロドロとした闇が地面を覆う光景。その闇は、あの闇の剣士が地面に突き立てた聖剣から流れ出しています。

まずい。それに気付いたと同時に、闇の剣士が放った斬撃が私を襲いました。

咄嗟に夢幻でガードしたものの、衝撃を受け止めきることは出来ず、今度は私が吹き飛ばされ、地面を転がりました。

ここで大きな隙を作るわけにはいきません。夢幻で体を支え、すぐに顔を上げます。闇の剣士はじっと私を見つめながら、聖剣を大きく上に掲げました。

互いに睨み合い、三度目の激突を前に息を整える。

「見つけましたよ」

ですがそれに水を差す気配。

そちらに視線を向けると、そこには朱い衣装を纏い、細身の剣を手にした女性。さらにその隣には、白と黒の装甲を纏った剣士が並び立っていました。

「聖剣を封印される訳にはいきません。ここで両方とも回収させてもらいます」

女性はそう言うと、手にしたワンダーライドブックに息を吹きかけて開きます。

『昆虫大百科』

『この薄命の群れが舞う、幻想の一節……』

「変身」

そのまま彼女は手にした聖剣に起動したライドブックを装填し、スィッチを押した瞬間、その全身が煙に包まれ、その姿を変貌させます。

『Flying・Smog・Sting・Steam!』

『昆虫・CHU・大百科!』

そうして変化した真紅の剣士。そして白黒の剣士は揃って私と闇

の剣士と対峙しました。

「さあ、己の愚かさを後悔しなさい」

「……お前達は、俺が狩る！」

第18章 乱れる戦場に、降り立つ者は。

【SIDE：怜花】

「……お前達は、俺が狩る！」

そう言つて真つ先に駆け出す白黒の剣士「仮面ライダータルワール」。

マスターから与えられた毒牙剣弧毒を闇の剣士カリバーへと振りかぶる。

「っ邪魔をするな！」

その一撃は闇黒剣月闇で受け止められ、ギリギリと互いの剣が軋む音が響く。

あちらは奴に任せていいでしょう。私の相手は……

「ふっ！」

慈愛の剣士があちらに気を取られている間に、私は手にした「煙叡剣狼煙」で鋭い突きを放つ。ですがその攻撃が当たる寸前で気付かれ、バックステップで回避される。

そして今度は慈愛の剣士のカウンターの斬撃が、私の胴目掛けて放たれる。だけど、それは無意味。

「ふっ！」

煙叡剣狼煙の力を解放する。それにより私の体は煙へと変化し、幻の剣士が放った攻撃はすり抜ける

「何をしようと無駄なこと。私にあなたの攻撃は通じません」

これが私が持つ煙叡剣狼煙の力。ありとあらゆる物理的な攻撃を無効化し、自由自在な動きを可能とする。まさに剣士にとっては天敵とも言える能力。この力がある限り、私は誰にも負けはしない！

そんな自負と共に、私は体を流体化させたまま、慈愛の剣士の周囲を素早く飛び回る。狙うは急所。私は再び慈愛の剣士の首を狙って、今度は背後から斬りかかる。

『エンドレスマーメイド』

今度は逃げられない。確実に命中する。その確信と共に放たれた斬撃。しかしその一撃が届いた瞬間、慈愛の剣士の体が泡となって掻

き消える。

「っ！」

すぐに私は攻撃の為に実体化していた体を再び煙へと変化させる。その僅か数瞬後、私の体目掛けて幾重もの斬撃が放たれていた。

「「ふむ、当たりませんか」」

その声は私の周囲を囲むように聞こえていた。確かに先程まで、私が奴を包囲していたはずなのに……。

声の主である慈愛の剣士。その姿はすぐに見えた。いや、見えすぎた。

「「ですが、やはりエドナの言っていた弱点は確かなようですね。ならば十分戦えます」」

そう言って何人もの慈愛の剣士が剣を構えた。

いや、あれはただの幻。本物は一つだけだ。しかし、それを確かめるには実体化して直接触れる必要がある。

「厄介な……」

ですが、向こうの策略に乗ってわざわざ一つつつ確かめる気はありません。私は数多の慈愛の剣士の前に姿を現すと、煙叡剣狼煙のトリガーを引く。

『超狼煙霧中！』

『昆虫煙舞一閃！』

聖剣に装填されたワンダラーライドブックの力により、私の背から鋭い節足が展開される。そして突き出されたそれは槍の如く、周囲に立ち並ぶ慈愛の剣士の姿を次々と貫いていく。

「くっ……」

一つ、また一つとその身体は泡となって掻き消えていく。しかし、私の思惑に反して、いつまで経っても、本物に命中する気配が無い。いや、それどころか分身が消える度に、新たな分身が現れる始末だ。思わず焦りの声が出る。それ故に、僅かに反応が遅れた。

『月闇居合！ 読後一閃！』

「っ!!」

幻影の背後から飛んできたのは、漆黒の斬撃。予想外のことにガー

ドも間に合わず、その一撃をまともに受けてしまう。

「ぐうっ!？」

重い一撃により壁に叩きつけられ、思わず呼吸が止まる。しかしここで止まるわけにはいかない。

追撃と言わんばかりに、幻の剣士が頭上から私に向かって剣を突き立ててきた。

「く……」

寸前に煙叡剣狼煙の力で煙に変化させ、攻撃を躲す。もし1秒でも遅れていたら、まともにその一撃を受けていたことだろう。

まさかこんな不覚を取るとは……。慈愛の剣士に集中しすぎて、闇の剣士達の姿まで幻によって隠されていたことに気付けなかった。失態に思わず歯噛みする。

さらに間の悪いことに、こちらに向かってくる一つの足音が聞こえてきた。

「……これは予想外だな。出来れば賢人そいつと二人きりで話したかったんだが」

そう溢しながら姿を見せたのは、私のターゲットの一人である光の剣士。彼は困ったような表情を浮かべ、こちらを見つめる。

その出現によって、戦闘が一時止まる。そんな中、一番最初に口を開いたのは、富加宮賢人だった。

「やはり来たか」

「ふむ、どうやら俺がこの場に来る未来も見ていたようだな」

……マスターから話は聞いていた。闇の聖剣には、持ち主に起こり得る未来を見せる力が有ると。この状況も闇の剣士の予想の範囲内ということだろう。つまり、闇の剣士はこの状況を潜り抜ける算段が付いているということでもあります。

「その聖剣もここで封印させてもらう」

「それはさせない。俺は剣士としてこの世界を在るべき姿へ導く使命があるからな。それに……」

光の剣士は言葉を少し溜め、再び富加宮賢人へ語り掛ける。

「俺は飛羽真を信じている。あいつは最高の結末を目指している」と。

お前も分かっているんだろう?」

「……たとえそうであっても、俺の心は変わらない」

その言葉に富加宮賢人は僅かに俯くものの、すぐに振り払って光の剣士を睨むと、剣を構える。

光の剣士も諦めたようにワンダラーライドブックを取り出し、そのページを開いた。

『エピソードー 全ての色で戦え』

「変身」

そしてバツクルにワンダラーライドブックへ装填し、その身を変身させる。

『最光発光!』

『Get all colors! エックスソードマン!!』

変身を見届けると、まず動いたのは富加宮賢人だった。勢いよく駆け出し、闇黒剣月闇を光の剣士へ振るう。

しかしその一撃を最小限を動きで躲すと、光の剣士は反撃に刺突を放つ。だがそれも闇黒剣月闇によって逸らされた。

ここである二人が戦うのは構わない。むしろ消耗し合えば、聖剣の回収も円滑に進む。しかし、だからといって油断するわけにはいかない。闇の剣士の狙いが聖剣の封印である以上、私の煙叡剣狼煙も狙われる。光の剣士も私達と敵対関係にあるから、隙を見せるわけにはいかない。

そして……

「……言葉を交わせど争い合う。やはり悲しいものですね。ですが、私のやるべきことは変わりません」

そう言っただけの間にか、光の剣士の背後に立っていた慈愛の剣士が剣を振り下ろす。

「くっ!」

僅かに反応が遅れ、光の剣士はダメージを負うが、その衝撃を利用して、その場から距離を取る。そして光の剣士と言う壁が無くなったことにより、今度はカリバーが攻撃の勢いで動きが止まった慈愛の剣士へと斬りかかるが、命中すると思った瞬間、幻の剣士の姿が掻き消

える。

だがカリバーは慌てることなく、闇黒剣月闇をしつかりと構えると、不意に誰も居ない空間へと剣を振るった。

―ガキイン！―

それと同時に響き渡る甲高い音。それは聖剣同士がぶつかる音だった。

「っ！」

姿を消していた慈愛の剣士が姿を現す。軋む音を立てながら鏢迫り合いを繰り広げる二人。

これは好機！

「はあっ！」

「ふんっ！」

私がかリバーへ仕掛けると同時に、意図を察したタルワールも、幻の剣士へ攻撃を放つ。

だが寸前に気付かれ、二人は互いに剣を押す力を強め、その反動によって跳躍し、私達の攻撃を躲す。

さらに攻撃が避けられたことで体勢が崩れたタルワールへ最光が剣を振るう。

「ぐっ！」

斬撃を受け止めはしたものの、追撃で放たれた蹴りをまともに受け、タルワールは転がる。私はその姿を視界に捉えつつも、目の前に居る剣士達から視線を外すことはしない。

厄介ですね。誰かに攻撃を仕掛ければ、別の者から攻められる。完全な乱戦。この状況で聖剣を回収するのは難しい。

『Open Gate』

そう考えていると、突然ブックゲートが開いた。

「ユーリ！ 賢人！」

そこから姿を現したのは、あの煩わしい炎の剣士、神山飛羽真と組織を裏切った二人の剣士、尾上亮、大秦寺哲雄。

光の剣士の支援に来たのだろうか。しかしこれで、私達が持つ数の有利も消えたことになる。その事実を苛立ちと共に歯噛みする。

「あいつは……」

「行くぞ、尾上！」

私の姿を見て、戦意を露にする二人の剣士は、ワンダラーライドブツクを取り出すと、それぞれの聖剣に装填する。

「変身！」

『一刀両断！ ブツた斬れ！ドゴ・ドゴ・土豪剣激土!!』

『銃剣撃弾！ 銃でGO GO！ 否、剣でいくぞ！ 音銃剣錫音!!』

変身した二人の剣士が狙うのは、私。

「おらあつ！」

「はっ！」

土豪剣激土の力強い振り下ろし。音銃剣錫音の素早い斬撃。その二つが私を仕留めるべく放たれます。

「無駄です」

ですが、その攻撃は通用しません。私は体を煙に変えバスターの攻撃を躲すと、スラッシュの背後に周り刺突を放つ。

「ぐあつ！」

ダメージをまともに受け、膝を付くスラッシュ。この男は聖剣の鍛冶師という厄介な存在だ。今のうちに力を削いだ方が良い。

「させるかっ！」

しかし、いつの間にか接近していた光の剣士によって受け止められる。さらに光の剣士は反撃と言わんばかりに、バックルを操作する。

『移動最光！ 腕最高！ Full color goes to

arm!』

「はあつ！」

強化された腕による斬撃。煙に変化する暇もなく、その一撃をまともを受けてしまう。

「くうっ!!」

衝撃で意識が若干揺さぶられるものの、ここで朦朧としている暇はない。

追撃を放つため、こちらに向かってくる光の剣士。その攻撃に対抗するため、私は急いで剣を構えようとした、その時、

「ふっ！」

突如として横から何者かが光の剣士に襲い掛かる。その攻撃をガードするため、光の剣士の動きが止まりました。

その攻撃を仕掛けたのは……

「あなたもまた、使命に囚われし人。故に私が救いましょう」

そう言つて幻の剣士は光の剣士と相対する。

別の方向へ視線を向ければ、そちらではタルワールと富加宮賢人が激しく争っているのが分かる。神山飛羽真はどこか複雑そうな表情でそちらへ視線を向けるだけ。

これなら私は、土豪剣激土と音銃剣鈴音に集中できます。

「今のうちにさっさと決めましょう」

こちらを睨む二人の剣士に煙叡剣狼煙の切っ先を向けながら、スィッチを2度押す。

『狼煙霧中！』

「行くぞ大秦寺！」

「ああ」

『玄武神話！ ドゴーン！』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！ イエーイー！』

この一撃で倒す。必殺の構えを取る私に対抗するように、バスターとスラッシュもそれぞれの聖剣にワンダーライドブックを読み込ませる。

そして互いに技を放つのは同時でした。

『煙幕幻想撃！』

『激土乱読撃！ ドゴーン！』

『錫音音読激！ イエーイー！』

私の放った真紅の斬撃と、二人の剣士が放った一撃。渾身の力が込められた必殺の大技がぶつかり合う。まさにその時でした。

―ドガアアンツ！！―

「なっ!?!」

突如として何かが空中から飛来したかと思うと、私と二人の剣士の間に落下し、放たれた斬撃を飲み込みました。

その衝撃音に思わずその場に居た誰もが注意を奪われます。ですが私にははつきり見えました。落下したそれが、紫色の閃光を身に纏っていたことに……。

「ははっ、何か面白そうなことになってるね」

この目で見るのは初めての姿。しかしその話はよく知っていました。

世界を滅ぼそうとした破滅の剣士の一人。組織の大敵である邪悪な存在。

「折角だから、私も混ぜて貰おうかな」

仮面ライダーシャムシール
強欲の剣士の姿がそこにありました。

第19章 求める力、戦う意味。

【SIDE：エドナ】

剣士達が争い合う戦場の真ただ中へと飛び降りる。

ロレラの行動を観察していれば、それを止めようと剣士達が集まってくるという予想は当たっていた。おかげで、目当ての剣士3人を見つけることが出来たのだから。

しかし、それにしてもまさかの剣士同士が争い合うという状況。結局、幾らお題目を掲げようとも、所詮は人間ってことなのだろう。

まあ、そんなことはどうでも良い。これで残り二つ。

「強欲の剣士ですか……」

「っ!!」

私の姿を視界に入れた煙の剣士が、忌々しそうに呟く。その隣にいる懐かしい剣を携えた剣士も、敵意を隠すことなく、私を睨んでいた。他の剣士も、私の出現に警戒を露にする。

ただ一人、炎の剣士だけは変身もせず私の姿を呆然と見ているだけなのが、少し気になるけど。

「さてと……」

まあ、それは別にどうでも良い。今の私の狙いはそこじゃない。

「ねえ、その光の剣士」

剣先で指すと、光の剣士は敢えて構えを取らず、返答する。

「何だ？」

「私は別に戦いに来たわけじゃ無いんだよね。ただ、その力を私にくれない？」

私が欲しいのは、光の聖剣の力。それだけ手に入れられれば、ここにいる意味は無い。

しかし予想通り、その問いかけに光の剣士が応じることは無かった。

「無理だな。お前がこの力を手に入れて何をしようとしているのかは分からないが、少なくとも世界を守るためというわけじゃ無いんだろっ？」

「そうだけど？」

「なら、渡すわけにはいかない。この力は世界を守るためのものだからな」

相変わらず、決まり切った答えに呆れながら、私は改めて剣を構える。

「なら、あまり好みじゃないけど、力づくでも貰っていくよ」

振り下ろした餓欲。それは光の聖剣によって防がれる。だけどそれで止まらない。さっきまでの戦闘を見て、私の方がスピードが上なのは分かった。だから連続攻撃で体勢を崩す！

「くっっ！」

「……」

私と光の剣士の戦闘を見て、いち早く駆け付けようとした音の剣士。しかしその前にロレラが立ちはだかる。

「目を覚ませ、賢人！」

「……これは世界を守るためなんです」

そして土の剣士も闇の剣士と相對しているのが見える。

残された炎の剣士は未だに動かず。そして煙の剣士と毒の剣士は

……

「ここは一度引きますよ」

「ちっっ！」

『狼煙霧中！』

放出した煙の中へと姿を消していく煙の剣士。

「何だ、逃げるんだ」

舌打ちをしながらも、彼女に付き従う毒の剣士の背に向け、私はポツリと呟く。

「っ！」

その言葉に怒りを態度で表しながらも、言葉を返すことなくそのまま毒の剣士もまた煙の向こう側へと消えていった。

まあ、これで戦況は変わらない。邪魔な他の剣士達は、それぞれ戦っている。私は光の剣士に集中できる。

「その聖剣の力、中々使ってくれないんだね」

「ああ、お前の聖剣の能力は聞いたからな」

欲望剣餓欲の力、ありとあらゆる聖剣の力を吸収し、己のものとする能力。それを警戒して、思ったように光の聖剣の力を発揮してくれない。

「だけど……」

「これならどうかかな？」

『餓欲居合……』

『黙読一閃！』

「くっ！」

横一閃に放つ斬撃。しかしそれを光の剣士は跳躍して回避する。だけどそれは予測していた。

『ムゲンウロボロス！』

ワンダーライドブックの力によって生まれる蛇状のエネルギー。それが不規則な軌道を描きながら、空中の光の剣士へと向かう。

空中なら上手く動くことは出来ない。さあ、光の聖剣の力を！

光の剣士はじつと自らに向かってくる蛇を見つめると……

「はっ！」

光の剣士は体を捻りながら、右手の聖剣と左腕の顔のようなものであらゆる方向から迫る蛇を斬り伏せた。

一分の無駄も無いその動きはまるで蝶の様。かつて剣士として鍛えていた身として、思わず惚れ惚れとしてみまいそうな動きだった。

『移動最光！ 脚最高！ Full color goes to leg！』

しかしそれに見惚れている暇は無い。

光の剣士がワンダーライドブックを操作すると同時に、左腕の装甲が右足へと移動したかと思うと、着地と同時に、こちらへと飛び掛かる。

「はあっ！」

「んっ！」

強化されたであろう脚力による突進の勢いを止めきれず、押し込まれるが、壁にぶつかる直前に耐えきる。しかし互いの動きが止まった

瞬間に、今度は腹部に衝撃を受け、私の体が浮かび上がる。

「ぐっ!？」

突き刺さったのは右足の蹴り。思わずたじろぎ、防御が解けた隙を狙って、光の剣士は私に向かって幾度と剣を振るう。

一撃、二撃、三撃と、重ねるたびに身に纏った鎧から火花が散り、私の体が切り裂かれていく。

ああ、痛い。だけど……

「その程度?」

「っ!」

私の体に光の聖剣の刀身が食い込むのを感じながら、私は前に出て食欲を振るう。その一撃は僅かに光の剣士に掠るに留まったが、距離を取ることに成功した。

何度も切り裂かれた私の体。しかしすぐにワンダライドブックと聖剣の力で修復されていく。

「その程度のダメージじゃ、私は止められないよ」

痛みは癒えずとも、体は万全だ。すぐに剣を構え、光の剣士を睨む。

「何故だ?」

そんな私に、光の剣士は口を開いた。

「お前の目的がただ自分が楽しむためだけなら、何故そこまでして戦おうとする?」

……何かめんどくさいこと言って来た。

「前にも言ったけど、答える気なんて無い!」

面倒な回答は無駄だ。早々に切り上げ、私は再び光の剣士へと斬りかかろうとした、その時、

『必殺リード! ジャオウドラゴン!』

『月闇必殺撃! 習得一閃!』

「!!!」

闇の剣士が放った一撃。四体の金色の竜を刃に纏い放たれた漆黒の一撃が、周囲を薙ぎ払う。

寸前に気付いた私と光の剣士は回避し、ロレラと音の剣士も防御してやり過ぎず。

しかし、

「ぐあああああつ!!」

闇の剣士の間近にいた土の剣士は、その攻撃を受けきることが出来ず、まともに受けたその身は宙に舞う。

「かはっ!?!」

そして地面に強く叩きつけられた衝撃で、手から聖剣が零れ落ちる。

その土の聖剣に、闇の剣士はゆっくりと近づくと、ベルトを操作する。

『ジャオウ必殺読破!』

『ジャオウ必殺撃! You are over!』

ワンダーライドブックから鳴り響く不気味な音。それと同時に振り下ろされる聖剣の切っ先。

—カチイン—

土の聖剣に闇の聖剣が触れた音が響く。

しかしそれと同時に、切っ先から放たれた闇の鎖が土の聖剣を絡め捕る。

「これで一つ……」

突然の事象にその場に居た全ての目が釘付けとなる。

ただ、私はその現象が何なのか理解していた。

聖剣の封印。十一本の聖剣の中で、闇の聖剣だけが持つ力。ありとあらゆる聖剣の力を封じ込め、その機能を閉ざす能力。

もしあれが私の食欲に使われれば、私も変身する力を失い、目的の達成は難しくなるだろう。

……厄介だな。まあ、対策出来ないことも無いけれど。

「ん?」

先程までずっと呆然としていただけの炎の剣士の気配がおかしいことに気付く。

「また一緒に戦えると思ったのに……」

陰鬱な気配が彼を覆う。発せられる感情は強い悲しみ。

「何でなんだ、賢人っ!!」

「ああ、逃げられたか」

折角、光の剣士に見たことも無いワンダーライドブックという獲物を見つげられたというのに、それを逃したことに少々苛立ちを覚える。

まあ良いや。どうせすぐに手に入れられるはず。

そんなことを考えていると、ロレラは変身を解いて、どこかへと歩き出す。

「また行く気？」

「ええ、苦難に喘ぐ声が止むことはありませんから」
本当にロレラは変わっている。

どこまでもあんな人間を救おうとするなんて、奇特としか言いようが無いだろう。まあ、別に否定する気は無いけど。

そのロレラは振り向いて、口を開く。

「あなたの心も、きつと救いましょう。永久の安寧によって」

「……ふうん、相変わらずだね」

600年前から変わらない。ずっと私とバハトのことも救うと言って、世界の破滅を目指す。

その在り方は、ただのエゴイストだ。ただ、それをロレラは自覚しているだけ、他の剣士達偽善者と比べてマシだろうけど。

ロレラの姿が小さくなつていくのを見届けた後、私もまた背を向けてゆっくりとその場から離れる。

そして地下へと続く階段を見つけ、それを半ばまで降りた後、足を止めた。

「それで、いつまで付いてくる気？」

「おや、気付いていたのですか」

振り向いた先に居たのは、暗い緑色の衣裳を纏った男。

この顔には見覚えがある。剣士の長年の宿敵であり、私も幾度か顔を合わせ、剣をぶつけたことがある。その男の名は、

「何の用、ストリウス」

メギドの幹部の一人であるストリウスは、どこか暗い笑みを浮かべ、私に近づいてきた。

「あなたにちよつとした提案をしようと思ひまして」

「提案？」

こいつは油断ならない相手だ。他のメギドの幹部であるレジエルやズオスは、単純な力で捻じ伏せることを得意とするのに対し、このストリウスは昔から何を考へているのか分らない。

もしもの時の為にいつでも変身できる準備をする。

そんな私に、彼はこう語つた。

「私と手を組みませんか？」

第20章 シナリオを、変えるべく。

【SIDE：エドナ】

「ガアアアアッ!!」

「止めろ、飛羽真!」

「邪魔をするなアッ!」

「行かせはしない!」

私の眼下に広がる、二つの戦い。

一つは暴走した炎の剣士と、それを止めようとする光の剣士。

一つは禍々しい力をその身に宿した始まりのメギドの一人であるレジエルと、彼の行く手を阻もうとする音の剣士。

どうやらレジエルは、あの炎の剣士に執心のように、今にも飛び掛かろうとするところを音の剣士が抑えている。

そして炎の剣士の方も、野生の獣のような雄叫びを上げながら、目につくもの全てに敵意を向けている。

それぞれが雄叫びを上げながら、剣をぶつけ合うその光景を見下ろしながら、私は手にしたパンを口にする。

「……」

片や力に吞まれ、片や怒りに吞まれ、そして荒れ狂う二人に翻弄される剣士達。それはまさにこの世界の縮図と言って良いのだろう。

「悲しいことです……」

そんな戦いに乱入する一つの影。

「っ、慈悲の剣士!」

その姿を見た音の剣士が忌々し気に口にした。

「……あなたから感じる強い悲しみ。今、それから解き放ってあげましょう」

そう言うと、ロレラはワンダーライドブックをドライバーへ装填し、抜刀する。

『抜刀!』

『エンドレスマーメイド』

『夢幻! 魅惑の剣が揺らめく!』

光に包まれ仮面ライダーブロードへと変身した彼女は、その聖剣の切っ先を暴れる炎の剣士へと向ける。それに気付いた光の剣士が、凶行を止めようとする。だが、

「グアアアアアアっ!!」

「っ!!」

視線を逸らした一瞬を突かれ、暴走した炎の剣士のドライバーから伸びた白骨化した腕で薙ぎ払われる。さらにその腕は自在に伸び、自らに向かってくるロレラを貫こうとする。

「ふっー」

しかしそれがロレラの体に触れることは無かった。

『エンドレスマーメイド』

ロレラの体は一瞬にして泡となってその場から消えたかと思うと、いつの間にか炎の剣士の背後へと回り、その背を斬りつける。

「グガアっ!!」

寸前に気付いて自ら地面へと転がったため、そのダメージは大きくは無い。しかしすぐに追撃の斬撃が放たれ、今度は肩口から袈裟斬りにされる。

「ガアっー」

しかしながら青白い骨のような装甲はかなりの耐久性を持つようで、深い傷を付けることは出来ず、さらに反撃と言わんばかりに握りしめた聖剣をロレラに向かって振るう。

「ふっー」

素早い一撃。だが不安定な体勢から放たれた力任せに振るわれた乱雑な攻撃は、ロレラがすつと後ろに下がるだけで躲せる代物でしか無かった。

互いに距離を保ちながら向き合う。すぐにまた、二人は相手に向かって飛び掛かる準備を整えた、はずだった。

「アっ……」

おや、とその異変に気付く。

突如として暴走していたはずの炎の剣士の動きが止まり、剣を握った腕から力が抜け、その場で気絶したかのように立ち止まったのだ。

思わずその場に居た全員が、炎の剣士に注目し動きを止める。ただ一人を除いて……

「炎の剣士いつ!!」

「な、ぐあっ!!」

ただ一人、怒りに任せ暴れまわるレジエルは炎の剣士の変化に気を取られることなく、自らの前に立ちはだかっていた音の剣士に痛烈な一撃を見舞うと、一直線に炎の剣士へと襲い掛かる。

「させるか!」

それを止めるべく光の剣士がレジエルの前に立ちはだかるが、強大なレジエルの力に押され、その場に止めるのがやっと。

そしてそれは、彼女を止める存在が居なくなったことを指していた。

「はっ!!」

「っ待て!?!」

倒れ込んだ音の剣士が制止の声を上げるが、その声が届くことは無い。

ロレラによる幻世剣夢幻による致命的な一撃が、ただ立ち尽くす炎の剣士へと振り下ろされる。

—ギインツ!!—

しかし、その一撃が炎の剣士を仕留めるまさにその時、彼を守るように青い影が突如として割り込んだ。

「飛羽真君はやらせません!!」

「水の剣士ですか……」

間に入ったのは、青い鎧を纏った水の剣士。彼の聖剣が、寸前でロレラの聖剣から炎の剣士を守った。

さらに見知らぬワンダーライドブックを取り出すと、それをドライブバーへ装填する。

『流水抜刀!』

『R h y m i n g ! R i d i n g ! R i d e r !』

『獣王來迎! R i s i n g ! L i f u l l ! キングライオン大戦記!』

『それすなわち、砲撃の戦士!』

「僕は僕の信じる道を進みます。この水勢剣流水に誓って!」

強大な力を宿した装甲を身に纏った水の剣士はそう宣言すると同時に、両肩についた大砲から光弾を放ち、ロレラとレジエルを迎え撃つ。

「邪魔ダあつ!!」

「ぐっ!」

レジエルが手にした大剣で、近くにいた光の剣士もろとも光弾を振り払う。奴からすれば、邪魔なものを払いのける程度の動き。しかしそれだけで衝撃波が発生し、それを間近で受けた光の剣士は体勢を大きく崩し、続けざまに放たれた斬撃をその身に受け、倒れこむ。

「何と恐ろしく、哀れな姿なのでしよう……」

レジエルと同じく光弾を防ぎ切ったロレラも、怒りのままに暴れ狂う奴の姿を見て、改めて脅威と認識したようだ。その上で、動きを見せない炎の剣士よりも優先して対処すべき相手と考えたのか、レジエルへ剣を向ける。

「その怒りも苦しみも、全て終わらせましょう。幸福な夢と共に……」

『慈悲深き眠り姫!』

『幻惑一突!』

そう言つてロレラは、ワンダラーライドブックの力を宿した聖剣を構え、レジエルに向かって真正面から斬りかかる。

しかしいくら覇剣を所持しているとはいえ、あのレジエルに向かって正面から立ち向かうのは愚行。レジエルも新たな邪魔者を排除すべく、大剣を構えると

「消えろオツ!!」

たった一振り。

しかしその一振りは、灼熱の業火と轟く雷を纏った斬撃となつてロレラの体を切り裂く。

だけど、ロレラは自らの力を過信しては居なかった。

『エンドレスマーメイド』

先程、炎の剣士に対して見せたように、彼女は再びエンドレスマー

メイドの力を利用した幻覚によって、自らの姿を隠していた。

そして幻へと向かって放たれた斬撃は、ロレラの実体を捉えることは無く、悠々と攻撃を避けたロレラの聖剣の一撃が無防備となったレジエルを捉えた。

「グっ……」

剣で刻まれた傷跡から、茨が伸びる。

スリーピングプリンセスのワンダライドブックの力を宿した聖剣は、あらゆるものを眠りに導く力を持つ。それもあのワンダライドブックの力を用いない限り、永遠に覚めることの無い眠り。

ロレラ曰く、全てが終わる時、誰も恐怖や絶望を感じずに消えることが出来るようにという、慈悲によるもの。実際、あの技を受け、眠りから目覚めた者は居ない。それほどまでに、あの技が与える夢は甘いのだろう。

茨が徐々に伸び、レジエルの体を包もうとする。すぐに奴もまた、永遠の眠りに誘われることだろう。そう思っていた。

「……グ」

「？」

「っ邪魔ヲするナアアアアっ!!」

しかし、レジエルが突如として咆哮を上げたかと思うと、体を覆おうとしていた茨が炎上し、燃え散っていく。

「な!!」

あまりのことに唾然とするロレラ。それによって隙が出来た。

「ハアアアアッ!!」

「っ!?!」

周囲を薙ぎ払うように放たれる雷撃。それをまともに受け、ロレラは膝から崩れ落ちる。何とか剣を支えにするものの、受けたダメージが大きく、回復には時間が掛かりそうだ。

そんなロレラを無視して、レジエルは炎の剣士へと歩みを進める。

「飛羽真君には近づけさせません!」

『キングライオン大戦記!』

『Splash Reading!』

「ライオニックフルバーストお!!」

そのレジエルを止めるべく立ちはだかる水の剣士が放った、獅子を模した斬撃。並みのメギドなら何体相手であろうと、一撃で屠るだろう必殺の技。

「邪魔だあつ!!」

それすらもレジエルは一刀の下に薙ぎ払う。

怯むことなく水の剣士はレジエルを止めるべく攻撃を放っていくが、その攻撃の全てをレジエルは容易く防ぐと、目障りだと言わんばかりに今度は水の剣士へ向けて漆黒の斬撃を放つ。

「退けえつ!!」

「ぐああああつ!!」

大きなダメージを受けよろめく水の剣士へ、二度、三度と次々に斬りつける。

それでもなお立ち上がることを止めない彼を援護すべく、光の剣士と音の剣士も駆けつけるが、完全に力を解放したレジエルの前には為す術もなく蹂躪されていく。

そしてさほど時間も立たないうちに、三人は倒れ込み、変身が解除される。

「炎の剣士い!!」

最早、レジエルを止める者は誰も居ない。

あの炎の剣士も遂にここまでか。そんなことを思いながら戦場を見つめていた私は、直後の光景に目を疑うこととなる。

「ぐっ!!」

突如として炎の剣士の周囲が燃え上がり、その勢いに押されてレジエルが後退する。

そして炎の中から現れたのは生身の炎の剣士。その手には、私も知らないワンダーライドブックが握られている。

「何それ……?」

思わず口から零れた言葉は風に掻き消える。

そんな私の視界の中で、炎の剣士は手にした二冊のワンダーライドブックを組み合わせドライバーへセットすると、勢いよく火炎剣烈火

を抜き放った。

「変身!!」

『烈火抜刀!』

『バキ・ボキ・ボーン! メラ・メラ・バーン! Shake Han
ds!』

『エレメンタルドラゴン!!』

『エレメントマシマシ! キズナカタメ』

それはまるで炎そのものを纏ったかのような姿。強大な力を宿しつつも、それに振り回されることなく、完全にコントロールしていることが、見ているだけで分かる。

「……悲しみが消えた? 一体何故?」

呆然とするロレラと同じように、私もこの光景に目を疑っていた。だけどその理由は異なる。

「はあっ!!」

変身した炎の剣士は、三人掛かりでも一方的に圧倒していたレジエルを相手に、互角以上……いやむしろ優勢に戦っていた。

レジエルが放つ攻撃を、同じ属性でそれ以上の威力の技で打ち返す。それはまさに御伽噺に登場する勇者のような姿。

見るものに勇気を与えるその姿に、思わず私は

「……気に食わない」

苛立ちを露にする。

「ふっ!!」

『必殺読破マシマシ!』

『烈火抜刀!』

そしてレジエルに引導を渡すべく、あるいは彼の苦痛を終わらせるべく、炎の剣士は渾身の力を込めて聖剣を構える。

「森羅万象斬!!」

『エレメンタル合冊斬り!』

「ぐううううっ!?!」

放たれた斬撃を受け両断されたレジエルは、苦悶の声を上げると、光と共に爆散する。

それは一つの歴史の終わり。長きに渡って数多のメギドを生み出しては世界を恐怖に陥れてきた三体の怪物の一角を打倒する。剣士にとつては悲願の光景だった。

「……炎の剣士、あなたは一体？」

やっとダメージが回復したロレラは、未だにその光景に驚きを抱きつつ、ここで戦っても不利になるだけと判断したのか、誰にも気付かれることなく姿を消す。

私もまた、ひっそりとその場を後にしながら、少し前にあの男が言っていたことを思い出していた。

「確かにあいつの言っていた通りになった。つまりは……」

炎の剣士の活躍が定められていたかのような、都合の良い展開。あまりにも出来すぎたシナリオ。

ああ、本当に腹立たしい。あれが事実なら、私は、そしてこの世界は何と下らない事だろうか。

「良いよ、ストリウス。あんたの思惑に乗ってあげるよ」

私は一人、薄暗い道を歩き続ける。

「全部壊してやる。こんな下らない物語なんて」

決意を胸に、私は欲望剣餓欲の柄を強く握りしめた。